Y994
J1774

啓吉物語

菊池寛著

日本文学選

光文社

特

日本文學選

啓吉物語

菊池寛

光文社

元旦や
啓吉も
世に古簞笥

龍之介

Y994-J1774

目次

大島が出來る話……五
無名作家の日記……二五
父の模型……六五
葬式に行かぬ譯……九四
出世……一二七
肉親……一四五
解說……宇野浩二……一六五

大島が出來る話

苦學とそしなかつたが、他人から學資を補助されて、辛く學校を卒業した讓吉は、學生時代は勿論、卒業してからの一年間は、自分の衣類や、身の廻りの物を、氣にし得る餘裕は少しもなかつた。

學生で居た頃は、彼はニコ〳〵の染絣などを着て居た。高等程度の學生としては、粗服に過ぎて居た。が、衣類に對しては、無感覺で無頓着であつた讓吉は、自分の着て居る絣が、ニコ〳〵であるか、何であるかさへ知らなかつた。

そして豪放と云ふ看板の下に、自分の粗服を少しも氣に掛けまいとした。實際また氣に掛けても居なかつた。

が、讓吉が一旦學校を卒業してからと云ふものは、服裝を調へる必要を痛切に感じ始めたので

ある。彼が學生時代から、ズーツと補助を受けて居る、近藤氏の世話で、某會社に入社した當初は、夫が不快になるまで、自分の服裝の見すぼらしさを感じたのである。

夫は夏の終であつたが、彼は、初めて出社すると云ふのに、白地の木綿絣を着て居るに過ぎなかつた。

課長と、初對面の挨拶が濟んでから、彼は同僚となるべき人々に、一々紹介された。

「岡村君に吉川君」と、課長は最初に、二人の青年を紹介した。岡村と云はれた青年は、中肉の身體にスツキリと合つて居る、琥珀色の、瀟洒な夏服を着て居た。そして、手際よく結ばれた玉蟲色のネクタイが、此男の調つた服裝の中心を、成して居た。吉川と云ふ方は、明石縮の單衣に、藍無地の絽の夏羽織を着て、白つぽい絽の袴を穿いて居た。二人とも、五分も隙のない身裝である。夏羽織も着て居ない讓吉は、此の二人の調つた服裝から、可なり不快な壓迫を受けた。夫は、對手が人格的に、若しくは學問的に、また道德的に、自分に優越して居る爲に受くる壓迫とは、全く違つて居る。考へて見れば下らない事かも知れなかつた。が、夫にも拘らず、その壓迫は、可なりに重苦しく、不快なものであつた。岡村と吉川との、二人ばかりではなかつた。その後から紹介された、十五六人の人々は、一人として、讓吉のやうな、見すぼらしい樣子はして居

なかつた。

讓吉はその後、一週間ばかり、毎日自分の服裝の不備に就いての、不快な意識を續けて居た。其の中に漸く、讓吉の世話になつて居る、近藤夫人の好意になる背廣が、出來上つたのであつた。

自分の家が貧しい爲、何等の金錢上の補助を仰ぎ得ない讓吉に取つては、近藤夫人が何かにつけて唯一の賴りであつた。讓吉が高等商業の豫科に在學中、故郷に居る父が破産して危く學しようとした時、救ひ上げて呉れたのは、讓吉の同窓の友人であつた近藤の父たる近藤氏であつた。夫以來讓吉はズーツと、學資を近藤夫人の手から仰いで居た。が、近藤夫人の讓吉に對する好意は、ただ學資の補助と云ふ、物質的の恩惠には、止まらなかつた。

讓吉に對する夫人の贈與なり注意には、常に溫い感情が、裏附けられて居た。その溫情を讓吉は、沁々と感じて居るのであつた。學資ばかりでなく、讓吉は、衣類や襯衣(シヤツ)や、日用品の殆ど凡てを、近藤夫人の好意に依つて、不自由したなかつたのである。

學校を出てからも、讓吉は近藤夫人の庇護なしには、何うともする事が、出來なかつた。

「富井さんも、愈々日が定(きま)つたのなら、孰(いつ)れ洋服が入るでせうから、三越へさう云つてお調(しら)

へなさい。少しいゝのを調へた方が結局は得ですから」と、讓吉が、入社が定まつた事を報告に行くと、夫人は、祝辭を述べてから、直ぐかう云ひ出した。讓吉は夫人に金を借りてでも、洋服を新調したい積りであつたから、夫人のかうした好意は、骨身に浸みる程、有難く感じたのである。無論、近藤夫人の好意は、洋服丈には止まらなかつた。

「色々の身の廻りの物が入るでせうから」と、云ひながら、夫人は新しい十圓札を三枚、讓吉の前に差し出した。

讓吉は、過去に於て幾度、夫人の華奢な手から、かうした贈與を受けたかも知れない。その度に讓吉は、夫人から受くる恩惠に狎れて、純な感謝の念が、一回毎に、薄れて行かぬよう、絶えず自分の心を戒めて居た。讓吉は、此日三十圓を受けたがら、卒業してからも尙、夫人を煩はして居る事を、少しは情なく思つたが、夫人に賴らずには、實際何も出來なかつた。が、夫人から、金錢の贈與を受ける事丈は、もう今度でおしまひにしたいと、心の裡で思つた。

夫人の好意に依る、背廣と三十圓とは、讓吉が今迄感じて居た、不快な壓迫に對する、最上の對症藥であつた。入社した二三週間目からは、讓吉も、自分の服裝に相當の自信を以て、快活に働いて居たのである。

その內に、讓吉の生活にも、僅かながら餘裕が生じて來た。殊に、學校を出た翌年、近藤夫人の盡力で結婚した以來は、更に月々相當の餘裕を生じた。夫人は、讓吉の爲に相當の資產家の娘を世話して呉れたからである。

夫に連れて、讓吉の服裝も段々調つて來た。結婚の時に、近藤夫人は讓吉の爲に、フロックコートを新調して呉れたし、その外にも讓吉は、四五着の背廣やモーニングを、持つやうになつた。和服も、上物ではなかつたが、時候に相當した物を、一二着宛、調へて行く事が出來た。殊に彼の妻は、女性に特有な、衣類に對する敏い感覺と、執着とを持つて居た。

「もう、セルを着て居ないと、見つともないわ」と云ひ出すと、彼の妻は、讓吉がセルを買つてしまふ迄は、五月蠅くその提言を繰返した。讓吉が金の都合で、何うしても應ぜぬ時などは、自分の小遣錢で、默つて買つて來て、讓吉に內證で縫つて置いた。さうして、讓吉が改まつて外出する時などは、「是を着て行かない！」と、不意に彼の眼の前に、仕立下ろしの衣物を、擴げて見せたりした。

が、讓吉の力でも、彼の妻の力でも、何うしても、出來ない着物があつた。夫は大島絣の揃である。殊に讓吉の妻は、彼の爲に大島を買ふ、熱心な主張者であつた。

「男には大島が一番よく似合つてよ。貴方も、是非大島をお買ひなさい、夫も片々ぢや駄目だわ。何うしても羽織と、着物とを揃へなけりや。是非お買ひなさいよ。一疋買ふといゝんだから、今年の秋迄には是非お買ひなさいよ。男は大島に限るわ」と、彼の妻は、着物の讃が出る度に、屹度大島を讃美したが、譲吉の月々の餘裕と云つても夫は二三十圓と、纏つた金でなかつた。又彼の妻としても、一度に三四十圓も出す力は持つて居なかつた。從つて一疋六十圓以上もする大島は、當然譲吉夫婦の購買力の上に在つた。

「大島を買ふ金なんかあるもんか」と、譲吉が妻のしつこい提議に對して、吐出すやうに云ふと、

「だから貯金をなさいよ。貴方は喰道樂だから、お金が蓄らないのよ。毎月五圓宛貯金をなさいよ。そしたら、今年の秋迄には、大島が出來るわ」、彼の妻は、よくこんな事を云つて居た。譲吉も冗談に、

「ぢや、その『大島貯金』をでもするかな」と應じた。が、一種の享樂者である彼は、着物を購ふ爲に、貯金迄する氣は、何うしても起らなかつた。が、彼は妻に依つて、大島の美點と長所とを詳細に説かれてからは、段々大島に對する執着を覺えて來た。銀座通を歩いて居る時など、よく呉服屋の見本棚の前に足を止めて、其處に飾られてある、縞柄のよい大島絣を、熟視して居る自分の姿に氣が附いて、思はず苦笑する事も屢々あつた。

その中に秋が來て、多物を着るシーズンとなつても、大島の揃は、中々出來る樣子は見えなかつた。妻はよく譲吉に、

「貴方のやうに、ケチ〳〵して居ては、何時が來たつて買へやしないわ。少し無理をしてゞも、思切つて買ふといゝんだわ。買つた後で餘儀なく儉約して埋合せを附ければいゝんだわ」と、云つた。金遣ひにかけては、貧家に育つた譲吉は、可なり小心であつた。とても疾病などの準備として預けてある貯金を、引き出して迄、大島を買ふ氣にはなれなかつた。また彼の妻程大島に對して強い執着を、持つても居なかつた。

譲吉に取つて、大島の揃は出來ずに、年が暮れた。すると、新年になつて、年始旁々譲吉の家を訪ねた友人の杉野は、仕立下ろしと見える新しい大島の揃を着て居た。杉野と、もう一人の友人の荒井と、譲吉とは、高商の同窓で社會に出てからも、同じ位の位置に就いて居た。そしてお互の間に、意識はしなかつたが、色々な點に於て競爭の感情が動いて居ないでもなかつた。三人の中で、一番早く眼鏡を金縁にしたのは、譲吉であつた。すると、一月ばかりして荒井が今迄の

鐵縁を金に替へて居た。杉野も亦何時の間にか、金の縁無しを掛けて居た。が、大島を一番早く着たのは、確に杉野に相違なかつた。

「何だ！　大島を着て居るぢやないか」と、讓吉が思はず嘆賞の言葉を洩らすと、杉野は、

「何うだ、全盛だらう」と、一寸得意さうな顔をした。そして、讓吉を可なりに羨しがらせた。

が、冬が去り春が來ても、讓吉に大島は出來なかつた。殊に、姙娠をして居る彼の妻の產期が、近づいて來るに從つて、色々な出費が嵩み、大島を買ふ事をあれほど強く主張した妻も、もう諦めてしまつたらしかつた。三月に入つてから、彼の妻は到頭女の兒を產んだ。讓吉は色々の出費で貯への過半を費した。妻は猿のやうに赤い赤ん坊を抱きながら、

「もう親の衣物よりも、子の衣物をこさへなけりやいけないわ。ねえ！　美奈子！　お父さんにいい衣物を澤山こさへて貰ふのね」と、赤兒に頰ずりをしながら、讓吉に大島を買ふ事は、まるで忘れてしまつて居るやうであつた。

夫は、三月の半ば頃で、讓吉の妻が、肥立してから、まだ間もない日曜の事であつた。その日は、全く冬が去り切つてしまつたやうに、朝から朗かな日が照つて居た。讓吉は、久し振りに暢然として一日を暮して見たいと思つた。朝飯が濟むと、彼は縁側に寢轉んで、芽ぐむばかりにな

つた鴨脚樹の枝の間から、薄緑に晴れ渡つた早春の空を眺めて居た。すると、

「先生！」と、聲がして、いつもよく遊びに來る隣家の子供が、兄弟連でやつて來た。讓吉はもう三十に近かつたが子供とたわいなく、遊ぶ事が好きで、かうした來客を歡迎した。兄の方が、新しく買つたらしい、ピンポンの道具を持つて居た。そして、

「先生！　ピンポンを買つて貰つたから、しませう。隨分旨くなつたのだから」と、云つた。

讓吉は、隣家の主人に頼まれて、此の子供達に英語を、ホンの一週間ばかり教へた事があるので、兄弟は今でも讓吉の事を、先生と云つて居た。

「あ、やらう〳〵、直ぐ負かしてやるから」讓吉は實際、ピンポンには自信があつた。彼は中學時代には、ピンポンの選手であつた。

「先生！　雨戸を一つ外せませんか、臺にするんだから」と弟の方の少年が云つた。やがて、讓吉も手傳つて雨戸が一つ、縁側の上に置かれ、そして、その中央に不完全な網が張られた。が、ボールは思ふ通りには、バウンドはしなかつた。でも、段違ひに上手な讓吉は、相手の少年を交る交る、幾度も負かした。

相手が下手なので、餘り興味が乘らなかつたが、夫でも勝ち續けて居る事は、決して不快では

なかつた。その時、ふと氣が附くと、讓吉の家の門の前で自轉車が、止るやうな氣勢がした。「電報！」彼は直覺的にさう思つた。彼は電報を受け取る前に、特有な不安を以て、ピンポンのラケットを持つ手を緩めて、門の開くのを待つた。果して、夫は電報配達夫であつた。が、手に持つて居るのは、電報の紙片ではなく、赤い電話郵便の紙片であつた。彼は少し安心した。彼の友人の荒井は、何かと云ふと直ぐ電話郵便を利用する男であつた。讓吉は「荒井の奴、又何處かへ俺を誘ひだすのだな」と、思ひながら、その赤い紙片を讀み始めた。がその文句は、讓吉の夢にも、豫期しなかつた事實を報じて居た。

「コチラノオクサマガ、サクバンオナクナリニ、ナリマシタカラ、オシラセシマス」彼は、かうした文句から激動を受けながら、差出人の名を探つたが、夫は何處にも書いてなかつた。が、彼が差出人を確めようとしたのは、彼にとつては餘りに重大な事實を、承認する前の躊躇に過ぎなかつた。彼の頭には夫が何人の死を、報じてあるかゞもう的確に判つて居た。彼は廣い東京に於て、オクサマと云はれる人に、たゞ一人しか知人を持つて居なかつた。夫は云ふ迄もなく、近藤夫人である。近藤夫人の死！　夫は他の何人の死よりも、現在の讓吉に取つては、痛い打擊であつた。讓吉は赤い紙片を凝視したまゝ、一時茫然として居た。が能く見ると、發信人新橋二七八

一番と、電話番號が書いてある。是は、讓吉が、今迄に幾度も呼び出した、馴染の深い番號であつた。前よりも、一層まざ〳〵とした絶望が、讓吉の心を埋めた。

讓吉の顏が、重大な色を帶び始めたのを見ると、彼の妻は、讓吉の傍へ寄りながら、

「何處から來たの！　何うしたと云ふんです、早く云つて下さい。私心配だわ」と、焦き立てた。

「近藤の奥さんが、死んだんだ。」彼は故意に平靜を裝つて、妻に云つた。

「へエー」と云つたまゝ、妻は駭いた顏をした。が、夫は夫人の急激な死に對する駭きで、讓吉の感情とは、ピッタリ合ふものではなかつた。

「困つた！　近藤の奥さんに死なれちゃ！」と、讓吉は立ち上つて、押入れの方へ歩いた。彼は此場合直ぐ駈け附ける事が、第一の急務である事に氣が附いた。不斷着を脫いで外行きに着替へて居ると、今迄少しも出なかつた涙が、讓吉の頰を傳つた。急激な報知の爲に、掻き搜された感情が靜まりかけて、其處に恩人の死と云ふ事實が、何物にも紛ぎらされずに、彼の心に喰ひ込んで來たからである。

讓吉とピンポンをして居た、兄弟の少年は、ラケットを手にしながら、讓吉が涙をこぼして居るのを、不思議さうに見て居た。讓吉は、子供に涙を見られるのを、可なり氣恥しく思つたが、

涙は何うしても止まらなかつた。

「今晩は、歸らんかも分らないぞ。」讓吉は袴を穿きながら、妻に云つた。彼の妻は産婆の家から、歸つてまだ間もない上に、雇ふ筈になつて居る子守が、まだ見附かつて居なかつた。他人の家の離座敷を借りて居る爲に、要愼はいよ〳〵やうなもの〳〵、赤ん坊を抱へて一晩獨りで留守をする事は、彼女に取つては、可なりの、苦痛に相違なかつた。彼女は色を蒼くして、涙ぐみさうな顏をして居た。彼女に取つては、近藤夫人の死よりも、一晩留守をさゝれる事が、より大きい苦痛であつたのだ。が、讓吉が近藤夫人から受けた恩誼が、何んなに大きいかを知つて居る彼女は、讓吉がその夜歸らぬ事に就いて、何等の抗議をもしなかつた。

讓吉は、電車に乘つた。が、彼は先刻からの涙が、まだ續いて居た。三十に近い男が、電車の中で泣いて居る事は、決してよい外觀を呈する譯ではなかつた。で、彼は窓から外を見るやうな風をして、涙を時々拭つて居た。

が、過去に於て近藤夫人から受けた、好意の數々を思ひ出す度に、稍々センチメンタルな涙が、後から後からと出て來た。實際夫人は彼に取つて、此數年來生活の唯一の保證者であつた。彼と夫人との關係は「與へられる」と云ふ關係に盡きて居た。彼は近藤夫人に對して、何等の恩返しも

しなかつた。たゞ夫人の恩惠を、眞正面から受け、夫に對して純な感謝の情を、何時迄も懷いて居りたいと、思つて居た。恩返しを試むる事は、或意味に於て恩を受けた者の、利己的な要求に基づいて居る事が多かつた。恩を受けて居る事と、夫に對して感謝して居る事とに依つて、其處に溫い人情關係が作られて居る、若し恩を返してしまつたら、其處に對等の關係が生じて、以前の人情關係は、消滅してしまふのだ。また恩を返すと云ふ事は、恩人に何等かの事件、災害、不幸が起る事を、前提としなければならなかつた。從つて、恩返しの機會を待つ事は、恩人に何等かの事變が起るのを待つのと、餘り距つた心持ではないと、彼は思つて居た。

かうした心持で、讓吉は恩返しなども、少しも念頭に置かなかつた。支那の書物にある「大恩は謝せず」などと云ふのと、殆ど同じ心持であつた。只何時迄も、近藤夫人に對し、純な強い感謝の心を懷いて居たいと、讓吉は思つて居た。其上夫人は讓吉に取つて、過去の恩人であるばかりでなく、現在に於ても、讓吉の生活の、有力な保證者であつた。讓吉は、此半年ばかり生活が順調である爲に、殆ど物質上の助力を、夫人に仰いだ事はなかつたが、讓吉は心の裡で、自分が疾病や災害で、生活の困難を來たす時、必ず夫人が援けて呉れる事を信じて居た。夫は讓吉に取つて、實生活上の一つの强みであつた。讓吉が近藤夫人に對する感謝のもう一つの中心は、夫人が

譲吉に拂つて呉れた信頼であつた。譲吉は、最初高商の秀才と云ふ振込みで、近藤家の世話になる事になつたのだが、譲吉は秀才でないばかりか、可なり怠惰者に近い方であつた。そして、毎年の學年試驗には、漸く及第點を取る位であつたが、夫人は何時迄も、譲吉を秀才だと考へ、頼もしい青年だと思つて居た。譲吉は夫人の死に依つて生活の保證の一つを失つたと同時に、彼の第一の知己を失つた譯であつた。

が、譲吉は餘りに、利己的な涙ばかりを出して居た。夫人の死が、譲吉に及ぼした打撃ばかりに就いて泣いて居た。が、夫人の死に就いて、譲吉よりももつと大きい打撃を受けた人がまだ澤山あつた。夫は無論近藤氏一家の人々であつた。家庭中心であつた近藤氏の家庭では、夫人は一家の太陽であつた。夫の近藤氏が、政黨の首領として、忙しい身體である爲に、夫人は七人の子女から成る大きい家庭を、自分一人で支配せねばならなかつた。そして、夫人は母たる愛情を、七人の子供に平等に頒けて居た。譲吉はまだ十六にしかならない令嬢の雪子さんや、十一になつたばかりの瑠璃子さんが、夫人の死の爲に受くる愛情生活の破産を考へると、自分の悲しみなどは恥しいほど小さいものだと思はずには居られなかつた。

六本木の停留場で降り、龍土町の近藤氏の家の方へ歩いて居る時には、譲吉の涙は忘れたやうに乾いて居た。

譲吉は、一家が涙で以つて、濡れ切つて居る所へ、自分一人涙無しに行くのは何となく氣が咎めた。夫かと云つて一旦出なくなつた涙は、意識しては何うしても出なかつた。

が、近藤家の勝手を知つた譲吉が、内玄關を上つて、夫人の居間であつた八疊へ行くと、其場には思ひ掛なく夫人の代りに、主人の近藤氏が羽織袴で坐つて居た。譲吉は悔みの挨拶をしようとしたが、急に發作的に起つた嗚咽の爲に彼は、暫くは何うしても、言葉が出なかつた。譲吉は、自分の過度のセンチメンタリテイが、一種誇張の外觀を、呈しはせぬかと思ふと、可なり不快であつた。彼は出來るだけ早く自分の感情を抑制しようと思つたが、不思議に彼の嗚咽は續いた。而も、その嗚咽は不思議に、深い感情を伴つて居ない輕い發作で、而も餘りに大げさな外觀を持つて居た。彼は自分で自分を卑しんだ。見ると、近藤氏は右の手を、額に加へて、新しく滲み出ようとする涙を押へて居た。平生殆ど喜怒を現した事のない主人の、男性的な涙を見た時は、譲吉は愈々自分のセンチメンタリテイを卑しんだ。夫でも、彼の嗚咽は尚無用に續いて居た。

「離れに置いてあるから、直ぐ彼方へ行つて呉れ」と、主人は落着いた聲で云つた。

彼は直ぐ奥の離れへ行つた。紫色のお召を着た令嬢の雪子さんと、瑠璃子さんが、泣顔を上げ

て讓吉の顏をチラリと見た。

何時もは、此の二人の令孃を、世の中で最も幸福な女の子だと思つて居た讓吉は、今日は全く反對の考を懷かねばならなかつた。夫人の遺骸は、十疊間の中央に、裾模樣の黑縮緬の紋附を逆さまに掛けられて、靜に横たはつて居つた。讓吉は、徐ろに遺骸の傍に進んだ。そして兩手を突いて、頭を下げた。口の裡で夫人から受けた高恩を謝した。涙がまた新しく頰を傳つた。夫人は急激な尿毒症に襲はれ、僅か五時間の病ひで殪れたのであつた。

夫からの三日間、讓吉はお通夜の席に連つた。彼はお通夜などと云ふ佛敎の形式に、反感を懷いて居たが、然し自分の悲痛や夫人に對する愛慕を、かうした形式で現はす外、何うとも仕樣がなかつた。

本當に悲しんで居る人々と、社交上の義理で悲しみを裝つて居る人々との間に交じつて、讓吉は、自分一人の特有な悲しみを、守つて居た。

殊に、夫人が佛敎の信者であつた爲に、佛敎の形式主義が、飽く迄もこの悲しみの家を支配して居た。坊主が、眠むさうな聲をして、阿彌陀經などを讀み上げる度に、讓吉は却つて自分の純な悲痛の感情が、傷つけられるのを覺えた。殊に、初めてのお通夜の晩に、菩提寺の住職がお

說敎をしたが、その坊主は自分の說敎に箔を附ける爲か、英語を交じへたりした。

「刹那卽ちモーメントの出來事を……」と、云つたやうな言葉遣ひが、讓吉の僧侶に對する反感を、一層强めた。殊にその坊主が、

「米國のロックフエラア曰く『人生は死に向つて不斷に進軍喇叭を吹いて居る』と、道は米國の大學者丈あつて、眞理を道破して居るやうです……」と云つた時には、讓吉は馬鹿々々しくなつて、席を脫した。恐らくこの男は詩人ロングフエロウの言葉を聞き齧じつて居たのを、大富豪ロックフエラアに結び附けて而もロックフエラアを大學者にしてしまつたに相違ない。讓吉は、最も嚴肅な筈の、第一夜のお通夜の晩に、かうした出鱈目を、云つて居る僧侶その者に對して、憐憫を感ずると同時に、輕い反感を覺えるのを、何うともする事が出來なかつた。

第二夜のお通夜の人々は、第一夜の人々よりも、お通夜に相當な感情を持ち合はして居なかつた。更に第三夜になると、近藤夫人とは生前には、一度も顏を合はしたことのないやうな人が、眠い眼をこすつて居た。

葬式の日に於ても讓吉は、多少の不滿を感ぜずに居られなかつた。讓吉と、夫人との間には多くの僧侶が介在し、多くの親者親戚が介在し、讓吉は單なる會葬者の一人として、遠くから夫人

の遺骸に訣別の涙を手向けたに、過ぎなかつた。

京都からワザ〳〵、上京したと云ふ御連枝が、音頭を取つて唱へる正信偈は、讓吉の哀悼の心を、無用に焦立たせたに過ぎなかつた。

*　　*　　*

夫人が、死んでから二三週間、讓吉は、自分の心に生じた空虛を明かに感じた。夫人は彼に取つて、もう替換のない人であつた。讓吉が現在の生活を享けて居るのは、殆ど夫人の力であつた。夫人の溫情を、想ひ起す毎に、讓吉の心の空虛は、何時迄も消えなかつた。

夫人の三十五日の法事に、近藤家を訪うた讓吉は、夫人の妹に當る早川夫人から「お祝」と書いた、一の紙包を渡された。

「宮井さん、是は姉が、貴方のお子さんに上げる積りで買つて來た、產衣ださうです。丁度、發病する日の朝、松屋で買つて來たのださうです、姉が生きて居れば縫つて上げるのでせうが」と、夫人は附け加へた。

讓吉は、夫人が最後のその日迄、讓吉の事を考へて居たことを思ふと、彼は更に云ひようのない感謝に囚はれた。

彼は押し戴くやうにして、近藤夫人の最後の贈物を受け取つた。

が、夫は決して最後の贈物ではなかつた。

夫から四五日して讓吉は、社を少し早目に引いて本郷の家へ歸つて來た。そして、大通を曲つて自分の家のある路地へ、入ると直ぐ、其處にある水道栓で、彼の妻が洗ひ物をして居た。彼が不意に「おい！」と、聲を掛けると、妻は「お歸りなさい」とも云はない前から、

「貴方、到頭大島が出來たわ。上下揃つてよ」

と、嬉しさうに大きな聲を立てた。

「何だ！　俺のがかい？　一體何うしてだ」

と、彼は半信半疑で訊き返した。

「近藤の奥さんのお遺物よ。先刻、お使が持つて來たのよ」

と、妻は洗ひ物を早々に片づけ始めた。

「えい！　本當かい」

と、讓吉は輕いショックを感じた。

「本當ですとも、行つて御覽なさい！　座敷へ擴げてあるわ」

彼は妻よりも、一足先に家へ入つた。如何にも妻が云つた通り、座敷の眞中に、女物に仕立てられた、大島の羽織と着物とが、擴げられて居た。裏を返して見ると、紅絹(もみ)裏の色が彼の眼に、痛々しく映つた。

「いゝ柄だわね、是なら貴方だつて着られるわ。直ぐ解いて、縫はしにやりませう。夫とも、一度洗張りを、しなければいけないでせうか」と、續いて入つて來た妻は、大島を手に取つて、つく〴〵と眺めて居る。

讓吉も、自分達の望んで居た、大島が出來た事に、多少の滿足を、感ぜぬ譯には行かなかつた。が、一生の恩人である、近藤夫人を失つて、大島の揃を得た讓吉の心は、彼の妻が想像して居る程、單純な明るいものとは、全く違つて居た。

——大正五年十月——

無名作家の日記

九月十三日。

到頭京都へ來た。山野や桑田は、俺が彼等の壓迫に堪らなくなつて、京都へ來たのだと思ふかも知れない。が、何う思はれたつて構ふものか。俺は成る可く、彼等の事を考へないやうにするのだ。

今日初めて、文科の研究室を見た。思の外にいゝ本が澤山ある。蠶が桑の葉を貪(むさぼ)るやうに、片端から讀破してやるのだ。研究と云ふ點に於ては、決して東京の連中に負けはしないと、俺はあの研究室を見た時に、全く心丈夫に思つた。

其上に、俺は京都其物が氣に入つた。殊に今日、大學の前を通つて居ると、清麗な水が淙々たる音を立てゝ、流れ下つて居る小溝に、白河の山から流れて來たらしい眞赤な木の實が、幾つも

流れ下つて居るのを見た。東京の街頭などでは、夢にも見られないやうな、その新鮮な情景が、俺の心を初秋の京都に惹き附けてしまつた。俺は京都が好きになつた。京都へ來た事を決して後悔はしない。

が、俺は此の頃、つくづくある不安に襲はれかけて居る。夫は外でもない、俺に將來作家として、立つて行くに十分な、天分があるか何うかと云ふ不安だ。少しの自惚れも交へずに考へると、俺にはそんな物が、一寸有りさうにも思はれない。東京に居る頃は、山野や桑田や杉野などに對する競爭心から、俺でも十分な自信があるやうな顏をして居た。が、今凡ての成心を去つて、公平に自分自身を考へると、俺は創作家として、何等の素質をも持つて居ないやうに思はれる。

俺は、文學に志す青年が、動もすれば犯し易い天分の誤算を、やつたのではあるまいかと、心配をして居る。此の事を考へると嫌になるが、青年時代に文學に對する熱烈な志望を語り合ひ、文壇に對する野心に燃えて居た男が、何時が來ても、世に現はれない事ほど、淋しい事はない。俺も、彼等の一人ではあるまいかと思ふ。人生の他の方面に志す人は、少し位は自分の天分を誤算しても、何うにか誤魔化しが附くものだ。金の力、或は血緣の力などが、天分の缺陷をある程

度迄補つて呉れる。が、藝術に志す者に取つて、天分の誤算は致命的の失策だ。茲では、天分の缺陷を補ふ、何等の資料も存在して居ないのだ。黄金だと思つて居た自分の素質が日を經るに從つて、銅や鉛であつた事に氣が附くと、もうおしまひだ。天分の誤算は、やがて一生の違算となつて、一度しか暮されない人生を、マザマザと棒に振つてしまふのだ。昔から今迄、天分の誤算の爲に、身を誤つた無名の藝術家が、幾人居た事だらう。一人のシエクスピアが榮えた背後に、幾人の群小戲曲家が、無價値な、亡ぶに定まつて居る戲曲を、書き續けた事だらう。一人のゲーテが、獨逸全土の賞讃に浸つて居る脚下に、幾人の無名詩人が、平凡な詩作に耽つた事だらう。無名にして終つた藝術家は、作曲家にも有つたゞらう、俳優にも無數に有つたゞらう。一人の天才が選まれる爲には、多くの無名の藝術家が、その足下に埋草となつて居るのだ。無名の藝術家でも、その藝術的向上心に於て、藝術的良心に於て、決して天才の士に劣つて居る譯はないのだ。彼等の缺點は只一つある。夫は、彼等の天分が、何んなに磨きを掛けても輝かない、鉛か銅である事だ。

かう考へて來ると、俺は堪らなく自分が嫌になる。俺は、何うして創作家となる事を志したのだらう。何うして、文學を志したのだらう。夫を考へると、俺は何時も、自分の馬鹿らしさに愛

想が蠢きる。俺が文科を選んだのは、文學者崇拜と云ふ多愛もない、少年時代の感情に支配されて居たに過ぎなかつた。もう一つ原因があつたつけ。夫は、俺が中學時代に、作文が得意であつたと云ふ、愚にも附かない原因だつた。こんな、少年時代の出來心で選んだ生涯の道程を、今となつては是が非でも、遂行しなければならぬ羽目に居る俺を、つくづく情なく思ふ。

夫にしても、高等學校に居た頃は、少しは自信があつた。自信があつたと云ふよりも、自分の眞實の天分なり境遇なりを、自分で誤魔化して行く事が出來たのだ。殊に、山野や桑田などの、燃ゆるやうな文壇的野心や、自惚に近い自信が、俺にも幾何か移入されて居た故かも知れない。高等學校に居た頃、寢室で皆が一緒に、枕を並べて寢る時は、文壇に就いての話の外は、殆ど何にもしなかつた。殊に、川崎純一郎氏の活躍振が、よく我々の話題となつて居た。川崎氏は、俺達に一番近い目標であつた。あの人の眩しい程に燦然たる出世が、その頃の俺達の心を、何んなに喰つただらう。桑田は、そんな話が出ると、燃ゆるやうな眸をして、

「なあに！ 俺達の連中だつて、今に認められるさ。誰か一人有名になれば、もうしめたものだ。其奴が、殘りの者を順番に引立てゝ行けばいゝんだ」と、桑田は、その最初に名を成す者が、自分であるやうな自信を以て云つた。

「さうとも、文藝部で委員をして居た者は、皆文壇的に有名になつて居るんだ。矢部さんを見ろ！ 小山さんを見ろ！ 和田氏を見ろ！ 近藤さんを見ろ！ 皆、文藝部の先輩ぢやないか、なあに！ 文壇なんて、案外譯のない處さ」と、天才的で傲岸な山野が、桑田に合槌を打つたつけ。俺は、かうした會話を聽く度に、山野や桑田などの烈しい希望や、強い自信の一部が、俺の心にも移入されて、何となく頼もしく思はれたと同時に、將來の文壇に於て、眞に名を成す者は、桑田や山野などで、自分は何時迄も彼等の蔭に、無名作家として葬られるのではあるまいかと云ふ不安に、囚はれずには居られなかつた。既にあの頃にも、山野は學校中を驚かしたやうな深刻な、皮肉な小説を文藝部の雜誌に載せて居たし、桑田は桑田で、同じ雜誌に脚本を幾つも發表して居た。而も、夫は洗煉された技巧と、氣の利いた構想に於て、全く水際立つた出來榮を示して居る。そして、二人とも文藝部の委員であつた。山野が、「文藝部の委員をして居た者は、皆文壇的に有名になつて居るのだ」と、云ふ事は、即ち現在委員をして居る山野が、將來容易に文壇に名を成す事が出來ると、宣言したのと全く同じであつた。

俺は、何時も山野が、自分の人格の強みを頼りとして、無用に他人を傷つけるやうな、態度に出るのが不快だつた。が、夫にも拘らず、彼奴の才分を認めない譯には、行かなかつた。山野で

も桑田でも、確かに第一歩は踏み出して居るのだ。然るに俺は、あの頃は無論の事、今でも何もやつて居ない。その上、俺一人連中を離れて、文壇に出るのには非常に不利な、京都に來てしまつた。夫には經濟上の理由もあつた。が、他の有力な原因は、俺は山野や桑田などの間にあつて、彼等の秀れた天分から、絶えず受けて居る不快な壓迫に、堪らなくなつた爲だと、云へば云はれない事もない。殊に、山野となると、意識的に俺を壓倒しようと掛つて居た。彼奴は、自分の秀れた素質を、自分より劣つた者に比較して、其處から生ずる優越感で以て、自分の自信を培つて居ると云ふ、性質の惡い男であつた。そして、その比較の對象となるのは、大抵の場合、俺だつたつけ。何時だつたか、俺が芳田幹三の『潮』を讀んで感心して居ると、彼奴は「何だ！『潮』が面白い！　そいつは、少し困つたなあ！」と嘲笑したつけ。彼奴の嘲笑は、人を突き放したまゝ、傍へ寄せ附けないと云つたやうな、辛辣な嘲笑だつた。彼奴は、俺が少しでも、甘さうな物を讀んで居ると、屹度前のやうに嫌がらせを云つた。夫と同時に、俺がイブセンの『ブラント』のやうに少し難解な物を、讀んで居ると、「ほう！『ブラント』かい！　君に解るかい！」と、云やあがつた。こんな時、俺は彼奴を毆り附けて、やりたいと思つたが、彼奴の白皙な額と、聰明な眸とを見ると、ある威嚴を感じて、肉

體的には俺よりも、よつぽど弱い彼奴を、何うともする事が出來なかつた。彼奴は、桑田、俺、杉野、川瀬などの創作家志望の連中ばかりが、集まつて居る時に、よくこんな事を云つた。

「俺達が、皆段々文壇に認められて行く。が、一人位は何だか、取殘されさうだよ。皆が、新進作家として、ワイ〳〵持てはやされて居る時に、自分一人取殘されて居る。一寸變なものだらうな。が、その貧乏籤は、案外俺かも知れんで！」

彼はさう云ひながら、自信に充ちて哄笑した。そして、俺の方を意味有り氣に、チラツと見た。俺は、可なり嫌な氣持になつた。同じく創作家として、出立したものゝ内、その一人が何時迄も、取殘されると云ふ事は、如何にも皮肉な事で、殘される當人になつて見れば、全く堪らない事に相違なかつた。が、實際さうした場合は、容易に在り得る事だ。天分に一番自信のない俺は、そんな場合を想像する事を、努めて避けようとして居る。然るに、山野は俺や、俺と同樣に自信の薄い杉野などを、嫌がらせる爲に、そんな皮肉な場合を、想像して喜んで居たのだ。

唯一人、取殘される！　夫は考へて見ても、淋しい事に相違なかつた。俺は、東京に居て、山野や桑田などと、競爭的になるのが、不快で堪らなくなつた。彼等から間斷なしに受くる、不快な壓迫から逃れる丈でも、俺に取つて何れ丈、いゝ事か分らなかつた。京都に來て、彼等と全く

違つた境遇に居れば、彼等に取殘された場合にも、云ひ譯は幾何でもある。又、京都に來た爲に、文壇に出る機會が、却つて早められるかも知れぬ見込が、朧げながらあつた。夫は中田博士が、京都の文科の教授である事であつた。博士は、もうよほど、文壇の中心からは離れて居る。が、夫でも文壇の一部とはある種の關係がある。博士の知遇を得さへすれば、案外早く文壇に紹介されて、俺の天分を飽く迄輕蔑して居る山野などを、アッと云はせてやる事も、決して不可能でない。俺が、京都へ來た理由は、さう云ふ點にも幾何かある。

十月一日。

何となく落着けない。殊に夕暮が來るとさうだ。青い絨毯を敷き詰めたやうに、擴がつて居る比叡の山腹が、灰色に蒼茫と暮れ初むる頃になると、俺は立つても居ても、堪らないやうな淋しさに囚はれる。俺は自分で、孤獨を求めて來た。が、その孤獨は、直ぐ俺を反噬し始めた。而も、俺の孤獨の淋しさの裏には、烈しい焦燥の心が、潜んで居る。東京に居る山野や桑田などが、一日一日何んなに、成長して居るかと考へると、俺は一刻もヂッとしては、居られないと云ふ氣がする。俺が、研究室でバアナアド・ショオの全集を漁つて居る中に、桑田は豫々、書くと云つて

居た三幕物の社會劇を、もうとつくに書き上げて居るかも知れない。俺が、教室で下らないノートを作つて居る間に、山野はもう半分以上譯了して居たハウプトマンの『織工』の出版書店を、見附けたかも知れない。さう思ふと、俺は愈々堪らない氣がする。今年中に、山野と桑田とは、文壇に兎も角も、一個の足溜を築くかも知れない。俺はもう決してヂッとして居られないのだ。

俺は、彼等に對抗する爲に、戯曲『夜の脅威』を書いて居る。が、俺の頭は高等學校時代の出鱈目の生活の爲に、全く消耗し切つて居る。此の戯曲の主題には、少しは自信がある。が、俺のペンから出て來る臺辭は月並の文句ばかりだ、中學時代に、自分ながら誇つて居た想像の富贍な事などは、もう俺の頭の中には、痕形もなくなつて居る。が、兎も角此脚本を書き上げる。脚本が出來上つたら、中田先生を訪問する事にしよう。先生の好意で、俺の前途は案外明るい物になるかも知れないから。

俺は、今日偶然、吉野辰三君に逢つた。高等學校では、俺より一年上で、やつぱり京都の文科に來て居るんだ。吉野君と話して見ると、文壇に出ようとして蹌いて居る者は、決して俺一人でない事を知つて少しは安心した。吉野辰三！　以前俺はあの人を、何んなに崇拜したか分らない。明治四十年頃の文學世界の讀者に取つて、あの人の名は何んなに輝き、何んなに魅力を持つ

て居たゞらう。田山花袋選の縣賞小說に幾度も投書して、成功しなかつた俺は、吉野君の華やかな活躍振を何んなに羨望したか分らなかつた。

が、天才とまで激賞された吉野君は、その後文學世界の投書を止してから、もう何年になるかも知れないが、杳として文壇に名を現はす所がない。文學志望を廢したのかと云へば、さうでもない。現に文科に居て、文壇に出る機會を待つて居る。が、その機會は此の人に容易に與へられさうもない。話して見ると、吉野君も猛烈に焦せつて居る。が、あの人が「僕だつて、是でも新進作家と云はれた事があるんだからな」と云つた時には、俺は少し淋しい氣がした。吉野君は、昔の夢を餘程誇張して居るのだ。何でもあの頃、文學世界の當選小說ばかりを蒐めた短篇集が、世に出た事がある。その標題に、新進作家と云ふ肩書が附いて居たやうに記憶する。が、投書家として榮えた事を、一かどの作家でもあつたやうに幻想して、樂しんでゐる吉野君に對して、俺は氣の毒なやうな淋しいやうな氣がした。然し、俺は吉野君に逢つてから、何だか頼もしいやうに思ひ出した。少年時代に、十分な才華を輝したあの人が、また少しも出られないで居る、夫を思ふと、俺は少し安心した。

が、此の大學の文科の連中は、何うしてあゝ、揃ひも揃つて救はれない人間ばかりが、集まつ

て居るのだらう。殊に俺のクラスの奴等はひどい。廣島の高師を出て來たと云ふ男は、昨日教師が黑板に書いた佛の詩人ボードレールの名を、バウドレアと獨逸讀みにして、得々として居やがつた。もう一人の男は、中田博士の質問に答へて、モンナ・ヴァンナはメエテルリンクの小說だと答へて居た。俺は、奴等全體を輕蔑してやる。高等學校に居た頃には、教室も寄宿舍も、凡てが文藝至上主義で一貫されて居た。藝術の名に依つて、凡てが許された。藝術の名に依つて、學課や教室を無視する事が出來た。然るに、茲の文科の教室の空氣は、極度に散文的だ。一人として藝術の話をする奴が居ない。高等學校出身の人達は、大抵病身の爲に文科を選んだとか、哲學科で一年落第した爲に、文科へ轉じたと云ふ連中だ。高師出身の者にも、入學資格がある爲に、彼等は學士號を得る爲に、丹念にノートを作つて居るのに過ぎないのだ。文科的な自由な清新な空氣は、教室の何處にも存在しなかつた。こんな連中を前にして、文學がどうの、藝術が何うのと云つて居る中田博士は、丸切り豚に眞珠を撒いて居るやうなものだ。俺は、博士が氣の毒になつた。

十一月五日。

俺は今日偶然、同じクラスの佐竹と云ふ男と話をした。俺は今迄クラスの奴をスツカリ輕蔑して居たが、あの男丈は決して俺の輕蔑に値して居ない事を知つた。つい俺が創作の話を持ち出すと、あの男は突然こんな事を云つた。

「僕も、實は昨日百五十枚ばかりの短篇を、書き上げたのだが、何うも餘り滿足した出來榮とは思はれないのだ」と、如何にも落着いた態度で云つた。百五十枚の短篇！　夫丈でも俺は可なり威壓された。俺が今書きかけて居る戯曲「夜の脅威」は、三幕物で而も僅かに七十枚の豫定だ。而も俺は夫を可なりの長篇と思つて居る。然るに此の男は百五十枚の小説を短篇だと云つた上、まだこんな事を云つた。

「實は今、僕は六百枚ばかりの長篇と、千五百枚ばかりの長篇とを書きかけて居るのだ。六百枚の方は、もう二百枚ばかりも書き上げた。執れ出來上つたら、何かの形式で發表する心算だ」と、云ふ事が大きい上に、如何にも落着いて居る。自分の力作に十分な自信を持つて居て、俺のやうに決して焦せつて居ない。俺は此男に威壓されると同時に、一種の頼もしさを感じた。京都にもかうした眞摯な作家が居るのだ。恐らく此の男の名前は、文藝雜誌などには、六號活字ででも出た事はあるまい。が、此男は默々として長篇の創作に從事して居るのだ。此男の書いた物を一行

も讀んで居ないから、此男の創作の質に就いては一言も云はれないが、六百枚、千五百枚と云ふ量から云つて、此男は何かの偉さを持つて居るに違ひない。が、あの男はその次ぎにこんな事を言つた。

「僕は小説家の林田草人を知つて居る。あれは僕の國の先輩だ。今度文科へ入るに就いて、ワザワザ上京してあの人と會つて來たのだ。快く會つて呉れた上に、馬鹿に話がはずんでね。よく話の解る人だよ。今度書き上げた百五十枚の小説も、實はあの人の所へ送つて置く積りだ。多分何處かへ、推薦して呉れるから」俺は佐竹君を可なり尊敬し始めたが、之を聞くと少し此の人が氣の毒に思はれた。たゞ同縣人で一面識しかない林田草人を頼りにして、濟まして居られる此人の暢氣さが、少し淋しかつた。全く無名の作家たる佐竹君の、百五十枚の小説を、林田氏の紹介に依つてオイソレと引き受ける雜誌が、中央の文壇に在るだらうか。又門弟でも何でもない佐竹君の物を、林田氏が氣を入れて推薦するだらうか？　あの人は、投書家から色々な原稿を、讀まされるのに飽き切つて居る筈だ。こんな當にならない事を當にして、直ぐにも華々しい初舞臺が出來るやうに思つて居る、佐竹君の世間見ずが、俺は少し氣の毒になつた。實際、本當の事を云へば、文壇でズボラとして有名な林田氏が、百五十枚の長篇を讀んで見る事さへ、考へて見れば怪

しいものだ。佐竹君の考へて居るやうに、凡てがさう易々と運ばれて堪るものかと思つた。

十二月二十九日。

俺は、今日東京の山野から、不快極まる手紙を受取つた。夫は、俺に挑戦し俺を侮辱し、俺の感情を滅茶苦茶に傷つけてやらうと云ふ悪意に充ちた手紙だ。文句はかうだつた。

（何うだい！　馬鹿に默つて居るね。京都にも、少しは文學らしいものがあるかい。僕達此方に居る連中は、もう今迄のやうにたゞぼんやり、外國文學の本などを、弄り廻す事に飽いてしまつたのだ。僕達が、高等學校時代に神聖視して居た「文學研究」なども、考へて見れば下らない事ぢやないか。僕達は、自分で創作しなければ嘘だ。創作は黄金だ。外の凡ては銀だ。否夫以下の銅か鉛かだ。僕達は、もうヂッとしては居られないのだ。高等學校時代のやうに、何時迄も暢氣に構へては居られないのだ。僕達の計畫は、もうスッカリ定まつて居る。僕達は、來年の三月から同人雜誌を出すのだ。同人の顔觸は、桑田、岡本、杉野、川瀬、夫に僕、此の外に僕達より一年上の井上君、芳島君が加はる。雜誌の名は多分「新思潮」と附くだらう。三月の一日に初號を出す、出版元は日本橋の文耕堂だ。もう、皆は初號の原稿に忙しい。〆切は一月三十日限だ。

まあ刮目して、僕達の活動振を見て呉れ給へ。僕達は本當に黎明が來たと云ふ氣がする。）

おしまひ迄、讀み了つた俺は、烈しい嫉妬と憤りとを感ずると同時に、突き放されたやうな深い淋しさを、感ぜずには居られなかつた。

この手紙の何處にも、君も同人になつては何うかとか、君も書いては何うかと云ふやうな文句は、破片さへも、入つて居ないのだ。凡ては山野の遊戯的な悪意から出た手紙だ。同人雜誌の發行を、凱旋的（トライアンファント）に報じて孤獨に苦しんで居る俺を、飽く迄傷つけてやらうと云ふ彼の性質の悪い悪戯だ。同人に加へない俺には、少しの必要もない初號の〆切期日などを報じて、俺を焦燥だたしてやらうと云ふ彼奴の悪意が、歴然と見え透いて居る。

山野が豫期して居たよりも以上に、此の手紙は俺を傷つけた。京都へ來てからまだ半年にもならない間に、俺と東京に殘した友達との間に、早くもある間隔が作られつゝある事を、悲しまずには居られなかつた。同人雜誌の出版！　夫は何んなに華々しい事であらう。文壇に時めいて居る我々の先輩たる川崎も、矢部も、辻田も初めは雜誌「新思潮」の同人としてその若々しい名を、文壇に認められて行つたのだ。山野や桑田が認められる順番も、もう決して遠き未來ではない。山野、桑田は勿論、俺とは天分に於いて、餘り相違はないと思はれる岡本や川瀬や杉野でさへ、是

でもう的確に、文壇に打つて出る第一歩を踏み出して居るのだ。然るに俺は山野が手紙の中にあれ程輕蔑した「文學研究」を唯一の本領として、獨ぼつちで、捨てられて居るのだ。

俺は、山野や桑田が俺を同人から除外したにしろ、俺とは可なり親交のある川瀬や杉野迄が何等の好意を示して呉れなかつた事を、恨まずには居られなかつた。

俺は山野の手紙を、ズタ〳〵に引き裂くと共に、絶望的な勇氣を振ひ起した。彼等が同人雜誌で打つて出るのなら、俺は單獨で、出て見せる。そして奴等の鼻を空かして、アッと云はせてやらう。が、さう決心して居る中にも、深い淋しさがひし〳〵と俺に迫つて來た。俺に獨力で出る力があるか、俺は自分の天分を、夫れ程迄信ずる事が出來るだらうか。俺が、山野や桑田などに反感を懷いて、彼等を遠ざかれば遠ざかる程、文壇に出る機會から遠ざかつて居るのではあるまいか。今度でも杉野にでも泣き附いて、同人に加へて貰ふ方が、俺に取つては得策ではあるまいか。が、俺を馬鹿にし切つて居る山野は、「宮井などが、同人になるのなら、俺は差し控へた方が、いゝかも知れない」位の毒言は、必ず云ふに定まつて居る。さうなれば、却つて恥をかきに出るやうなものだ。俺はやつぱり、獨立してやつて見よう。『夜の脅威』を書き上げたら、早速中田さんに見て貰ふのだ。彼等が、同人雜誌などで、もがいて居る中に、俺の物は一躍して相當な

文學雜誌に紹介される。俺は、夫を考へて居ると、手紙を讀んだ時に受けたむしやくしやが、少しは癒えて行くやうな氣がした。

其處へひよつくり、吉野君が訪ねて來た。俺は、早速東京の連中が、同人雜誌を出す事を話した。俺の口調は、全く平靜を缺いて居た。が、吉野君は、何時ものやうに「朝日」を悠然と吸ひながら、

「なに君！　同人雜誌などへは、幾何書いても仕方がないものだよ。やつぱり大きい雜誌に、書かなければ駄目さ。まあ桑田君などに、大いにやらせて見るのだね。案外、さうお安くは問屋で卸さないから。僕は、同人雜誌などで、騒がないで、いゝ物が出來れば、文學世界あたりへ持ち込むよ。昔の縁で、嫌とは云ふまいから」

俺は、吉野君が、同人雜誌を貶し附けるのを聽いて、幾何か安心した。そして心の裡で山野等の「新思潮」が、一日も早く廢刊する事を祈つた。そして「新思潮」が、成る可く文壇から注目されない事を祈つた。實際俺は、俺の全人格で以て、同人雜誌「新思潮」を呪つて居たのだつた。

一月三十日。

俺は、今宵初めて中田博士を自邸に訪うた。俺は感激に充ちて居た。が、考へて見れば、感激した俺の方が馬鹿だつたのだ。中田博士の方から云へば、たゞ一人の學生の訪問を受けたのに過ぎないのだ。

俺は、挨拶が濟むと直ぐ、俺の脚本を出した。

「是非一つ御覽になつて下さい。出來は餘りよくありませんが、處女作ですから」

「なるほど」と、博士は顔の筋肉一つ動かさずに云つた。そして、一寸二三枚めくつて見てから、

「孰れ拜見して置きませう」と、靜かに、附け加へた。俺が、山野等の同人雜誌に對抗する爲に、懸命の力を注いだ力作を、博士は何の感激もなしに、俺の手から受取つた。俺は夫が可なり淋しかつた。

「よかつたら、何處かの雜誌へ」と、そんな事は、口に出す勇氣さへなかつた。俺は、手持無沙汰になつて歸らうとした。そして歸り際に、

「英國の近代劇の研究には、何んな參考書がいゝでせうか」と訊いた。すると博士は言下に、「マリヨ・ボルサがいゝでせう」と云つた。俺は、夫を聞くと少々落膽した。マリヨ・ボルサは、俺が高等學校時代に讀んだ本だ。ホンの手引草に過ぎない本だ。

俺は、博士が詩に熱心で、戯曲には冷淡だと云ふ風評を、幾度聽いたかも分らない。然し、是程博士が、戯曲に冷淡だとは思つて居なかつた。俺は、『夜の脅威』が、博士から受くる待遇に就いて全く心細くなつてしまつた。

二月二十日。

中田博士と、教室で度々顔を合すけれども、俺の戯曲に就いては何も云はない。而も博士は講義の時間にイブセンの『幽靈』を散々に扉倒した。俺の戯曲は、實を云へば『幽靈』からヒントを得て居るので、俺はイブセンに對する博士の扉倒から、可なり傷つけられた。博士は、恐らく失を故意にやつたのではあるまい。が、俺は兎に角不快だつた。

佐竹に會つたが、彼奴は林田草人に送つた小說に就いて、林田から何も云つて來ないので、可なり氣を惡くして居るらしい。が、彼奴が、自分の小說が直ぐ林田の好意ある推薦を受けるとでも、思つて居るのは、彼の無智から出た自惚だ。

三月五日。

到頭、同人雜誌「新思潮」が出た。遂に俺にも一部送つて來た。俺は、夫を開いた時、今迄にない不快な壓迫を感じた。夫は、山野から受けた夫よりも、もつと不快な而も現實的なものであつた。同人の連名を見た時に、俺は到頭奴等に捨てゝ置かれたと思つた。俺は、何れ程嫉妬に燃えたゞらう。俺よりも天分に於いては、劣つて居ると思ふ岡本など迄が、俺より急に偉くなつたやうに思はれて仕方がない。

俺は卷頭に載せられた山野の小說『顏』を、恐る〳〵讀んだ。俺は夫が不出來で、愚作で全然彼の失敗である事を祈りながら讀んだ。が、その一分も隙のない、纏つた書き出しに俺は先づ氣押されてしまつた。殊に一句々々、蜘蛛の糸のやうに粘り氣があつて、而も光澤のある文章が、山野一流の異色ある思想を、グン〳〵と表現し行く邊、俺は彼奴に對して益々強い反感を感ずると同時に、彼奴の魅力ある筆致に依つて、グイ〳〵頭を押さへられてしまつた。殊に『顏』の主題は、今の文壇には、一度も現はれなかつたやうな、奇拔な而も深刻味のある哲學だつた。若し『顏』が、山野否俺の友人の作品でなかつたら、俺は何んなに驚喜した事だらう。夫が、俺の競爭者而も俺を踏み附けようとする山野の作品である爲に、俺は全力を盡くして、その作品から受くる感銘を排斥しようとした。が、俺は山野の作品の價値を認めぬ譯には行かなかつた。が、夫

から連想される事は、山野が一躍して文壇に認められはしまいかと云ふ事だ。俺は夫を考へると、いゝ氣はしなかつた。山野が一旦認められるとなると、彼奴は俺に對して何んな侮蔑をやるかも知れない。同人雜誌の發行を知らして來たやうな手緩いものではない。俺は夫を愚ふと黯然たる氣持がする。が、俺を壓迫したのは、山野の作品ばかりではない、その次ぎに載つて居る桑田の小說『闖入者』だつて、渾然として纏つた小品だ。彼奴のきび〳〵した筆致を見た時、俺は桑田にだつてとても敵はないと思つた。が、俺はその事をなるべく認めまいと努力した。が、實際俺の『夜の脅威』を『顏』や『闖入者』に比べると、作者の俺が何んなに、贔負眼に見ても奴等の物が段違ひにいゝ。俺は、夫を考へると、少し絶望的になる。が、山野や桑田の作品がよいばかりでなく、杉野や岡本のものでも、中々纏つた出來榮だ。俺は杉野や岡本などの素質を、俺以下のものと見積つて、やつと安心して來たが、その安心も何うやら根柢から搖いで來たやうだ。俺は雜誌「新思潮」を手にしたまゝ午後三時頃から、七時頃迄夕食も喰はないで、ぼんやり考へ込んで居た。すると其處へヒョツクリ吉野君がやつて來た。

俺は、此時位吉野君を頼もしく思つた事はない。俺は、吉野君と一緒に「新思潮」の惡口を云ひたかつたからである。吉野君も恐らく、同じ目的で、俺を訪問したのかも分らなかつた。

「やあ！　君も『新思潮』を讀んで居たのか。僕も今朝本屋で買つたよ。案外いゝものはないね」と吉野君は、座に着くと直ぐ、其處に落ちて居た「新思潮」を弄くりながら話し出した。俺は、吉野君の總括的の貶し方が、可なり氣に入つた。が、俺は「本當だ」とも合槌を打てなかつた。實際俺は何の作品も感心して居たのであるから、俺は恐々ながら「山野の『劍』は何うだい」と訊いた。

「輕妙だ。然しあんなものは、誰にだつて書けるぢやないか。少くとも江戸つ子には書けるね」と江戸つ子たる吉野君は昂然として云つた。俺の良心は、吉野君の云つて居る事に、全然反對した。が、俺の感情は吉野君の云つた事に滿腔の贊意を表した。

「桑田君の『闖入者』も餘りよくないね。古い！　まるで、自然主義から一歩も出て居ないのだ」俺は段々心强くなつた。俺は、今日程吉野君を尊敬した事はなかつた。吉野君は、最後にこんな事を附け加へた。

「要するに高等學校の雜誌に、少し毛が生えた程度のものだよ。あれで、文壇に出ようと思つて居るのは、少し蟲が好過ぎるね。やつぱり、同人雜誌なんかに、幾何書いても駄目だよ。相當位置のある雜誌で、發表しなければ駄目だよ」と、吉野君は最後に自分の持論を繰返した。俺は、

吉野君の辛辣な批評を聽いて、救はれたやうな心持になつた。

が、吉野君が歸つてしまふと俺は又、淋しい心持に襲はれた。見ると、吉野君に散々叩かれた雜誌「新思潮」は、洋燈の暗い光の裡に、放り出されてある。俺は、創作は黄金だといつた山野の言葉を思ひ出した。そして、殘ひ小雜誌にせよ。活字になつて居る以上は、夫はもう立派に完成された、表現の形式である。夫が文壇的に認められる、十分な機會を備へて居た。殊に、文科大學生の同人雜誌として、何んなに新鮮な感興を、文壇の一角に、感ぜしめて居るかも分らなかつた。俺は無名の作家達が、文壇の流行兒の悪口を、思ふ存分に云ひ合つて、自分達の認められない腹癒せをする場合を、考へる事が出來た。俺と吉野君との會話も、殆ど夫に近かつた。夫は弱者の弱い反抗に相違なかつた。さう考へて來ると、また空虛な感じに襲はれた。夫にしても中田博士は、俺の『夜の會議』を、何時迄捨てゝ置くのだらう。俺は、博士の無頓着に對して、輕い反感を懷かずには、居られなくなつた。

三月十日。

俺は、今日學校で佐竹君に逢つた時、

「おい君の長篇小説は、何うしたい」と訊いた。すると、あの男は、暗い顔を一寸明るくしながら、
「四百五十枚迄書いた。もう百五十枚書けばいゝ、この頃は創作熱が丸切り旺盛なのだ。毎晩三十枚は缺かした事はない」と、昂然たるものがあつた。
「何うしたい！　林田の所へ送つて置いた小説は」から訊くとあの男は急に顔を暗くした。
「送り返して來たよ。雜誌には長すぎるからだつて。片々たる短篇ばかりを戴せたつて、一體何うすると云ふのだ。だから、日本にどつしりした長篇が出ないのだ」
が、俺は佐竹君の小説が、送り返される事を豫期して居たので、少しも驚かなかつた。そして、百五十枚の長篇、而も無名作家のものが、さう容易に紹介されて堪るものかと云ふ氣がした。が、俺は、此の人の旺然たる創作熱には、何時もながら、敬意を表する。何時か、あの男の部屋を訪問した時、實際あの男は、もう三百枚もあると云ふ草稿を俺に見せた。その上、少年時代からズーツと書き溜めたと云ふ高さ三尺に近い原稿を、俺の前に積み上げた。
「百枚位のものなら、七つ八つありますよ。此内で、一番長いのは五百枚の長篇で僕の少年時代の初戀を取扱つたもので、幼稚でとても發表する氣にはなれませんよハ、、、」と笑つたつけ。
俺は、あの人の多產に感心すると共に、その暢氣さにも感心した。發表する氣にはならないと云

つて、若し發表する氣にさへなれば直ぐにも出版の書店でもが見附かるやうな、暢氣な事を考へて居るのだ。俺はあの男のやうに、發表と云ふ事や、文壇に出ると云ふ事に就いて、少しの苦勞もない心理狀態が、可なり不思議に思はれる。あの男は、只書いて居さへすれば夫で滿足して居られるのかしら。

三月十五日。

雜誌「新思潮」の評判が、素晴らしく好い。殊に山野の『顔』の評判がいゝ。俺は、なるべく新聞の文藝欄を見まいとした。「新思潮」が評判されるのが、癪だからである。が、何となく「新思潮」の評判が氣になつて仕方がない。俺は、白狀するが、もう三日ばかり、續けて圖書館に通つた。そつと「新思潮」の評判を讀む爲にである。最初にI新聞が、六號活字ではあつたが、雜誌「新思潮」の創刊を祝福した、そして山野の『顔』を特に激賞した。が、夫ばかりではなかつた。夫から、三日ばかりしてT新聞の文藝欄で批評家H氏が、山野の『顔』を激賞した。俺は夫を讀んで心の奥から、とみ上げて來る嫉妬を、何うする事も出來なかつた。到頭、彼奴に蹂躙られたと思つた。俺は、此二三年、憂慮して居た運命が、もう的確に、實現するやうに思つ

た。山野や桑田が文壇の花形として持てはやされ、俺が無名作家として、永久に葬られる事、夫はもう「新思潮」の發行で、早くも實現の第一段に、到達したのだ。

俺は、山野の天分の力に、何うして對抗しようと云ふのか、山野の天分が認められると云ふ事が、當然であればある程、俺の反抗は、無意味で且淋しかつた。俺はもう目を閉ぢて、彼奴の華華しく打つて出るのを、辛抱するより外に、何うとも仕方がないのだ。たゞ、彼奴に對抗する唯一の方法は、俺が彼奴と同時に、文壇へ出て行くと云ふ事であつた。俺は、さう考へると、再び俺の創作『夜の脅威』の事を思ひ出した。夫は餘りに、頼りにならない物に相違なかつた。が、文壇の水準以下のものとは何うしても思はれなかつた。俺は、今宵、圖書館を出ると、直ぐ中田博士の家へ急いだ。『夜の脅威』に就いての批評を聞いた上、是非共何處かの雜誌へ、推薦を依頼する心算であつたのだ。

中田博士は、都合よく在宅した。

俺は、博士と向ひ合ふと直ぐ、

「如何です、何時かお願ひしました脚本は、讀んで下さいましたでせうか」と切り出した。

「あ！」と、博士は一寸當惑の色を示したが直ぐ「あゝあれでしたか。つい忙しくつて、讀みか

けのまゝですが、孰れゆつくり讀んだ上で、纏つた批評をしませう」と、平素ものやうに、悠然と答へた。が、俺は、博士がまだ一枚も讀んでくれて居ない事を直覺した、俺が、是程焦燥の裡に、努力して書き上げた作品を、一ヶ月半もの間、一讀もしないで、置きつ放しにして置いた博士を、俺は少し呆氣に取られて見た。が、博士には、夫が、餘り不自然ではないらしいと見えて、直ぐ話題を換へて話し出した。

「佛蘭西の近代劇の中にも、中々いゝものがありますよ。近代劇と云へば、北歐の專賣のやうに思つて居るから、困りますよ。何と云つても、芝居は佛蘭西が元祖で、イブセンなども、やはり作劇術の點に於いては、明かに佛蘭西劇の影響を受けて居ますよ」

俺は、佛蘭西劇の話などを聽くやうな心持とは丸切り掛け放れて居た。中田博士の手の中に在る俺の『夜の脅威』は、一體何時が來たら、日の目を見るだらうと、夫ばかりを心配して居た。俺は、一層の事、貰つて歸らうかと思つた。が實際中田博士の手を經ずして、文壇に一指を屆かす事さへ、俺には難かしい事であつた。

俺は、佛蘭西劇の話を、一時間ばかり仕樣事なく聽いた後、博士の家を辭した。俺は、もうスツカリ絶望して居た。中田博士を通じて、俺が文壇に望を繋いだのは、全く俺の第二の誤算に近

かつた。俺は、もう手を挟ねいて、山野や桑田の華々しい出世を、見るより外に仕様がないかも知れない。家へ歸つてから、暫くは何も手に附かなかつた。偶然の機會が突發しない限りは、俺にはもう何等の機會も、殘されて居ないやうな氣がする。

四月五日。

「新思潮」は、第二號を發行した。山野は『邂逅』と云ふ短篇を發表した。俺は又夫を、飛び附くやうにして讀んだ。さう佳作ばかりが、續く譯はないと思つたからである。が、俺の安心は直ぐ裏切られた。手堅く而も底光りのする彼奴の技巧が、又グン〳〵俺をやつ附けてしまつた。殊に主題は前の『顔』の夫に勝るとも決して劣らぬほどの光つたものだつた。俺は山野に對する反抗の角を折らうかとさへ思つた。俺の彼奴に對する反抗は、凡人が天才に對して懷く無意味な反感で、全く俺自身の心得違ではあるまいかと、思ひ直さうとした。が、山野の皮肉な笑顔を思ひ浮べると、直ぐムラ〳〵とした嫉妬と反感が俺の全身を襲ふ。俺は何うしても、彼奴の作品に頭を下げる氣にはなれないのだ。

四月十六日。

山野の『邂逅』が又評判がいゝ。殊に文壇の老大家たるK氏が、彼奴の『邂逅』を激賞したと云ふ噂を、新聞で讀んだ時、俺はもう「萬事休す矣」だと思つた。もう、彼奴の聲價は定まつた。彼奴が不意に死なゝい限り、文壇に認められるのは既定の事實だ。俺は、もう仕方がないと諦め始めて居る。實際、俺の嫉妬を除いて考へれば、彼奴が認められるのは至當な事かも知れない。が、至當であるかあるまいかは、問題でない。たゞ彼奴が認められる事が不快なんだ。山野が認められたとすると、桑田の順も決して遠くはない。岡本、杉野、川瀬なども皆相當の所へ行くに違ひない。「たゞ一人取殘される者」夫は何う考へても、俺に相違なさゝうだ。

俺は、今日短い原稿を今度創刊になる雜誌「群衆」に送つた。僅か七枚ばかりの小品だ。俺は此の「群衆」を主幹して居るI氏に、たつた一度逢つた事があるのだ。俺の小品が採用されたら、山野等に對して少しの反抗は爲し得た事になるのだ。

五月三日。

俺は今朝、新聞の廣告を見た時、今月の雜誌「新小說」の小說欄に、山野の小說『發人』が載

つて居るのを見た時、俺はアッと驚いたまゝ、暫くは茫然とした。俺は鐵槌で毆ぐられたやうな打擊を感じながら、まだ自分の視覺を疑つた。何んなに評判がよくても、文壇の中央へ乘り出すのには、間があるだらうと高を括つて居たのは、俺の誤りだつた。彼奴は、俺のさうした豫想を、見事に裏切つてしまつた。もう、彼奴が流行作家で、俺が無名作家である事は、嚴として動すべからざる事實だ。俺は眩ぶしい物を見るやうに、あの廣告を見た。山野敏夫……と云ふ三號の活字が、宛ら俺を嘲笑して居るやうに感じた。題名の『變人』は、作家としては『變人』に近い俺を、モデルにしたのではないかとさへ思つた。が、俺は是程反感を持つて居る彼奴の作品が、一刻も早く讀みたくなるから不思議だつた。山野の作品を讀む爲に「新小說」を買ふ事、換言すれば彼奴の作品の爲に、「新小說」が一部でも多く賣れる事は、考へて見れば少し不快だつたが、夫でも俺は彼奴の作品が、讀みたくて堪らなかつた。

俺は見たくもない物をオヅ〳〵と見るやうな心持で、彼奴の作品を讀んだ。讀んで見ると、彼奴の作品は、俺の嫉妬や競爭心を押し除けて置いて、俺にグイ〳〵と迫つて來やがる。俺は、殘念で堪らない。彼奴に對する反感が、彼奴の作品の力に押し除けられて、譯もなく感心してしまふのだ。彼奴に反感を持たない一般の批評家が、感心するのも尤もな話だ。夫を思ふと俺は情なく

なる、俺は「新小說」を手にしながら、彼奴に絕對的に打ち負かされた事を明かに感得した。

俺は「新小說」と共に、自分が寄稿した「群衆」を買つて來た。俺の小品も編輯者の好意で、二段組ではあつたが掲載されて居た。が、「新小說」と「群衆」！ 夫は雜誌として勢力に於いて、無限大の隔たりが在つた。俺は山野が偶然、「群衆」を手に取つて、俺の作品に氣が附いた時、「ふふん」と嘲弄の微笑を洩らす、その顏附迄が歷然と感ぜられた。

もう「勝負は在つた」と云ふ氣がする。俺の負は俺自身にさへ明かだ。なあに！ 初めから勝負になつて居なかつたのだ。「新小說」の彼奴の小說の第一頁を、ヂッと見詰めて居ると、無念と絕望の涙が頰を傳つて流れた。

俺が「新小說」を見て居ると、偶然佐竹君がやつて來た。そして又何時ものやうに創作の話を始めた。

「六百枚の方は、一昨日到頭書き上げてしまつた。僕は此二三日その爲に愉快で堪らないのだ。少し靜養したら、愈々千五百枚の物にかゝるんだ。此方が完成したらもうしめたものさ」と相變らず元氣な事を云つて居たが、ふと「新小說」が佐竹君の目に入ると、

「山野君の『變人』が載つて居たね。ありやさう恐るゝに足るものぢやないね。たゞ思附ばかりの

ものだ。藝術としては寧ろ邪道だね」と、云つた。が、俺はもう此男の罵倒から、何等の慰安をも感じなかつた。思附ばかりでもいゝ、藝術の邪道でもいゝ、文壇に認められる方が、何れ程いい事か分らなかつた。六百枚の長篇を終つて、千五百枚の大作にかゝつて居る佐竹君よりも、三十枚ばかりの器用な短篇を書いて、一躍して認められた山野の方が、俺には何れほど羨しいか分らなかつた。

俺は、夫から意外な事に氣が附いた。俺は何氣なく佐竹君に、「群衆」を見せて俺の僅か七枚の小品を指し示すと、夫を見た佐竹君の瞬(またゝき)は、異樣な輝きを帶びた。

「何だ！　こんな短篇か！」と、彼は吐き出すやうに云つた。

「此の雜誌は一體、誰が經營して居るのだ！　一人として碌な奴が書いて居ないぢやないか！　草田花子！　あ！　此奴(あいつ)か！　こりや君！　此間、山本と云ふ男と、作品の賞め合ひをしたかと思ふと、獸のやうに直ぐくつ附き合つた女ぢやないか、こんな女が小說を書いて居るんだね。」と、佐竹君は、「群衆」の寄稿者を悉く罵倒した。そして「群衆」と云ふ雜誌が低級な雜誌で夫に書いて居る者が、悉く碌でもない奴等であると結論した。

俺は、俺の僅か七枚の小品が、是ほど佐竹君を激昂させた事を驚いた。此男は雜誌「群衆」を

貶(けな)す事に依つて俺の作品を無視しようとかゝつたのだ。が、夫は全く反對の事實を語つて居る。俺の小品が七枚でも活字になつた事は、佐竹君に取つて決して愉快な事ではなかつたのだ。俺が山野の作品に依つて感じて居るやうな反感と焦燥とを、佐竹君もやつぱり感じて居るのだ。六百枚の長篇を書き上げて、堂々と小說の大道を歩んで居る筈の佐竹君が、活字になつた俺の僅か七枚の作品から壓迫を受けるとは、考へて見れば不思議な事だつた。

が、俺は俺の小品を無視しようとした佐竹君を、決して憎めなかつた。俺は山野より天分が劣つて居る事を自覺しながら、尙山野の出世を呪つて居るのだ。まして、自分の作品に十分の自信を持つて居る佐竹君が、自分の作品が活字になる前に、俺の片々たる作品が活字になつたのを不快に思ふのは、寧ろ當然の事かも知れない。

が、俺は考へた。創作と云ふ事が、ある人々の考へて居るやうに絕對のものなら、何故に人は只創作する丈で滿足する事が出來ないのだらう。佐竹君の如きは、六百枚の長篇を書き上げた事其物に依つて、十分藝術慾を滿足して居なければならない筈だ。夫が、何うして發表する事に就いて、あゝした苦悶があるのだらう。殊に俺などは創作と云ふよりも、先に發表と云ふ事に就いて、悶えて居る。本當の藝術慾よりも文壇的名譽と云つたやうなものに囚はれて居る。が、佐竹

君のやうに長篇を書き上げて居る人でさへ、活字になつた俺の七枚の小品を見ると、取り擾すのだから、俺が山野の作品が出る事に血眼になるのも、或は當然の事であるかも知れない。

五月十五日。

俺は、今日久し振で山野の手紙を受取つた。何うせ俺を嘲笑し揶揄する爲の、手紙だらうと思つたから、俺は一寸開封する氣にならなかつた。が、夕方になつて漸く開けて見ると、割合に親切な文面であつた。

（君も知つて居る通、同人雜誌「新思潮」は、創刊以來割合世間の注目を惹いて居る。もつと根氣よくさへ續けて行けば、皆ある程度迄出られると云ふ氣がする。從つて、皆油が乘りかゝつて居る。夫に就いては君だが、僕達は君が京都で、獨ぼつちで居る事に對し大に同情をして居る。「新思潮」發刊の時にも、君を是非同人に入れなければならないのだが、君が東京に居らぬ爲、つい色々な差支へがあつて、止むなく君を入れる事が出來なかつた。僕達は、夫を非常に遺憾に思つて居る。が、此頃は僕も外の雜誌から原稿を賴まれるし、桑田も近々外の雜誌に書くだらうから、「新思潮」は自然紙面に餘裕が出來るので、君の作品も紹介し得る機會が度々來るだらうと

思ふ。だから、君もいい物があつたら、遠慮しないでどし〳〵送つて呉れ給へ。無論餘りひどいものは困るが、水準以上のものなら欣んで紹介するから。）

此手紙を讀んだ時、俺は今迄山野に對して、懷いて居た嫉妬や反感を恥しいとさへ思つた。俺が山野の世に現はれて行くのを、呪つて居る間に、山野は俺の爲に好意ある配慮を爲す事を忘れなかつたのだ。彼等に對して意地を立てゝ居るよりは、彼等に接近して「新思潮」に作品を發表した方が、何れ程よい事だか分らなかつた。山野の手紙を見た時、今迄俺には遮ぎられて居た光線が、初めて溫く俺の身體を包むやうな氣がした。俺は直ぐ返事を書いた。餘り昂奮して、彼奴に笑はれはしまいかと思はれるほど、昂奮に充ち感激に充ちた手紙を書いた。そして直ぐ後から作品を送る事を云ひ添へた。俺の手紙は、明かに卑しい哀願の調子を交へて居た。俺は自分の態度の裡に征服された弱者が、强者に阿ねつて居るやうな、さもしい態度を感づいた。今迄、極端に呪咀して居た彼の、華々しい初舞臺に對してさへ、賞讃の言葉を連ねた。が、俺には夫を卑しむべき事として、思ひ止まり得る程の餘裕はなかつたのだ。山野の好意に縋る事は、現在の俺に取つては唯一の機會だと云つてもよかつたのだ。

俺は手紙を出した後で、直ぐ中田博士を訪問した。俺の脚本の『夜の脅威』を、貰ひに行つた

のだ。博士の所へ持つて行つてから、もう三ヶ月以上になる。博士はもうとつくに、俺の脚本の事などは、忘れてしまつたと見え、偶々俺に言葉を掛ける事などがあつても、脚本の事は、曖(おくび)にも出さなかつた。が、今度山野の所へ作品を送るとしても、一番纏つて居るものは『夜の脅威』であつた。考へて見れば、俺は發表の事ばかりに氣を取られて、本質的の創作には全く暢氣であつたのだ。默々として、千五百枚の大作にかゝつて居る佐竹君の事を考へると、可なり恥しく思ふ。

中田博士は、何時ものやうに在宅した。俺が來意を述べると、

「さう〳〵、君の脚本を預かつて居たつけ」と、云ひながら立つて、書棚の一隅を探つて呉れた。そして、恐らく俺が持つて來た時の儘らしい俺の脚本を、取り出して呉れた。俺は、夫でも『夜の脅威』と云ふ表題を見ると、舊知にあつたやうに懷しく思つた。俺が此の三四ヶ月間、焦慮に焦慮を重ねて居る間にも、俺の作品は中田博士の書棚の一隅で、悠々たる閑日月を送つて居たのだつた。

「慇々發表する事になつたのですか。夫は結構です。活字になつた上で、纏つた批評をしませう」と、お世辭を云つて呉れた。俺は中田博士の、極度に無關心な態度を寧ろ尊敬した。歸つてから一度讀み直すと、直ぐ書留にして山野に送つた。

五月二十五日。

山野から手紙が來た。俺は夫を何等の感情を交へずに、此日記に再錄して置かうと思ふ。此の手紙を見た時の、俺の感情は茲には、何うしても表現する事が出來ないから。

(僕達は皆、君の『夜の脅威』を讀んだ。そして云ひ合はしたやうに、多大な失望を感じた。僕は遠慮なく云ひたい、世間並のお世辭を云つたつて始まらないから。僕は第一、あの作の主題(テーマ)に失望した。あれは全然借り物ぢやないか。君自身、本當の君自身から出たものではないだらう。僕はあの主題を、君が何から借用したかを、的確に指摘する事が出來る。が、主題を借りたのはいいとして、あの作品の全體に亙つて居る低級な感傷主義は、一體何だ！　君は高等學校の一年生時代から、思想的には一歩も進歩して居ないね。僕達は、あの頃の思想からは、もうスツカリ卒業してしまつて居るのだ。僕は君の脚本から、何等のいゝ所も見出さなかつた。然し、夫は恐らく僕一人の不公平な評價だと思つたので、君の脚本を桑田、岡本、杉野などにも讀ませたよ。が、彼等が君の作品に下した評語は、君に知らせる事は見合はせよう。夫は餘りに、君を傷つける心配があるからだ。で、僕達は遺憾ながらあの作品を、「新思潮」に載せる事は見合はす事にした。

君が、僕の此の苦言に憤慨して、折返し傑作を寄せて呉れゝば幸ひだ。）

罠！　俺は確かに山野の掛けた罠に掛つたのだ！　彼奴は自分の華々しい成功に浸りながら、その意識をもつと高調させる爲に、俺を傷つけて見たくなつたのだ。彼奴は桑田などに、「何うだらう！　富井の奴、京都で何をやつて居るのだらう。相變らず例の甘い脚本か何かを、書いて居るに違ひない。何うだい！　『新思潮』に載せてやるとか何とか云つて、彼奴の作品を取寄せて、皆で試驗をしてやらうぢやないか」と、云つたに違ひない。人の好い杉野や岡本などが、心配して止めると、彼奴は尙面白がつて、實行に取りかゝつたのだ。彼奴に似合はない親切な手紙は、かうした動機からでなければ、書かれる譯のものでない。山野に對する憎惡、永久に妥協の餘地のない憎惡が、前よりも十倍烈しい勢で、俺の心の裡にとみ上げて來るのを感じた。が、山野のトリックに掛つて、旨々と『夜の脅威』を、得意になつて差出した俺の弱さ加減を考へると、俺は自分の身をいとほしむ涙が双頰を濕すのを感じた。

某月某日。

もう「新思潮」が出てから、二ヶ年半になる。「新思潮」はもうとつくに廢刊してしまつた。が、

山野や桑田や岡本や杉野は、作家として立派に登錄を濟まして、「新思潮」同人として文壇を濶歩して居る。殊に、山野は一作毎に文壇を騷がして今では、押しも押されぬ位置を占めてしまつた。

俺と彼等との距離は、もう絶對的に擴がつてしまつた。却つて、かうなると、もう競爭心も、嫉妬も起らない。俺は彼等が流行作家として、持てはやされる事實を、平靜に眺めて居る事が出來る。一人の天才が生れる爲に、百の凡才が苦しむ事が必要だ。山野や桑田などが、持てはやされる蔭には、俺一人位の犧牲は寧ろ當然かも知れない。が、永久に無名作家として終る者は、俺一人ではあるまい。千五百枚の長篇が完成したか何うかは、訊いて見ないから分らないが、佐竹君は相變らず暗い顏をして居る。さうして、文壇に新進作家が出る毎に、猛烈に貶し附けて居る。同人雜誌を貶し附けた吉野君も、相變らず健在である。が、あの人の創作が、相當な文藝雜誌に載つた事はまだ一度もない。

文壇に於ても、運が或る點迄、重要な働きをして居るのだ。さうでも思つて、俺は諦めて居るのだ。が、俺はもう文壇に就いて、考へる事はよさう。作家としての生活以外に、意義のある生活がないやうに思つて居たのは、俺の迷妄だ。

俺は此間、ヴエルレーヌの傳記を讀んで居ると、あのデカダンスの詩人が晩年に「平凡人としての平和な生活」を、痛切に望んだと云ふ事實を知つて、俺は可なり心を打たれた。俺のやうに天分の薄いものは、「平凡人としての平和な生活」が、恰好の安住地だ。學校を出れば、田舍の教師でもして、平和な生活に入るのだ。

流行作家！　新進作家！　俺は、そんな空虛の名稱に憧れて居たのが、此頃では少し恥しい。明治大正の文壇で名作（クラシックス）として殘るものが、一體幾何あると思ふのだ。俺は、何時かアナトール・フランスの作品を讀んで居ると、こんな事を書いてあるのを見出した。

（太陽の熱が、段々冷却すると、地球も從つて冷却し、終には人間が死に絶えてしまふ。が、地中に住んで居る蚯蚓は、案外生き延びるかも知れない。さうするとシエクスピアの戲曲や、ミケルアンゼロの彫刻は蚯蚓に嗤はれるかも知れない。）何と云ふ痛快な皮肉だらう。天才の作品だつて何時かは蚯蚓に嗤はれるのだ。まして山野なんかの作品は今十年もすれば、蚯蚓にだつて嗤はれなくなるんだ。

――大正七年六月――

父の模型

一

段々妻の産期が、近づいて來ても、啓吉は何うしても、妻の身體の裡に、生長しかゝつて居る自分の子供に對して、何等の愛情をも懷く事が出來なかつた。

夫は、妻の肉體の中に、段々擴大して行つて、妻の活動を減殺（めつさつ）し、妻の美しさを殺（そ）ぎ、夫婦の生活を翳（かげ）らして行く大きな肉腫のやうにしか思はれなかつた。その肉塊が、妻の體中に宿つてから、啓吉夫婦の生活は何れ丈、乾燥になり、何れ丈不安になつたか分らなかつた。妻は月が重なるに從つて、段々息苦しくなつて、日々の課程である家事の仕事にさへ、喘いで居た。まして、啓吉に對する色々な注意や、愛情の表示であるべき種々な心遣ひは、少しも見られなくなつた。その上、子供が生れるに附いて、又生れてから後の生活に於いて、當然負擔せねばならぬ生活上

の重荷を豫想する事が、益々啓吉の心を暗くした。

「一體何者だらう。自分達の生活をこんなに暗く脅して居るのは」と、啓吉は思つた。其處に何の馴染もない一個の人間が、啓吉夫妻の承諾をも得ずして、彼等の間に闖入して來るとしか思はれなかつた。啓吉はその頃ある有名な作品を讀んでその中の主人公が、自分で憎惡して止まない醜い關係の結果として、相手の女の體中に宿つた子供に對して、父としての大なる愛を示して居るのを見て、むしろ奇蹟に接したやうに驚いた。夫は現在の自分の心持と、似ても似つかぬ心持であつた。自分は正當に結婚し、而も妻に對して愛情を持ちながら、何うして妻の體中にある子供を愛し得ないのかと思つたが、啓吉は幾何思ひ返して見ても、自分の心の裡の何處にも、新しく生れんとする子供に對して、少しの愛情をも用意して居ない事實を否定する譯には行かなかつた。

丁度、ある小都市に宿泊する軍隊が、凡ての民家に、强制的に二、三人の兵士を宿泊せしむるやうに、ある皮肉な大なる力が、凡ての男女の同棲者に、强制的に配分する迷惑な割當としか、妻の妊娠を考へる事が出來なかつた。

「生れた子供が口でも利き出して、馴染が出來れば兎も角だが、まだ動物だか、人だか分らない

やうな赤兒の時は、俺は決して可愛がつてやらないから」と、啓吉は子供の出產に就いて、妻と事務的な話をして、少しイラ〳〵した時などには、いつもこんな事を云つた。夫は誇張でもなければ、皮肉でもなかつたが、こんな言葉を聞いた時には、妻の感情は、甚しく傷ついて居た。啓吉の妻も、最初は心の底から妊娠を嫌つて居た。

「結婚してから、まだ一年も經たないのに、子供が出來たら、國へ歸つても、お母さんや姉さんに逢ふのが恥しい」と、口癖に云つて居た。が、夫は妊娠に對する處女としての羞恥や嫌惡が、十分彼女の心から除かれて居ない爲であつた。

が、彼女が偶然の僥倖として、期待して居た流產も起らずに、七月となり八月となるに從つて、彼女の心には母としての愛情が勃々として動き始めて居た。もう妊娠に對して、何等の羞恥も、嫌惡をも持つて居なかつた。母としての愛の爲に、出產に伴ふ凡ての恐怖や不安に打ち勝たうと、努めて居るらしかつた。

「子供が、出來れば可愛がつて呉れる」と、妻はよく、心配さうに啓吉に訴いた。が、啓吉は心から、夫に「ウン」と答へることは何うしても出來なかつた。無論、妻が非常に悄氣て居る時などには「心配するな。可愛がつてやるから」と、云つた。が、啓吉の心の裡では、その言葉に少

しも本當の感情が伴つて行かなかつた。その上、妻の注意が、自分に集注される事から轉じて、生れて來る子供に向ばうとするのを知ると、啓吉は尙更妻の體中に、蠢動して居る未知の肉塊を、愛する氣にはなれなかつた。夫は、啓吉に取つては一個の他人（ストレンジャア）に過ぎなかつた。何う考へ直して見ても、自分達二人の間に、何の挨拶もせずに、闖入して來る他人に過ぎなかつた。

二

啓吉の妻は、最初から、生れて來る子供の容貌に就いて、可なり大きい憂慮を懷いて居た。何んなに考へても、啓吉と妻との間には美しい子供が、生れて來さうにもなかつた。

夫でも、妻の方は、口が稍人並より大きいと云ふ事の外には、さう大した缺陷を持つて居なかつたが、啓吉は、自分の容貌に就いては、致命的に自信を持つて居なかつた。いつか、啓吉はトルストイの自叙傳か何かを讀んで居た時に、トルストイのお母さんが、少年のトルストイに、

「レオや、お前は大人しくして、人から可愛がられるやうにしなければなりませんよ。お前の顏の爲に、お前を可愛がる人はありませんから」と、敎訓する言葉を讀んだ時、啓吉は此の言葉を聞いた時の少年トルストイの心の裡の淋しさが、自分の心にも、しみ〴〵と蘇つて來るやうに思

つた。

容貌の醜いと云ふことは、女性に取つて致命的である如く、男性に取つても決して快いものではなかつた、容貌の醜い爲に、異性から一度も愛されずに、生涯に一度も完全に戀愛を味はずに、死んで行く淋しさを、啓吉は今迄幾度考へたか分らなかつた。彼はその淋しさを消す爲に、結婚と云ふ慣習の陰に隱れて、漸く一人の異性の愛を得た自分の腑甲斐なさを、時々考へずには居られなかつた。

「女の兒であつたら、ほんとに、何うしよう！」と、妻は臨月が近づくと、よく啓吉にかう話しかけた。啓吉は、さう云はれると苦笑する外はなかつた。顏が自分に似て醜い一人の女性が、世の中に存在する事は、確に一個の悲劇に相違なかつた。而も、さうした女を自分の子として、生長を見守るのは、夫にも劣らぬ一個の悲劇に相違なかつた。

「女の兒だつてかまふものか。女の兒の方が、却つていゝ。男の兒なんか、折角育て上げても、兩親を見向きもしなくなるかも知れない。女の兒だつたらそんな心配はない」と、啓吉は云つた。實際啓吉自身兩親に對しては、反逆兒に近かつたし、又その事を少しも後悔はして居ないので、彼は自分の子供がさうした行動に出るのを、是認しない譯には行かなかつた。從つて、反逆し易

い男の兒よりも、彼は優しい女の兒を、欲した。無論、その場合、妻と同じやうに、その兒の容貌に就いて、深い憂慮を懷かずには居られなかつたが。

「男の兒であつたら、顔なんか何うだつていゝけれど、女の兒であつたら、何うでせう。父さんに似て眼が小さくて鼻が低い上に、母ちやんに似て、口が大きかつたら、何うでせう！」と、臨月に入つた妻は、男女の兩方に聞に合ふやうに赤い一つ身の着物を縫ひながら、口癖のやうに、自分と夫との顔の棚下しをやつて居た。餘り、しつこいので終には、

「何んな顔だつていゝぢやないか、不具でさへなければ」と、啓吉は荒々しく怒鳴り附けた。が、妻の言葉によつて、啓吉の心の裡に蔓き起された疊は、その當座は中々消えなかつた。

三

が、生れる兒の顔の美醜などは、問題にならぬ程緊張した出産の日が來た。妻は、ホンの微かな陣痛が始まると、もう直ぐかゝり附けの産婆の家へ斷け附けて居た。故郷が遠いので、かうした場合の頼になる親戚は、一人も居なかつた。二十になつたばかりの妻は、「姙産婦の心得」と云ふ、露店で買つて來た本と、お産に就いては何の知識もない夫とを、唯一の頼として、生れて初

めての「生みの苦しみ」に向つて進まねばならなかつた。夫が、産室に居るのがいゝか、悪いかなどは、殆ど問題にはならなかつた。妻は、何うしても啓吉を産褥から放さなかつた。妻に取つて啓吉は、かけ替のない唯一の附添人であつた。

大きな陣痛の苦しみが其處にあつた。妻は、啓吉の手を握り占めながら、斷末魔の人間のやうに喘ぎ續けた。啓吉は、母の胎内を喰ひ破つて生れ出たと云ふ傳説の中の鬼子の事を、考へずには居られなかつた。新しき生命は、より舊き生命を虐げる事に依つて、生れ出るものとしか思はれなかつた。たゞ、二つの生命の爭鬪の軋りを緩和する爲に、親子の愛情と云つたやうな、機械油のやうなものが、存在することは、存在するが、妻の苦痛を見て居ると、啓吉の心は自分の子の出生を祝福する心には、何うしてもなれなかつた。

先刻から陣痛の襲つて來る間隔の段々迫つて來て居た妻は、突如烈しい苦痛の叫びを揭げながら、産床の中から、身をのけ反るやうに、押し出したかと思ふ刹那、妻の苦痛の呻きよりも、もつと強い泣き聲が、閉め切つた一室を壓倒して居た。啓吉は、到頭何物かの威力に壓倒されたやうに、その威力に反感を懷きながら、而もその威力の産物を、讃美せずには居られないやうな心持になつた。

啓吉は、ふと産婆が抱き上げようとする自分の子の肉體を見た。夫は、啓吉の妻が恐れて居たやうに、女の兒に相違なかつた。

啓吉は、女の兒だと知ると、直ぐ膝を、産婆の方に進ませて、泣き喚いて居る子供の顔を見た。夫は、可なり恐ろしい見物であつた。夫は生れた自分の子の宿命の一部を豫見するのと、餘り變つた事ではないやうに思つた。子供は、口を一杯に開けて泣き叫んで居る。何と云ふ大きな口だらうと思つた。が鼻は思つたよりも、高かつた。顔全體としても豫想した程は、醜くはないやうであつた。啓吉は、烈しい疲勞から恢復しようとして、微かに息を整へて居る妻の耳に、口を當てゝ、

「おい！　割合綺麗だぞ。が、口は大きいぞ」と云つた。妻は、一寸目を開けて微笑しながら、

「堪忍して下さいよ」と、云つた。微笑したのは、割合綺麗だと云ふ言葉に、安心したのだらう。堪忍して呉れと云つたのは、恐らく口の大きいのが、自分に似た事を、謝した積りであつたのだらう。啓吉は、子供の醜い點が、自分に似て居る爲でなく、妻に似て居る點であることを知ると、自分の責任の一部が、少しは輕くなつたやうに覺えた。

が、二三日經つて子供が段々泣かなくなり、口を閉ぢて居る時が多くなると、啓吉の妻は、何かの大發見をでもしたやうに、

「まあ、口が大きいつて、ちつとも大きくはないわ。顔の道具の中で、一番口が小さくて綺麗だわ、父ちやんに似て目が小さくて、鼻筋が通つて居ないけれど、口が一番綺麗だわ」と云つた。啓吉も、妻の發見に同意せずには居られなかつた。最初泣き喚いて居た時は、如何にも口が大きく見えたけれど、泣き止んで居る時は、さう大きい口でもなかつた。やつぱり妻の云ふ通り顔の道具立は妻に似ずして、自分に似て居る所が多かつた。

生れてから、最初の一二週間は、子供の顔全體が赤く脹らんで居て、まだ美醜の判別がハッキリとは判らなかつた。啓吉は子供が小さい鼻で、息をスゥ〳〵云はせながら、寢入つて居るのを見ると、

「お前が、心配して居たやうに、ちつとも醜い事はないぢやないか。おれ達には勿體ない位ぢやないか」と、妻に云つた。妻も、時々子供を抱き上げながら、

「父ちやんよりも、よつぽど綺麗だね、美奈子」と云つた。が、啓吉夫婦は、口ではさう云つたものゝ、子供が將來どんな顔になるかに就いては、生れぬ前と同樣の心配を持つて居た。殊に、三四週間も經つてからは、子供の顔が段々生來の醜さを、表はして來るやうに思はれてならなかつた。子供の顔が妻よりも、段々啓吉に似て居る事が、明になり出した。啓吉は、せめて目と鼻と丈は、妻に似るやうにと心私かに思つて居たのだが、鼻の短い所や、眼と眼との間隔の左右に開き過ぎて居る所や、額の廣い所などは、啓吉にソックリ似てしまつて居た。

妻は、時々子供の顔を、つく〳〵見ながら、

「まあ、父ちやんに、酷く似て居る事、まるで父ちやんの模型の樣だわ」と云つた。妻の云つた事はある點迄は本當であつた。子供は、母の顔からは殆ど何物をも承け繼がずに、凡てを父の顔から承けて居た。夫は、妻の云ふ通り啓吉の模型に相違なかつた。

啓吉はその容貌の爲に、生涯の運命の大半を支配される女性には、生れて居なかつたにも拘らず、自分の容貌や風采の引立たない事の爲にどれ丈、不快な自覺や感情を、持たされたか分らなかつた。生れながら、感受性が、人並以上に、發達して居た爲に、異性に對しては、常に異常な注意と愛慕とを感じながらその青年時代を一度も異性から愛されずに過してしまつた啓吉は、自

分の容貌に對して、消しがたい不快な自覺を持たされて居た。然るに、今自分の容貌が、模型に取られて、もう一つ此世に存在し始めたと云ふ事は、啓吉に取つては可なり堪らない事に違ひなかつた。

いくらか、茶目な所のある啓吉の妻は、よく子供を啓吉に突きつけながら、

「さあ、父ちやんの所へいらつしやい。實物と模型とがどの位違つて居るか、比べて上げるから」などと、冗談を云つた。子供の容貌の醜さを、ある程度迄諦めてしまつた妻は、子供の醜さの責任をなるべく啓吉に歸せしめようとして、二日目には、

「父ちやんにソックリ」と云つた。啓吉は、さう云はれる度に苦笑するより外はなかつた。

生れる以前は、子供に對して、何等の愛をも感じなかつた啓吉も、さて夫が生れて、而もその顔が自分に似て居るとなると、不思議な責任感を感ぜずには居られなかつた。醜く生れ附かした以上、その醜さを原因せしめた親の責任として、自分の愛情で、その醜さから來る不幸を成るべく、緩和してやらなければならぬと啓吉は考へ始めた。

その頃から、子供を抱いて湯屋へ連れて行つたりし始めた妻は、よく歸つて來てから、

「やつぱり、誰が見ても美奈子は綺麗ぢやないんだわ。『皆よく肥つて居る』とか、『大きい赤ちや

ん』だなどゝ、云つて呉れても『可愛い赤ちやん』と云つて呉れる人がないわ。餘り寂々しいので、可愛いとは云はれないんだわ」と、云つた。

「そんな事があるもんか、昨日俺が抱いて、門に立つて居ると、魚屋が、『可愛いお孃さんですね』と云つたよ」と、啓吉は反駁した。が、妻は默つては居なかつた。

「そりや、貴方！　商賣だからお世辭に云ふんですわ。八百屋なんか、今朝も美奈子を、男の子だと間違へて『坊ちやん』なんて云つて居るのだもの、後で、女の兒だと分つて、向うでテレて居たわ。が、全く無理もない、誰が見ても男の兒に見えるのだもの』と、容貌に就いては、啓吉よりも女性丈に鑑賞眼の發達して居る妻は、子供の容貌に就いても、露骨に過ぎる位、本當の事を云はねば止まなかつた。啓吉は、子供の顏の棚下しが、妻に依つて爲される時は、何だか自分が非難されて居るやうで、不快でもあれば、淋しくもあつた。

子供が生れてから、二月位してからの事であつた。啓吉の友人のLがつい一週間ばかり前に結婚したばかりの新夫人のH子さんを連れて挨拶旁々、啓吉を訪問して來た。新夫人のH子さんは、啓吉の妻と同じく口の大きい人であつた。H子さんは、啓吉の子供を抱き上げると、何よりも先に「まあ！　口が小さいわ」と、感嘆した。その言葉は可なり啓吉夫婦を欣ばせた。啓吉は、L

夫婦が歸つた後に、

「H子さんも、口が大きいから、やつぱり一番口が氣になるのだね。美奈子の口の小さいのを賞めて居たぢやないか」と、妻に云つた。

「夫御覽なさい！　美奈子は一番口が綺麗なのよ。愈々私に似なかつた事が分るわ。父ちやんの模型に違ひないわ」と、妻は斷言した。

子供は、段々大きくなつて居た。生れぬ先は、子供に對して何等の愛情をも持ち得ないだらうと、思つて居た啓吉も、その小さい肉塊を、自分の双手に抱きあげて、散歩などをして居ると、いつの間にか父らしい感情が、自分の胸一杯に浸み渡つて居るのを感じた。散歩にさへ連れ出してやると、子供はちつとも、無理を云はないで、その啓吉に似て細い目を一杯に刮いて、一歩一歩に展開して行く周圍の物象を、驚異の眼で、見詰めて居るやうに思はれた。物こそまだ云はなかつたが、さうして周圍の世界を觀照することに依つて、日一日純粹な經驗の世界を擴大して行くらしい子供が、何となく尊く思はれた。三四町も歩いて行く中には、段々眠氣を萠して、目を開きながら、眸の力が失せて行つて、寢入つてしまふ迄の經過が啓吉には、いぢらしく思はれた。さうして、啓吉の手の裡に、快く寢入つてしまつた顏を見て居ると、その顏の醜さなどは、もう

何等の問題でもなくなつた。顔が醜く生れて居れば居る程、愛してやらねばならぬと思はずには居られなかつた。

その頃であつた。啓吉はある日本橋に居る友人のMを訪問した。Mが折悪しく不在であつたので踏らうとして、三丁目の停留場に立つて居ると、矢張り本郷に住んで居るもう一人の友人のTに出會つた。二言三言話して居ると、無遠慮なTは、

「君は、はや子供が出來たさうぢやないか。皆がさう云つて居たよ、餘り早いので、出來た子供が君に似て居なければ悲觀するだらうし、それかと云つて君に似て居れば尙更悲觀するだらうと云ふ評判だよ」と、云つた。啓吉は、常から無遠慮な動作や言葉を臆面もなく、したり云つたりする事を、一種の得意のやうに心得て居るTに對して、不快を懷いて居たが、その時の言葉は、啓吉の生活の内部に深く觸れて居る丈に、啓吉は夫に依つて、可なり傷つけられた。

啓吉は、子供が自分に似て居ない爲に悲觀するやうな何等の原因をも持つて居なかつたから、Tの言葉の前半の不當な推測を可なり憎んだと同時に、Tの言葉の後半をも、可なり不快に思はずには居られなかつた。子供が俺に似て居れば似て居る程愛してやるんだ。悲觀なんかするものかと、Tに云つてやりたかつた。が、さうは負惜しみを云つて居るものゝ、子供の容貌に對する

啓吉の悲觀は、子供の生長に連れて、決して薄らぎはしなかつた。

子供を、おしよぼにしてからも、啓吉の妻はよく子供の髪を梳いてやる時などに、「生際まで父ちやんに似て居る。まるで、男の生際だわ。生れた時は、こんなでもなかつたのに、益々父ちやんに似て來る」と、それでも、もう餘り子供の容貌に就いて、悲觀はして居ないらしく、冗談半分に云ふ事が多かつた。

三月となり四月となり、順當にメキ〳〵と大きくなつて、丈夫に成長する見込が立つて來ると、啓吉は愈々自分の子の將來を考へずには居られなくなつた。

つく〴〵見て居ると、さう迄醜い兒だとは思はれなかつたが、決して美しい顔ではなかつた。親の啓吉が、妻以外に異性からの愛を經驗しなかつたやうに、妻の言葉に從へば啓吉の模型たる美奈子も、その顔の爲には、異性からの愛を到底享くべくも思はれなかつた。異性からの愛を享ける事の出來ないと云ふことは、男性に取つては幾何かの淋しさを辛抱すれば、いゝ事であつたが、女性に取つては、夫は致命的(フェータル)な缺陷に近かつた。

夫でもまだ十か十一迄は、容貌に對する明確な自覺なしに成長するのだから、まづ幸福であり得るとして、十三四から十五六の妙齢の時代に、少女が段々自分の醜さを意識し始めると云ふこ

とは、女の生涯に於ては、可たり重大な悲觀に違ひないと啓吉は思つた。萬金を投じた裝身具が、ある女性の美醜に、少しも影響しないことを思ふと女の美しさや醜さは、後天的にはどうとも仕方のない絶對のものに相違なかつた。さう考へると、啓吉はもう訂正や改良の餘地のない子供の容貌に就いて、悲觀的な諦めに陷るより外はなかつた。

「お美奈ちやんは、大きくなつたら、大學を出て女理學士になるんだよ。學問をさして、一人でも喰べられるやうにして置いてやらないと」と、妻はこんな事をよく云つた。

啓吉は夫を聞くのが、淋しかつた。彼は、職業婦人の階級を常に嫌惡して居た。そして、家庭に沒頭してつゝましく暮して行く女が好きであつた。彼は、教鞭を取つて居るオールドミスなどを見ると、寧ろいたましいとさへ思つた。女の天性に背いて、その女性としての優しさや美しさを虐げて居る彼等を、憫まずには居られなかつた。從つて、自分の娘をさうした生活に入れるべく準備させる事などは、思ひも寄らぬ事だつた。

「女教師などをさせてたまるものか。女學校を出たら、直ぐ結婚させるのだ」と、啓吉は妻に反對したが、夫は附景氣に近かつた。

女中を雇つてから、家内も增したので、啓吉は、今迄住んで居た牛込の柳町から、小石川の高臺の町へ越して行つた。

啓吉の引越した家は、新築の二階建が四軒並んだ東の端であつた。そして啓吉の家の東側は、炭屋が急に粗惡になつたやうに平家建の汚い家が、二軒續いて居た。

引越した翌日に啓吉の妻は、一大發見でもしたやうに、

「まあ驚いた、隣には小さい子供が五人もウヨ〳〵して居る。一番上の子供が十位にしかならないのに」と、多蹉を蛇よりも怖れて居る啓吉の妻は、子供の澤山あることを、罪惡か何かのやうに啓吉に話した。

如何にも、妻の云つた通り、朝に晩に隣の子供はゾロリと列を作りながら、出動して、啓吉の家の向ひの塀に五人並んで、背を靠せながら、物珍しげに新しく越して來た啓吉の家の中を、のぞき込んで居た。

一番上が、女の兒で、夫から三人續いて男で、一番下が三つになる女の兒であつた。一番上の

女の兒が、洗ひざらした染絣を着て居る外は、皆ボロ〳〵になつた手拭地の着物を着て居た。夫もどの着物が、どの子供に屬して居ると定まつては居ないらしく、日に依つて一枚の着物が兄から弟へ、弟から兄へ、移つて行つたりして居た。一番下の女の兒は、五人の中で一番いたましく見えた。左の足が、餘程短いと見え、歩くのに骨が折れるらしかつた。そして、姉や兄の後からヒヨコ〳〵と、駈けつて行く姿が滑稽にも見えれば、いたましくも見えた。そして、營養不良の爲に、腹が異常に膨れて、夫が又十分身體に合はない一つ身の着物からハミ出して居た。そして、その兒は兄弟から、デコちやんと呼ばれて居た。それは、心持ち額がおでこであつたからで、デコちやんと呼ばれるとウンと云つて返事をして居た。デコちやんの母親迄がデコちやんと呼んで居た。啓吉夫婦も何時の間にか、その子をデコちやんと呼ぶやうになつて居た。

啓吉夫婦は、日が經つに連れ、此の女の兒に一番同情した。妻は、その兒に就いて、色々な事を調べて啓吉に報告した。

「あのデコちやんは鳥眼で、耳が少し遠いのですつて、それにあんなヒドい跛足と來て居るのだから、今の内に死んだ方が却つていゝ位だわ。でも、母親は、あの兒が一番可愛いと見え、あの兒を一番大事にするのよ。上の子供は、そらピシ〳〵叩いて居るけれど、あの兒丈は、餘り叩かないの、夫にまたあの子が、親思ひで煩さがられながら『お母さん！　お母さん！』と、云つて附き纏つて居るの」と、妻は一寸言葉を切つたが、直ぐ言葉を續けて「でもあなた、あの兒でも内のお美奈ちやんよりは、器量がいゝのよ。鼻だつて高いし、眼だつて大きいでせう」と、云つた。

妻から、さう露骨に比較されて見ると、啓吉も、厭々ながら、その事を承認せずには居られなかつたが、隣のその子供と、自分の子供とを比較して、孰らがより幸福に生れ附いて居るかと、問はれたら、啓吉は、夫は無論自分の子だと答へずには居られなかつた。何となれば、俺は、自分の子供を幸福にしてやらうと云ふ意志と力とを持つて居るからと、啓吉は思つた。

美奈子は、父や母がその將來に就いて、心配して居る事などとは、丸切り沒交渉に、グン〳〵大きくなつて行つた。十分に發達した四肢には、圓い輪が、幾つも〳〵入つて居た。そして、父や母があやしてやると、細い目を尙更細くして笑つた。

風邪一つ引かなかつた。お腹を一度だつて、惡くした事はなかつた。

「ほんとに丈夫な兒だわ。丈夫な所も、父ちやんに似て居ると見える」と、妻はあきれたやうに、太り切つた子供を抱き上げながら云つた。

秋の初めになつて、今迄居た女中が國へ歸つて、新しい女中が來た。妻は、啓吉が外出先から、」
歸つて來ると、
「新しい女中が來てよ。でも、眼附が何だか恐いのよ。素人ぢやないわ。用心しなくつちや」な
どと云つて居た。
二三日して啓吉が、會社から歸つて來ると、妻は何かの大事件が起つたやうに、
「まあ大變よ、女中がお美奈ちやんに、お菓子を喰べさせたのよ。よだれかけにお菓子の餡粉が
二所も附いて居たのよ。それだのに、白ばくれて喰べさせないと云つて居るのよ」と、云つた。
今迄、お乳の外は何にも喰べさせた事がなかつたので、啓吉夫婦は可なり騒いで、女中を烈し
く叱責した。が、女中は何處迄も、白ばくれて、事實を白狀しなかつた。
が、美奈子の腹の中は、正直であつた。その夜から、急激な下痢が始まつて、ムシ〳〵苦しさ
うに泣き續けた。
今迄少しも瞻かずに、大きくなつて來て居た丈に、かうして急激な病氣に襲はれると、啓吉の
妻は蒼くなつて心配した。
常には、人中に出るのが恥しくつて、友達が訪問して來ても、滅多に挨拶に出たことのない妻

も、自分の子供の病氣だとなると、恥も外聞も介意つては居られないらしく、子供にあんこを喰
べさせて、發病の原因を作つた女中に、子供を負はせながら、小兒科の病院へ走つて行つた。
幸に、子供は夫程憂慮すべき程の重態と云ふのではなかつた。が、翌朝が來ても、捗々しくは、
快方に向はなかつた。
子供の將來に就いて、可なり憂慮して居る啓吉も、さて子供が將來容貌から當然受くべき煩悶
を無くす爲に、此病を機會として、意識も何もない赤兒の時代に此儘死んでしまつた方が、却つ
て子供の爲に幸福だとは夢にも思へなかつた。
壯健で、ピン〳〵して居る時には、夫程大切だとは思はなかつた子供の存在が、さて一旦子供
が發病してからは、まことに尊いかけ替のない物のやうに思はれ始めた。熱の爲に、少し上氣し
てうつら〳〵と假睡の境を彷徨して居る子供の顏を見ると、今迄心の一角に押し詰められて居た
父たる感情が、猛然として心の裡一杯に擴がつて行くやうに思つた。
今迄、子供には殆どかまつた事のない啓吉も、子供が發病してから以來は、妻の手代りに幾度
も子供を抱きかゝへた。子供が病氣になつてからは、もう顏などは、どんなに醜くてもいゝ、丈
夫で大きくさへなつて呉れゝば、是程いゝ事はないと思ひ始めた。

「でも美奈子が病氣になつてからは、父ちやんが美奈子を可愛がつて呉れる」と、妻は欣びながら、必死になつて子供を介抱して居た。夫でも、さう悪くはならなかつたものゝ、捗々しく恢復もしなかつた。如何にも力なささうに泣く子供の泣き聲が、啓吉夫婦の心を痛めて居た。

丁度、發病してから三日目であつた。啓吉が、會社から歸つて來て、

「何うだつた！　美奈子は！」と、訊くと、妻は待ちかまへて居たやうに、

「お美奈ちやんは、もうよつぽどいゝのよ。もうあんまりうんちもしなくなつてよ」と、云ふ返事をしてしまふと、直ぐ又言葉を次いで、

「あなた！　お隣のデコちやんも、病氣なんですつて、昨日お朔日で赤の御飯を炊いたのをお腹一杯に喰べたのですつて、また喰べる筈なのよ、此頃はお米が高いので、常には十分喰べさせないらしいのよ。だから、赤の御飯を炊くと皆が、おいしい〳〵と云つて思ひ切り喰べたのですつて。すると、デコちやんのお腹がいつもの二倍位大きくなつて、苦しい苦しいと蹶き始めたのよ。暫くすると熱が出てうん〳〵呻り出したのよ。直ぐお醫者へ連れて行けばいゝものを、隣のおかみさんは、頭を氷で冷して、お腹を揉んでやつたのですつて。そんな事で喰べた物が消化れる筈はないぢやありませんか」と、妻は隣のデコちやんの病氣を、面白い話題か何かのやうに、喋

べつた。啓吉も、常から太鼓のやうなお腹をして居るデコちやんが、赤い御飯を腹一杯喰べて、お腹をいつもの二倍位脹らしたと云ふことが、一寸滑稽な事として、微笑せずには居られなかつた。が、さうした喰過ぎに對する母親の無智な手當に對して、眉を顰めずには居られなかつた。

「馬鹿な。早く醫者に連れて行つてやればいゝのに。夫とも、タカヂヤスターゼでも、飲ましてやればいゝのに。頭をいくら冷したつて、お腹が小さくなるものか」

「だつて、お醫者に連れて行けば、五十錢なり一圓なり入るでせう。五十錢入れば、家内が一日丈喰べずに居なければならないのですもの」と、妻は醫者に連れて行かないことを、如何にも當然のやうに辯護した。啓吉は、助かるべき命が、不當に害はれつゝあるやうな氣がして、可なり不快であつた。彼は、

「五十錢や一圓なら、俺が出してやつてもいゝ」と、云つた。すると、妻は言下に反對した。

「そんな事を云はうものなら、また何時かのやうに怒鳴り込んで來ますよ。貧乏だと思つて、輕蔑するなと云つて」と、云つた。啓吉の妻は、デコちやんの母親を可なり怖れて居た。夫は、かつて啓吉の家の女中に啓吉の妻が「隣へ子供を連れて行くと、内職の邪魔をするから、なるべく連れて行くな」と、云つたのを、向うで聞き附けて怒鳴り込んで來た事がある爲であつた。

が、啓吉夫婦も、さう隣のデコちやんの事などは、かまつては居られなかつた。いつの間にか、夫婦の凡ての注意は、美奈子の上に注がれて居た。

妻は、夜も落着いては、寢なかつた。子供が、むづがれば、どんな深夜でも、起き上つておんぶをしたりだつこをして、癇癪を取つてやらねばならなかつた。

五日目邊から、美奈子は段々恢復し始めた。お腹が漸く恢復し始めたと見え、下痢が止まつて來た。今迄、ムヅ〳〵と機嫌が悪かつたのが、段々直つて來た。あやしてやると、微かではあつたが、笑顔を見せるやうになつた。

が、壁一重隣では、デコちやんが、段々重態に陷りかけて居た。ある日、啓吉が歸つて來ると、妻はいきなり、

「隣のデコちやんが、死にさうなのよ。もう、今日明日が危いのだつて」と云つた。啓吉は、道にデコちやんが可哀さうに思はれた。手を盡せば、容易に恢復し得る筈のものを、人爲的な窮乏と怠慢との爲に、縮まされて行くデコちやんの命が、悲しまずには居られなかつた。

「何か品物を買つたらいゝでせう」と、云ふ妻の忠言を利かずに、五十錢を紙に包んで隣の家の破れたすだれを持ち上げて、中へ入つた。じめ〳〵した疊の敷かれた四疊半と六疊とが、續いて

居て、奥の六疊の眞中に、デコちやんは、兩手をダラリと兩方へ擴げて寢て居た。顏の色を見ると、もう生きて居るとは、思はれぬほど蒼ざめて居た。

「まあ、旦那さんですか、御親切に。いつも、色々な物を戴くので、お隣の旦那が、お歸りだと云ふと、是が夕方は鳥眼で、目が見えませんのに、表へ走り出ようと致しますのですよ。昨日なども、それお隣の旦那がお通りだと云ふと、もう目が明かないのに『ウンウン』と、頷きました」と、デコちやんの母親は、何時もガミ〳〵子供達を叱り附ける時とは、全く打つて變つたやうに、しんみりと啓吉に話しかけた。啓吉は、此女の話を本當の事を話して居るやうにも、又お世辭の爲に、そんな事を作り出して話して居るやうにも、思はれたが、夫でも死なうとするデコちやんに對して、可なり深い憐憫を呼び起されずには居られなかつた。啓吉は、今でも完全な手當さへ盡せば命を取り止める事が出來ないものでもあるまいと思はれた。

「一體、お藥はどんな物を上げて居るのですか」と訊いた。

すると、母親は、起き上つて棚の上から、小さい藥壜を取り下して、啓吉に見せた。

「お醫者が是をやれと云ふものですから。ズーツと續けてやつて居りますのです」と、云つた。

啓吉は、ほのぐらい電燈の光で透して見ると、その壜にはグリセリンと云ふレッテルが貼つてあ

つた。啓吉は、夫を見ると、茫然と呆れる外はなかつた。グリセリンと云へば下劑に違ひない。喰べ過ぎて居る當座こそ、グリセリンを飲まして、便通を良くするのは適當の處置に違ひないが、その下劑を飲ましつゞけて幾度も下痢をした後に、衰弱して死ぬまでグリセリンを飲ましつづける母親の無知を、啓吉は怒つてよいのか、悲しんでよいのか、判らなかつた。

「そんな馬鹿な事があるもんですか、早く醫者へ連れて行つて、手當をして上げなさい。五圓や十圓の費用なら、私が出して上げますから」と、母親の無知を憤慨した啓吉は、かう口に迄、出さうとした。が、よく考へて見ると、自分が此の兒の運命に夫程迄干渉してよいものか、悪いものかさへ判らなかつた。デコちやんに取つて、生き延びることが幸福か、此のまゝ死んでしまふ方が幸福かさへ判らなかつた。ひどい跛足の上に、鳥眼で聾に近い女の兒の生涯が、夫程幸福だとはどうしても思はれなかつた。又たとへ、無知にしろ兩親とも揃つて居る以上、その無知と窮乏との爲に死んで行くことは此兒の當然の運命のやうにも思はれた。その上、啓吉自身も病床に在る子供を持つて居る以上、五圓でも十圓でも、可なり大切な金であつた。

さう思ひ返すと、啓吉は體よく挨拶を濟ましして歸らうとした。すると、母親は、デコちやんの枕元に寄りながら、

「お隣の旦那だよ」と、云つた。無論、瀕死の子供に、そんな言葉が通ずる筈はなかつたが、夫でも身體を一寸と搖がせて、眼をギロリとさせた。その眼の中は死んだ魚のやうに白けて居た。

家へ歸つて來ると、

「デコちやんは、何う」と、妻が訊いた。

「もう死んだと同樣だ。あれぢや堪らない、衰弱し切つた子供にまだ下劑をかけて居るのだもの」

「へえ！」と、妻も遺に駭いて居たが、直ぐ「でも、そんな亂暴な育て方をしても、上の兄さんや姉さんのやうに生きて行く兒は、生きて行くんだわ。やつぱり、デコちやんは負けたのよ。一人無くなれば、後の四人が喰べる御飯だつて夫丈分配まへが多くなるのよ。さう〳〵、デコちやんの直ぐの兄さんが、はやデコちやんの着物を着て居るのよ。まだ死なない前から」と、妻はデコちやんの死んで行くのを、さう氣にもかけないやうであつた。啓吉にも、夫程悲しむべき死のやうに思はれなくなつた。

「まあ、あの身體ぢや、死んだ方がいゝかも知れない。あのお母さんも、五人の兒が一人減つて、」

内心ではやれ〳〵と思つて居るかも知れないぞ」と、啓吉は云つた。

「ほんとに、あんな不具ぢや、生きて居ても苦勞するばかりですからね。あの子が苦勞するばか

りでなく、兩親迄も苦勞するのですからね」と、啓吉夫婦は、デコちやんの死を、いかにも當然な、結果的には却つていゝ事のやうに決めてしまつた。そして、妻は自分の子を抱き上げながら、

「お奈奈ちやんは、死んだら駄目よ、お前はデコちやんとは違ふのだから、早く癒つてお見れよ。父ちやんと母ちやんとが心配して居るのだから」と云ひながら頻摺りをした。啓吉も、妻の此の言葉を、ピツタリと自分の感情で追つて行つた。どんなに顏が醜くても、その爲に將來どんなに苦勞しようとも、自分の兒には何時迄も、生きて居て貰ひたかつた。親の愛で能ふかぎり、その不幸を緩和してやる、また夫丈の力と覺悟とを持つて居ると啓吉は思つた。そして、夫は又醜く生れつかした自分の爲さねばならぬ責任であると思つた。

* * *

二三日すると、隣のデコちやんは、白骨になつて、隣の家の戸棚の一隅に置かれて居た。表を通ると、すだれごしに、その前に供へられて居る蠟燭が、搖れるのが見えた。

奈奈子の病氣は、もうスツカリ良くなつて居た。そして、病氣をしない前よりも、元氣がよくなつたやうに、腹這ひになつて居るお腹をグツと持ち上げて、まだ前へは進めなかつたが、手の力で、後退りが出來るやうになつて居た。あやしてやると、顏の相好を崩して笑つた。どんなに

醜くてもよい、一人の人間がグン〳〵生長して行く事はその親に取つて、美しく且つ尊い事に相違なかつた。

——大正七年九月——

葬式に行かぬ譯

一

砂を嚙むやうな無味な、不快な三年が到頭終つた。雄吉は、Kにある文科大學を卒業したのである。

最初、Kに來る時に、懷いて居た明るい華やかな希望は、一つも達せられては居なかつた。最初の希望が――夫は子供らしい空想に近いものではあつた。が――實現の緒にも、接せずして、全く蹂み躪られてしまつたことは、彼の三年の生活を全然灰色な不本意なものにしてしまつた。

Kの文科大學の教授であつたS博士に、認められて、その人の紹介に依つて文壇に出ようと云ふやうな、蟲のいゝ子供らしい希望は、入學して一年經つか經たぬ間に、幻滅してしまつて居たのである。

顧みると、たゞ三年の生活を、不快な周圍の裡に、不快に暮してしまつた丈である。高等學校に居た時には、彼の周圍は凡てが文學至上主義であつた。生活は極端に出鱈目であつたけれども、眼の置き處丈は、皆一分も本當の處から、側へ滑らしては居なかつた。が、Kの大學へ來てからの雄吉は、基督教徒が異端者の中へ混じつたやうな、ゴツ〳〵した性に合はない周圍を見出した。

「先生！　今お話になつたヴエルレエヌと云ふ人は、何う云ふ人です」と、云ふやうな質問が文學概論の講義の時間に出る時などは、雄吉はつく〴〵教室が厭になつた。駈け出しの投書家でも知つて居さうな名前――（尤もヴエルレエヌと云ふ名を、知らなければ文學全體が分らないとは雄吉も思はなかつたが）――を、堂々と質問して居る文科大學生を見ると、雄吉は彼等と一緒に席を並べて居るのが、全く情なかつた。

雄吉が、彼等との交渉で一番不快に感じたある一夜を、彼は頭の中に、記憶して居る。彼等の事を考へる毎に、その晩の事が、意識の裡に、ハツキリと浮んで來て、反感を持たずには、彼等の事を考へる事が出來なかつた。夫は、彼等と一緒に雜誌を出すと云ふ相談をした時の事であつた。

入學した當時の事で雄吉がKの文科大學にも又級友にもまだ少しの幻滅をも感じて居ない頃だ

つた。其頃の雄吉は、文學的には可なり熱狂した。彼は誰かと話して居る時、少しでも文學の話が出ると、

「いや、今の日本のやうに文學に中央集權が行はれて居る内は、とてもいゝ作品は現はれはしない。東京の文壇とは質と人間とを全く異にした、少しも文壇的な因習を持つて居ない、新しい文學運動が地方に起らなければ駄目だ。丁度、ダブリンを中心として、愛蘭文學の復興が行はれたやうに日本でも東京以外の地に、新しい文學が起らなければ駄目だ。日本で、さうした文學運動の根據地としては、此K市より外にはない。我々K大學に在るものが、卒先して大いにやらなければならぬ。夫には是非同人雜誌を出さなければ駄目だ」と、云ふやうな事を云つて居た。夫は、可なり稚氣を帶びた空想ではあつたが、その頃の雄吉に取つては、可なり眞面目に考へて居た事であつた。

雄吉のさうした空想的氣焰に感化されたのか、夫とも彼等自身の要求から出たのか、同人雜誌を出さうと云ふ贊成者が、六七人級の中に出て來た。そして、具體的に計畫を立てると云ふ相談會を、K市の中心の繁華な町のある牛肉屋で開く事になつた。が、愈々集つて見ると、皆は、雜誌の話などは、曖にも出さないで肉を喰つたり酒を飲んだりした。雄吉は、最初から、かうした

相談會が妙に遊び半分になるのが厭であつた。が、彼等の二三人が、酒に醉つぱらつてしまふと、その内の一人が、

「何うです、是からノイグルント（之は七條新地と云ふのを、獨逸語でかう云つたのだ。雄吉はこんな言葉遣ひを、聽くと嘔吐を催した）へ行かうぢやありませんか」と云ひ出した。さう云ふ方面の智識を殆ど持つて居なかつた雄吉は、ノイグルントへ行くと云ふ事が、即ち女郎をでも買ひに行く事だと一人極めに思ひ極めて居たので、甚だ不愉快に感じた。先刻から、眞面目な雜誌の相談なんか、少しもやらないで其日の會合が、單なる酒を飲む會に終りかけて居るのを憤慨して居た雄吉は、

「僕は厭だね。僕はそんな要求なんか、少しもないからね」と、直ぐ樣、反對した。すると、夫を言ひ出した男は、少し薄笑ひをしながら、雄吉の方を見て、

「富井君！　君は誤解しては困るよ。僕達は、そんな低級な目的で行くんぢやないんだよ。たゞノイグルントの情調を味ひに行くんだよ。文學をやらうと云ふ者が、あゝした處の情調を知らなければ駄目ぢやないか」と、云つた。さうすると、外の連中迄が、

「贊成々々！　富井君は大いに小說を書かうと云ふんぢやないか。彼處の空氣を味つて、長田幹

彦以上の傑作を書いて呉れ給へ」と云つた。雄吉は、全く助からないと思つた。彼は、かうした連中と雑誌を出す相談などを、やり始めた事をつくづくと後悔した。

が、彼等は、雄吉が厭がるにも拘らず、彼を擁して所謂、ノイグルントと云ふ處へ連れて行つた。雄吉は、その途々で、彼等から幾度脱しようとしたか分らなかつた。が、彼等は執拗に雄吉を引止めた。人通りの多い繁華な夜の街で「行くの行かぬ」と、彼等と押問答するのが、如何にも馬鹿らしかつたので、雄吉はおしまひには諦めて、默つて彼等の後から附いて行つた。

雄吉は後にも先にも、所謂ノイグルントのお茶屋に上つたのは此時丈である。寒い晩であるにも拘らず外套も着ないで、紡績の衣物を着て、かうした華やかなお茶屋の門を潜るのは、全く悲惨であつた。

K市の女に特有な妙に甘つたるい「おいでやすや」と云ふ言葉に迎へられて、電燈が明るく照した二十疊に近い大廣間に通された。雄吉は、河童が陸上へ放り出されたやうた、周圍と調和したい所在のない、不安な心持を、最初から感じた。

が、他の連中は、かうした場所には馴れ切つて居ると見え、女中達などゝ、輕い冗談などを巧みに取り交はしながら、聘らせにやつた藝者が來るのを待つて居た。

自分が醜く生れ付いて居る爲に、異性からは、何等の好意をも持たれさうにもないと云ふ、雄吉の不斷の意識は、彼をして何時の間にか一個の婦人嫌惡者たらしめて居た。夫は、最初は負け惜しみから出た反抗的た、反動的な心持であつたかも知れなかつたが、何時の間にか、夫は雄吉の性格の主なる部分を形作つて居た。殊に、凡ての男性は、必ず自分に對して注意を拂ふに極まつて居ると、思ひ上つて居るやうな女性は、堪らないほど厭であつた。かうした、意識を持つて居る女は、容貌に自信を持つ藝者などに多いやうに思はれたので、藝者なる階級に對して彼は常から奇妙な反感を持つて居た。

暫く待つて居ると、仲居が麥酒とかき餅とを、持つて來た。雄吉は、お茶屋で遊ぶとすれば、何か美味い料理でも喰べられるのだらうと思ひ、夫をせめてもの樂しみにして居た丈に、此のかき餅と麥酒とを見ると、可なり失望してしまつた。

その中に、まだ年の若い藝者が、四五人ゾロ〳〵とやつて來た。雄吉は、その藝者達が本當に美しければ、その美しさ丈は味へるかも知れぬと思つて居たが、來て見ると、彼等が日本全國を通じて持つて居る評判に拘らず、少しも美しいとは思はれなかつた。皆、のつぺりとした少しも彈力のない顏をして居た。

藝者達が入つて來ると、雄吉を除いた外の者は、皆燥ぎ出した。皆、夫々に自分の知り合の女を、聘んだと見え、「先度は失禮」とか、「ちつとも、來やはらしませんのどすな」などゝ、云つたり云はれたりして居る。が、雄吉に取つては孰の女も孰の女も皆、氣づまりな他人であつた。藝者が、一人來れば來るほど、見知らない氣づまりな人間が、一座に一人丈多くなる事であつた。彼等は、交替に三味線を彈いたり、歌を唱つたりした。が、少しも音樂の解らない雄吉に取つては、三味線の音は、彼の神經を、益々苛立たせるばかりであつた。

彼は、麥酒も飲めなかつた。夫かと云つて、退屈紛らしに喰ふべきものは、かき餅の外には、何物もなかつた。彼は、自分の心持が段々孤獨になつて行くのを感じた。その孤獨は周圍に多くの人間が居るのにも拘らず、醸される孤獨丈に、一層堪らなかつた。一座の連中が、遊蕩の氣分の中に、入つて行けばゆくほど、雄吉の心持丈は、一座の間から押し出されて、その緣の處で跳いて居なければならなかつた。

孤獨に苦しんだのは、心持丈ではなかつた。紡績の羽織を着た自分の見すぼらしい姿が、藝者達の金紗御召などの華美な着附と、一種不思議な對照を作つて居ることが、堪らないほど不愉快であつた。一座の調子に融合し得ないで、自分一人が油の中の水のやうに、表面にマザ〳〵と浮

き出して居る事が、雄吉自身にも、シミ〳〵と感ぜられた。その中一座の連中は、段々興が乘つて來たと見え、その中の二三人は手拭で鉢巻をして、手を變な風に動かしたりなどした。夫を見ると、雄吉は益々不快になつた。そして、心の中で彼等を思ひ切り輕蔑した。こんな連中と、雜誌を出す相談などをするのは、惡魔を巡禮の道伴れにするやうなものだと思つた。雄吉が益々不愉快になつて、一座のサークルから、二三尺後に退つて、壁に凭れて、つまらなさうな顏をして居ると、藝者の一人が、夫を可哀相だと思つたと見え、「貴方も何か一つお歌ひなさいな」と、云つた。雄吉は、てんで歌ふと云ふことが厭目だつた。彼は、少年時代に音階を唱へても、オルガンに會はなかつたほど、調子外れの聲を持つて居た。殊に、藝者の三味線に合はせるやうな小唄などは、半句だつて歌へなかつた。此の藝者の憐憫を買つてからは、彼は、此の一座に居ることが、何うにも不快で堪らなくなつた。夫にふと考へると、かうした遊蕩の席に列つた以上、此の費用に對する當然な割前を出さなければならぬと思つた。雄吉は、その當時藝者を聘ぶと云ふことは、可なりの大金がいることだと考へて居た。殆ど苦學生に近かつた彼には、その寄の牛肉屋の會費を拂つた後には、幾何も懷に金が殘つて居なかつた。こんな不愉快な思ひをして、割前なんかを拂はされては堪らないと思ひ出すと、彼は一刻も早くその席を逃げ出したくなつた。さう考へる

と、彼は奮然として立ち上つた。

「僕は先きへ失敬するから」と、さう云ひながら、彼はグン〳〵席を立つた。彼の行動は、その座席に取つては、如何にも、調子外れた、突拍子なものに違ひなかつた。

「富井君が歸るのなら、僕達も歸らうぢやないか」と、云ふ聲を聞流しにして、彼は急いで玄關へ出て來た。すると、二階から二三人の舞妓らしい女が、降りて來て、ニコ〳〵笑ひながら、

「貴方、まあおよろしいぢやおま〳〵んか」とか、何とか云つた。何だか、くすぐつたいやうな氣持がした。外へ出ると、雄吉は、凡てが不愉快であつた。雜誌を出すと云ふ相談會を、故意にさうした方面へ、ユガレさして行つた彼等が、不愉快であつた。自分があゝした世界の中に、入り切れないに就いての寂しさの反動から來る不快があつた。最後には、自分が、その席を脱れ出たことが一座の者に對する反感ばかりでなく、割前を怖れると云ふ心持が、混じつて居た事が一番不快であつた。結局、凡てが不快であつた。

此の事があつて以來、彼はめき〳〵と周圍を離れた。彼は周圍を輕蔑した。周圍も、彼を輕蔑しかへした。

その上、もう一つ彼の三年間の生活を寂しくした事は、S博士に就いての幻滅であつた。

S博士は、明治三十年から四十年にかけて、日本の文壇の最も目覺しい水先案内人の一人であつた。が、四十年頃から以後、文壇の殆ど全體が此の水先案内人の指す方角とは、丸切り別な方角へ滑つて居たので、S博士は文壇とは、何時の間にか懸け離れて、大學教授と云ふ名稱のもとに、文學の少しも分らない二三十人の學生に、文學の講義をすると云ふ、博士自身に取つても、やり甲斐のなささうな仕事をして居た。

「日本の文壇は、今全く不良少年の手に落ちました。何等の教養も、何等の傳統もない不良少年の手に落ちました」と、博士がその華やかであつた青年時代の、唯一の名殘であるやうな、美しい眸を輝かしながら、嘆聲を洩らすのを聞く時には、雄吉は不良少年の手に落ちた文壇を悲しむよりも、博士自身に對して、妙な寂しさを、感ぜずには居られなかつた。

でも、その當時の雄吉に取つて、博士に認められて、文壇に出ると云ふ事は、唯一つの可能な道程であつた。

が、初めて開かれた級會の席で、博士が先づ最初に口を開いて、

「此中で、詩をやる方はありませんか。文學をやる以上、詩をやらなければ嘘です」と、云つた時、雄吉は可なり失望した。彼は、詩が少しも面白くなかつた。或は面白くないと云ふよりも、

分らないのかも知れなかつた。(解らないのだと云はれても、その當時の彼は恥辱だとも思ひはしなかつたらうが)詩が面白くなかつた彼は、詩が藝術の精粹であるやうに考へて居る詩人や、詩の研究者を輕蔑した。從つて、自分の文學的活動に於て、唯一の頼りとしようと思つて居るS博士が、自分の全く入り得ない世界の極端な愛好者であることを知ると失望せずには居られなかつた。彼の知つて居る同じ文科の卒業生は、

「卒業論文でも、詩をやらないと一割方損ですよ。僕は、ショオの劇をやつた爲、いゝ點を貰へなかつた」などゝ云つた。そんな事を聽く度に、雄吉はある種の心細さを感ぜずには居られなかつた。

夫でも、雄吉は自分の創作が完成する毎に、博士の所へ持つて行つた。が、幾何持つて行つても、博士からは、何の批評も聞く事が出來なかつた。

夫は、雄吉が卒業する半年位前であつた。東京に居る友人達が、發行する同人雜誌に依つて、彼は初めて自分の創作を發表することが、出來た。文學に志した者が、自分の創作が初めて活字になる時のあの大なる欣び、若い大將が初めて一城を攻陷した時に感ずるやうな、あの大きな凱旋的な欣びを、雄吉も人並に感じて居た。彼は、活字になつた自分の小說に、貪るやうに一通目

を通すと、直ぐS博士に宛てゝ郵便で送つた。自分の原稿に就いて、何も云はなかつた博士も、」かう活字になつた上からは、何とか批評をして呉れるに違ひないと思つた。

彼は、その翌日大學へ出る時、學校でS博士に逢へば、何とか云つて呉れるに違ひない。縱令、賞めて呉れないにしろ、挨拶位はして呉れるだらうと思つて居た。

その時間は、S博士がマクベスを講義して居る時間だつた。雄吉は、華美な柄の背廣の洋服を來た博士が教室に現はれると、胸をワク〳〵させ乍ら(夫は決して誇張ではなかつた)博士が、自分の創作に對して、否少くとも自分の創作の載つて居る雜誌「新思潮」に對して、何う挨拶するだらうかと待つて居た。

が、博士は何時ものやうに、何事もないやうに頁をめくつた。そして、雄吉が、雜誌を送つた事などは、少しも念頭にないやうに、何時ものやうに流麗な、辭句玉を爲すと云つたやうな、譯し振を見せて居た。雄吉は、失望し乍ら、夫でも教室である爲に、博士が個人的な挨拶を避けて居るのだらうと思つて居た。

その中に、何時ものやうに一時間が經つた。鈴の音を聽くと、博士は華奢に身を動かしながら、」教室を二三歩出て行つたが、直ぐ歸つて來た。その咄嗟の雄吉は、博士が自分を求めて、雜誌の

挨拶をするのだらうと思つた。雄吉は、自分の顔が赤くなるのを感じた。が、意外にも博士は、級の特待生である村松と云ふ男を見付けると、

「やあ、村松君！　赤トンボを有難う。面白く拜見しました」と、氣輕に挨拶すると、その儘グングン行つてしまつた。赤トンボと云ふのは、村松と云ふ男が經營して居る五六枚の小さい佛蘭西語の雜誌であつた。雄吉は、「オヤ〳〵」と思つた。その「オヤ〳〵」は、意外な驚きの伴つた「オヤ〳〵」では、無くして、深い失望の伴つた「オヤ〳〵」であつた。雄吉が、可なり努力して書いた本當の意味での處女作は元より、雄吉の友人の芳川や久能や杉野や河瀨などの、夫々に、力の籠つた處女作を滿載した雜誌「新思潮」も、S博士の關する限りでは、スツカリ「赤トンボ」に、攫はれてしまつた譯であつた。縱令、內容に就いての評言は兎も角、「受け取つた」と云ふ位の挨拶は、當然豫期して居た雄吉は、スツカリ悄氣てしまつた。が、その日は、S博士が、つい忘れて居るのかも知れないと思つた。が、その以後、何度顏を合はしても、博士はその雜誌に就いては一言も云はなかつた。

第二號も第三號も、やつぱり同じであつた。雄吉は、到頭學校を出る迄、三年の長い間、S博士から彼の創作に就いては、批評も、助言も、忠言も、その外凡て何物も聞く事が出來なかつた。

博士の文學的な傾向と、雄吉のそれとが、對蹠人同志のやうに、全く相反して立つて居る爲ではないかと、雄吉は思つて居た。「君は、創作をやつて居るのですね」と云ふ、單なる承認さへ得られなかつた。雄吉は、自分の第一義的な活動に就いて、博士から少しも顧みられなかつたことを、何よりも淋しく感じた。S博士を通じて、描いた空想などは雲散霧消した。

二

が、色々な幻滅や不快を懷きながらも、彼は兎に角無事に卒業する事が出來た。もう、Kの大學と緣が切れたかと思ふと、晴々したやうな、心持になつた。彼は、卒業すると、兎も角も、今迄學資の給與を仰いで居た近藤氏を賴つて、上京する豫定であつた。東京で、何等かの職業が、彼を待つて居る譯ではなかつたが、東京では何かのよい事が、彼を待つて居るやうで、何となく胸がときめいた。後は、野となれ山となれだと思つた。K大學の周圍から懷かされた不快や幻滅は、もう過去の事だと思つた。彼は快くK市を去る事が出來ると思つた。

夫は、七月三日の晩であつた。雄吉は、僅かの荷物を片付けた。苦學生に近い彼は、何も持つて居なかつた。彼は、三年の間着古した夜具を初め、大抵のものは長い間厄介になつた下宿の主

人にやる事にした。すると、下宿の主人――夫は下手な畫工であつた――が、ホク〳〵欣んで、」
雄吉が、感々その家を出ようとすると、
「富井さん、一向アカン物ぢやけど、此の扇持つて行つてお呉んなはれ」と、云つて五本の扇子を呉れた。雄吉が、夫を開いて見ると、何れもこれも、達磨の繪を描いてあつた。夫が、模様化されて居て滑稽な、グロテスクな、變な感じを起させる繪であつた。夫でも、雄吉は主人の好意を欣んだ。精神的には殆ど何等の餞別をも獲られなかつた、K市を去るに當つて、妙な剽輕な達磨の繪を描いた扇子を贈られることは、却つて皮肉でよかつた。雄吉は、荷物――と云つても、夫は古い、十年も使ひ古した手携鞄丈だつたが――を持つて、大學の附近の下宿を引き拂つて、電車の停留場迄、ボク〳〵歩いて居た。過去の生活を顧みると、不快の感じで充たされて居たが、夫でも可なり住み馴れたK市を去るに當つて、少しはセンチメンタルな氣持になつて居た。
大學の石壁に添うた道は、廣い暗い單調な長い通であつた。一町隔き位に、輝いで居る街燈は、行き交ふ人の顏を、微かに照す位であつた。雄吉が、丁度此道を半分位行き過ぎた時であつた。
何の薄暗から、ヌッと大きい人影が現はれて來たかと思ふと、
「やあ富井君ですか」と、云つた。夫は同じ級の岡本と云ふ男であつた。雄吉が、

「やあ」と、返事をするのも待ち遠しさうに、
「君はSさんが死んだのを知つて居るかい」と、稍々急き込んで訊いた。S博士の事を、皆はSさんと呼び慣れて居た。
「何！　Sさんが、死んだ。Sさんが」と、雄吉は可なり顚動して叫んだ。「卒業試問が濟むと、直ぐ東京の家へ行かれたのだが、何でも可なり急な病氣らしいのだよ。今朝死んだと云ふ電報が來たのだ。僕は今大學の書記から聽いたのだ。何だ！　是から上京するのか、夫ぢや丁度お葬式の間に合ふ譯だね」と、岡本は可なり興奮して話した。雄吉もS博士が病身であるとは、聞いて居たものゝ、是程急遽に死なうとは思つて居なかつた。S博士の死は、雄吉に取つても、可なりの驚駭であつた。雄吉は、自分の創作を少しも認められなかつた事に就いて、S博士に對して、心の底からは傾倒することは出來なかつたけれども、夫は餘りに個人的な事で博士の死に對しては、可なり深い感激を懷かずには居られなかつた。
殊に、自分が三年の大學生生活を了へて、K市を去らうと云ふ晩に、何等かの宿命のやうに、博士の訃報を聽いた事などが、彼の心を可なり感傷的にしたのである。岡本と別れて、電車に乘り、汽車に乘る間、雄吉の心はS博士の死に就いての興奮や感慨で一杯であつた。

S博士に對する感謝や感激の心丈が何時の間にか、胸の内に溢れて居た。卒業試問の時の博士の瀟洒な姿などが、意識の裡に幾度も現はれて來た。隨分失敗した卒業論文に、八十點と云ふ意外な高點を與れた事などが、有難く思ひ起されたりなどした。

雄吉は、東京へ着いたら、直ぐS博士の家にお悔みに行かうと思ひながら、興奮の爲に眠られない一夜を汽車の中で明した。

三

卒業をして上京をしたからと云つて、東京に何もいゝ事が、雄吉を待つては居なかつた。却つて、今迄學校に居た爲に、月毎定まつて、保護者たる近藤氏から、受けて居た學資――と云ふよりも夫は生活費だつた――が、受けられなくなつた丈である。一文も財産を持たない彼は直ぐにも、職業を見付けなければならなかつた。不快な三年の生活をすり脱けて來た僅かな欣びなどは、將來の生活に對する不安の爲に、全く塗り消されてしまつて居た。

上京すると、雄吉は矢張り近藤家へ頼つて行つた。學資を出して貰つた上に、まだ就職の心配もして貰ふことは、如何にも心苦しい事だつたが、さうするより外に、何うともする事が、出來

なかつた。

上京した翌日、雄吉は早速S博士の宅へ悔みに行つた。彼は白い木綿の絣を着て居た。先生の家へお悔みに行くのであるから、せめて紋附の羽織でも、着て行きたかつたのだが、彼には夫を何うする才覺も、出來なかつた。袴も長い間、穿き古したセルの袴で、所々に汚點や穴などが出來て居た。雄吉は、かうした身裝で幾何か嚴肅に改まつて居る家へ、悔みに行くのが、如何にも不調和で、恥しいとさへ思つた。輝かしい夏の太陽に明らさまに照されたから、悔みに行くのが如何にも無オークワード樣のやうに思はれてならなかつたが、何うとも仕樣がなかつた。その時に、彼はK市の下宿の主人から、貰つた達磨の繪を描いた扇子を持つて行つた。その頃の雄吉には、此の扇子が彼の唯一の裝身具であつた。

S博士の家へ着いた。悲しみに鎖されて居る家の中に、踏み入る前に、強ひてその家の調子に迄自分の心持を合せるに就いて、多少の不快を感じた。殊に彼は、自分の身裝を考へると、ギゴチない不快を感じて居た。

取次に出て來たのは、紋附の羽織を着た立派な紳士であつた。彼は、その人の服裝を見ると、全くタヂ〳〵となつてしまつた。雄吉の僻みではあつたかも知れないが、その人も彼の服裝に對

して、直ぐ様、當然な輕蔑を持つたやうに思はれた。

「Kの大學を出た富井と云ふものです」と、冒頭して「此度は、先生には俄にお亡くなられたさうで、何とも申しやうもございません」と、云つた。さうして妙な、因習的な挨拶を述べると、尙更不愉快になつて、直ぐにも逃げ出したくなつた。夫でも先方は雄吉が、K大學の卒業生だと聽くと、急に打ち解けたやうに、

「何うか、お上り下さい。さあ、何うか」と、云つて呉れた。雄吉は仕方なしに、奥へ通つた。

玄關の次は、直ぐ八疊の座敷になつて居た。彼が、その座敷へ、入ると十四、五人ばかりの人が、亂雜に入り亂れて坐つて居るのが、眼に附いた。その人達の顏よりも、彼等の服裝の方が、雄吉の眼の中に、最初に入つて來た。立派なフロックを着た人が二、三人居た。背廣を着た人も居た。その他の人は、皆紋附の羽織を着て、皆整然と行儀よく坐つて居る。洗ひ晒しの白木綿の着物を着て居るのは、確に雄吉一人だつた。彼は、勸められるまゝにS博士の、棺前に進んだ。が、自分の存在の不調和——他の人達が、かうした席に適當した身裝をして居るのに、自分一人が、調子外れの服裝をして居る不調和の意識の爲に、S博士に對する哀悼の心なんか、何時の間にか、何處へか消失してしまつて居た。燒香を濟まして、片隅のなるべく壁際に、身を退け

ると、漸く心が落着いた。誰か知つて居る人が來て居はしないかと、周圍を見廻したが、誰も知つた顏はなかつた。夫も、無理ではない。まだK市から、誰も出京しては居なかつたし、S博士の家では、雄吉が知つて居たのは、S博士丈なのだから、當人の博士が死んでしまつた以上、丸切り知らない者ばかりの家へ來て居る譯であつた。彼は、ボンヤリと其處で三十分間ばかりも、坐つて居た。博士に對する哀悼の心と、自分の服裝に對する不快な意識とが、交替に彼の心を占領した。誰も、彼の方を時々ジロ〳〵と見ながら、言葉を掛けるものはなかつた。彼は長く坐つて居れば居る程、ヂリ〳〵して來た。彼は到頭堪らなくなつて、先刻取次をして呉れた人の所へ行つた。

「就れ、晩にはお通夜に伺ふ積りですから、只今は是で失禮します」と、挨拶すると、逃げるやうに玄關へ出た。其處に、稍々亂雜に脫ぎすてられてある履物の中でも、彼の下駄丈は、直ぐ判つた。彼は、キッドの靴や桐の駒下駄の中に、自分の磨り減らされた下駄が、不調和に存在するのを見ると、又不快になつた。夫でもS博士の家の門を一歩踏み出すと、彼は甦つたやうに息をした。やつと助かつたと思つた。彼は、晩にお通夜に行く心持などは、もう少しもなかつた。先刻、つい口が滑つたのを後悔した。

が、彼が十間ばかり歩いた時、ふと自分の右の手が、扇子を持つて居ないのに、氣が付いた。彼は駭いて袂や懷中を探つて見たが、夫は何處にも見付からなかつた。彼は、博士の家で、手持無沙汰の爲に、二三度扇子を、いぢつて居たのを思ひ出した。餘り逃げ出すのを急いだ爲に、つい扇子を忘れてしまつた事に氣が附いた。が、彼は、取りに歸るなどと云ふ氣は、少しもしなかつた。又、扇子は惜しいとも思はなかつた。が、然しあゝしたしめやかな席に、滑稽な無樣な達磨繪を描いた扇子が落ちて居ることを思ふと、彼は又妙なくすぐつたいやうな、不快な、不調和な氣持に囚はれた。自分自身が、彼處に居たことが、不調和で、ギゴチなかつたやうに、あゝした達磨の繪が、ああした悲しみの席に存在することも、妙に不調和に思はれて仕方がなかつた。雄吉は、自分自身が作つた不調和な感じを、自分が殘した達磨の繪に依つて、相續させて來たことを思ふと、夫が不快であると同時に、一種滑稽であるやうにも感ぜられた。が、おしなべて凡てが、イヤであつた。お通夜の席などで、誰かゞあの扇子を取上げる、そして輕い好奇心から、開けて見る。すると、グロテスクな、滑稽な、あゝした席には、全く不調和な達磨が遠慮もなく顏を突き出す。丁度自分が、洗ひ晒しの木綿を着て、悔みの席へ闖入(ちんにゅう)して行つたやうに。さう考へ出すと、雄吉は扇子を殘した事が、愈々不快になつて來た。S博士に對する哀悼の心持が全く

傷つけられて、彼はたゞイラ〳〵するばかりであつた。

四

彼が、S博士の家へ悔みに行つてから二日目が、博士の葬送の日に當つて居た。彼は、その日の朝、近藤家の主人の紹介狀を持つて、ある雜誌社の社長を、訪問することになつて居た。

その前の晩、彼は近藤の主人から、紹介狀を書いて貰つた。紹介狀を持つて、全く見知らない人を訪ふと云ふ事は、彼に取つて初めての經驗であつた。彼は、緊張した不安な期待を、懷かずには居られなかつた。紹介狀は、唐紙の書簡箋に書かれて居て、立派な奉書の狀袋に入つて居た。夫は、雄吉に取つて護符のやうに、不思議な魅力があるやうに思はれた。彼は、最初夫を主人から手渡された時、夫を自分に當てられた部屋の片隅に置かれて居る細長い長持の上に置いた。彼はその長持の上を、いつも棚の代りに使つて居たのだ。暫くしてから、彼は湯に入つた。そして、久し振にゆつたりとした心持になつて部屋に歸つた來た。孰(どち)らかと云へば、放心な彼は湯で使つた手拭を、やつぱりその細長い長持の上に置いた。置くと云ふよりも、その上へやりつ放しに、投げ出したと云つた方がよかつた。

夫は、彼が床を敷かうと思つて、立上つた時であつた。彼は、ふと明日持つて行く紹介狀の事が、氣がかりになつて、長持の上を見た。見ると、思ひ懸けなくも、彼の投げ置いた手拭の一端が、紹介狀の上に覆ひ被さつて居た。彼は、アッと驚いて紹介狀を取上げて見た。湯から上つても、ぞんざいな彼は、手拭を十分搾つてなかつた爲、手拭に含まれて居た水分は、紹介狀の下方の半分をシト〳〵に濡らしてしまつて居るのであつた。

夫を見ると、彼は全く悄氣てしまつた。就職運動をなす者に取つて、先方に與へる初對面の印象が何んなに大切であるかは、雄吉もよく知つて居た。彼は、初對面の印象を作る場合に、自分の容貌や服裝が、何れ程不利に働くかをよく知つて居た。その彼に取つて、唯一の頼みであり唯一の武器である紹介狀が、こんなに汚くなつては、相手に對して何う考へてもいゝ印象を與へ得るとは思はれなかつた。

彼は、濡れたその紹介狀を、電燈の溫味で、氣長に溫めて見た。が、そろ〳〵乾いて行くに從つて、その乾いた後が、皺になつて行くのに氣が附いた。彼は、自分の粗忽が泣き出すほど、恨めしく思はれた。S博士の家へ、悔みに行けば、ぼんやりして、扇子を忘れて可なり不愉快な、後感を得て居るのに、また紹介狀に對するだらしのない不注意から、取り返しの付かない失策

を（それは冷靜に考へれば、笑ふべき事であつたかも知れないが）やつたかと思ふと、彼は自分で自分が堪らない程不愉快になつた。夫でも、一晩乾して置いたならば、翌日迄には、案外跡形もないやうに乾き切つてしまつて居るかも分らないと思つて、その晩は漸く床に就いた。

その翌日は、午前雜誌社の社長を訪ひ、午後からはS博士の葬式へ行かねばならなかつた。兩方とも、妙な重くるしい物が、付き纏つて居る仕事であつた。

朝起きると、彼は怖る〳〵昨夕の紹介狀を、手に取り上げて見た。最初は、案外よく乾いて居て、是なら何でもないなあと思つた。が、よく見ると狀袋の中央の處に、横樣に紛れもない雲形の汚點が、あり〳〵と浮き出て居るのを見た。急いで、中の書狀を出して見た。すると、書狀の下半部は何の字も何の字も、幾何か滲んで居て、而も封筒に見える通りの雲形の汚點が延々として、片一方の端から、他の一方の端迄續いて居た。夫は、ホンの薄い茶褐色の汚點ではあつたが、健全な肉眼を持つて居る人には、直ちに眼に付くのは確かであつた。夫は聲を出して泣くのには、餘りに馬鹿らしい事であつた。が、結果的には、可なり重大な事であつた。その場合、一番正當な事は、近藤の主人に事情を打ち開けて、もう一枚紹介狀を書いて貰ふ事であつた。が、その時迄に隨分世話になつて、恩義の深い主人の書いて呉れた紹介狀を、さうした不注意から汚

したとは、何うしても打ち明けられなかつた。凡てがヘマであつた。凡てが、無様であつた。自分の習慣的になつただらしのない放心から、かうした愚にもつかない、然し可なり重大な結果を持つた失策をやつたことが、不快で堪らなかつた。

先方の人が紹介狀を開いた時、何んなに思ふだらうと、雄吉は考へて見た。その茶色の汚點に依つて、貰かれた紹介狀を見て、先方はきつとある侮辱を感ずるに違ひない。さうして、その紹介狀の汚れて居る責任を、誰に歸するだらう。無論、その責任を負ふべきものは、雄吉と、近藤の主人の孰ちらかで無ければならなかつた。先方が、その責任を孰ちらに歸したにしろ、その結果は、雄吉の就職運動に、惡く響いて來る外はなかつた。さう思ふと、雄吉は全く情なくなつた。

夫でも、雄吉は約束の十時に間に合ふやうに、九時頃に近藤氏の家を出た。彼は、汚點のある紹介狀を大切に、風呂敷に包んだ。夫は、もう此上汚しては百年目だと思つたからであつた。が、夫程怖々と行動をし始めた自分を考へると、彼は全く情なく思はれた。

彼は、矢張り羽織を着て居なかつた。が、相手の雜誌社の社長が、二宮宗の信奉者であることを、聞いて居たので、大學を出ても、質素にして居る所を買つて呉れやしないかと云ふ賤しい迎合的な意識があつたので、S博士の家へ悔みに行つた時程、服裝に就いては悲觀しなかつた。

その社長の家は、麻布の高臺に在つた。初めて發行した實業の雜誌が、うまく當つた爲に、十年になるかならぬ中に、日本で有數な雜誌業者になつて居る人であつた。

雄吉は、廣大なる花崗石の門を、怖る〳〵潜つた。何だか、氣づまりであつた。見ると、左の方には宏壯な西洋館があり、右の方にも、夫丈引き離して見れば隨分立派だらうと思はれる日本館があつた。雄吉は、最初立派な西洋館の玄關へ行かうか、夫とも日本館の稍々質素な方へ行かうかと迷つた。主人へ面會するのだから、西洋館の方へ案内を乞ふのが當然だと思つたが、臆病な彼の心は、何時の間にか彼の足を日本館の方へ振向けて居た。彼は、其處に取付けてある呼鈴を見ると、怖い物に觸れるやうにオヅ〳〵夫を押した。奥の方で、夫がほのかに鳴つて居るのが聞えた。

やがて、人の足音がしたかと思ふと、六十に近い老人が、彼の前に立ちはだかつて居る。無論、此老人は、最初から立ちはだかる意志はなかつたらしいのだが、雄吉の姿を一目見ると、屈めようとした腰を、急に延ばしてしまつて、そこに平然と（傲然とではなかつたが）立ちはだかつてしまつたのである。

「何方！」と、その老人は、冷靜な少しも好意のない聲で云つた。雄吉は自分の名刺と、汚點

のある紹介狀とを出しながら、

「かう云ふものですが、御主人にお目にかゝりたいのです」と、云つた。老人は、前と同じやうな、冷淡な調子で雄吉の手から、名刺と紹介狀とを受取ると、名刺には一瞥も與へずに、紹介狀の裏を返して、ヂロ〳〵と見て居たが、

「うーん近藤三造、あゝ」と、肯くと、直ぐ雄吉の方へ向いて、

「折角のお出でゝすが、御主人はもう先客が、二三人お在りなさつて、今朝はとてもお逢ひになる暇がありますまい。又明日でも、出直しておいで下さい。お出になる前に電話をかけて下さると好都合ですが」と、云ひながら、その老人は、早くも玄關から、奥へ入りさうにした。雄吉の今迄の經驗では、他人の家を訪問した場合、その主人が在宅であるに拘らず、面會を斷られたことは、一度もなかつた。然るに、彼は生れて初めて、さうした屈辱的な待遇を受けたのである。學校を出て、初めて實世間に接觸する積りで、その一角に手を觸れる、と云ふよりも一指を觸れようとすると、氷のやうな冷酷さを以て刎ね付けられたやうに思つた。彼は、新聞や雜誌などで讀む、名士の門前拂と云ふ字を思ひ出した。あれだなと思ふ、さうした事に就いて初心である彼は、心の底から押し出して來るやうな憤りを感じた。

「お待ちする譯には行かないのですか」彼は一生懸命の努力で云つた。

「お待ちになつても、今朝はとても駄目でせう。毎朝十時半迄に、社の方へお出になるので、とても貴方にお逢ひになる時間はありますまい。」

「夫なら、此の紹介狀丈でもお目にかけて下さい」と、雄吉は、やゝ哀願するやうに云つた。彼は、汚點の附いた紹介狀を持つて居るのが、不愉快で堪らなかつたので、その結果は兎も角、早く先方に見せてしまひたかつたのだ。

が、雄吉のやうな訪問者を幾度も取扱つて、物馴れて居るらしいその老人は、

「いや、それは貴方が自身でお渡しになるのが本當でせう。明日でも早くいらつしやれば——」

と、その老人は最後に、僅かに雄吉に對して、さうした指導的な言葉を發すると、その儘奥の方へ、入つてしまつた。

雄吉は、仕方なしにその家を出た。不當に侮辱された憤りで、胸が一杯になつて居た。主人にも取次がないので、不當に追ひ返された事が、彼は何う考へても、殘念であつた。

實際冷靜に考へて見れば、あの老人の玄關番は、紹介狀を持つた就職青年を幾人取次いだかも、分らないのだ。そして、主人が忙しいか或は不機嫌な時に、不用意に取次ぐことに依つて、幾度

も主人の叱責を受けたのに違ひなかつた。其爲に、主人の都合の惡さうな時には、獨斷で客を返すことに馴れて居るのだ。と雄吉は考へ直して見た。が、あの老人の方で、玄關拂を喰はせる事にどんなに馴れて居やうとも、追ひ返された雄吉は、夫が生れて初めて、世間から受けた最も冷い、辛辣な挨拶であつた。

雄吉は、傷だらけな心を懷いて電車に乘つた。彼は、最初の計畫では、此の訪問を濟ました後、久し振に日比谷公園でも、散歩して、午後一時から、青山齋場で行はれる、S博士の葬式に出ようと思つて居た。

が、雜誌社の社長の家を、ケンもホロ、に追ひ出されて表へ出ると、心の中が色々な不快な感情で一杯になつてしまつて、葬式に出られるやうな純眞な心持は、僅かな斷片でさへ殘つて居なかつた。凡てが、不快であつた。自分が世の中に存在して居る事自身が、甚しく不調和で、醜態であるやうに思はれた。

彼は、電車にも乘らないで、ぼんやりと考へながら日比谷の方へ歩いて居た。同じ東京に居りながら、お通夜も、しない上に、葬式へ出ないと云ふ事が、如何にも不德な許すべからざる義理知らずであるやうに、心が苛まれないでもなかつた。世間的には、恩を受けた先生である。その

上、彼のやうな怠け者が、相當な成績で學校を出られたのも、寛大な自由なS博士の恩惠でないことともなかつた。

が、何う考へ直しても、さうした不快な心持を抑へ付けて迄、葬式に行く氣はしなかつた。無論、悔みに行つた時のやうに服裝に對する退け目な心持も、幾何か彼の心を鈍らせたのではあるが、ゴタ〳〵して居る葬式の場所では、彼の羽織も着て居ない姿も、餘り人の目には附くまいと云ふ氣安めがあつた。

が、服裝の問題などよりも、もつと根本的なものが、其處にあつた。彼は、何う考へても葬式に行く氣がしなかつた。門前拂ひを喰つた不愉快さの腹癒せを、先生の葬式に行かない事に依つて、すると云ふことは、如何にも不人情なひどい事であるかも知れなかつたが。

雄吉は日比谷公園へ行つて、其處のベンチに腰をかけて、暫頃迄茫然と考へて居た。S博士の事を考へても、紹介狀の事を考へても、遠巒の繪のことを思ひ出しても、凡てがイヤであつた。

ともかくも、敎を受けた先生の葬式があると云ふのに、色々な不愉快な事が、重り合うて、何うしても行く氣になれないことが、情なく思はれ出した。Kから上京した同窓の連中などは、葬式の席で、當然列席して居なければならぬ自分を、物色するに違ひない。その中の誰かと近い中

に逢ひでもしたら、彼は何う云つて辯解したらよいかと思つた。

其中に、豐近くなると、雨がポツ〳〵降り出して來た。雨が降り出して來ると、彼は幾何か落着いた。雨降りであつたと云ふ事が、葬式に出席しない理由の、ホンの僅かな部分をでも、爲すと云ふ事が幾何か雄吉の心を慰めた。彼は、到頭行かない決心をして、近藤氏の家へ歸つて來た。

が、先生の葬式に出ないと云ふ事は、又更に新しい不愉快さを產んで居た。何う行動しても、」右へ動いても左へ動いても、調子よく愉快に動くことが出來なかつた。

彼は重くるしい、夫かと云つて絕えず動搖する心を懷いて、近藤氏の家へ歸つて來た。自分の部屋へ入つて見ると、机の上に一封の手紙が來て居るのをみた。裏を返して見ると、夫はKの大學の同窓生三人の連名であつた。早速開けて見ると、

「拜啓今回S先生突然御逝去なされ候に就いては、我等新卒業生擧つて出京致すべき筈なれども、何分遠隔の地にて其意を得ず候に付き、幸ひ滯京中なる貴下を、本年度卒業生總代に推薦致し候間何卒小生等一同を代表され、通夜、葬儀の節など宜しく御行動被下度候。

尙、香奠として新卒業生一同より、金百圓贈呈致したく候に付き、割前として金五圓至急お送り下され度願上候。」と、あつた。

彼は、その手紙を見ると、今迄の不愉快さが、見る〳〵胸一杯に擴大されて坐つても立つても居られないやうな、心持になつた。級の奴等が、俺の首つ玉を摑まへて、先生の葬式へ連れ出さうとするのだと思ふと、彼は自分の心が張りさけるほどいら〳〵した反抗的な不快を感じた。「宜しく御行動」などは、彼にはとても出來なかつた。彼は、その手紙を投げ付けて、其處へ平伏つてしまつた。

が、葬式に行かぬことは、何うにかごまかせるとして、五圓の香奠は何うしても、出さなければならなかつた。五圓などと云ふ重い負擔は彼に堪へ切れるものでなかつた。人の金でやつと、學校を卒業したばかりで一文も自分の金を持たぬ彼に、五圓の金などは、何う才覺しても出來さうになかつた。が、何うしても出さなければならぬとすると、彼は、近藤氏に事情を話して、賴んで見るより外はなかつた。先生が死んで、その香奠に出す金を、自分で何うともすることが出來ないのを考へると、彼は全く情なかつた。彼は、その晩香奠の事で、一晩心苦しい夜を明した。到頭彼は、是程迄情ない思をして、香奠を出さなければならないものかしらと思つた。彼は、人に借りて迄、香奠を出す必要はないと、思ひ返した。彼は、半分自棄氣味になつて、到頭香奠を出さないことに決めてしまつた。

彼は、自分の境遇が悪い爲に、S博士の死を純眞に悲しめないで、却つて事毎に不快を買ふのが、恨めしかつた。凡てが、云ひやうもなく不快であつた。情なかつた。

彼は、到頭葬式にも行かなかつた。香奠も出さなかつた。自分ながらひどい奴だと思つた。が、こうするより外、仕方がなかつたのだとも思つた。が、その後長い間、自分の不義理な行動から、絶えず苛責を受けて居ねばならなかつた。

たゞ、さうした苛責が烈しくなる時、彼は只一つの云ひ譯があつた。夫は、S博士が、彼の創作を、少しも認めて呉れなかつた事であつた。少くとも、創作に志す雄吉に取つて、彼の創作に就いて、何も與へて呉れなかつたのは、否夫に對して一言も挨拶を與へて呉れなかつたのは、その世間的な關係は、師弟であらうが何であらうが、根本的な處では、第一義的な處では、S博士は雄吉に取つて對蹠人ではなくても、少くとも路傍の人であつたのだ。さう考へると、葬式に行かなかつたことも、香奠を出さなかつたことも、いくらか云ひ譯が付くやうに思はれた。無論、夫は雄吉の負け惜しみから出た甚だイゴイスチックな云ひ譯ではあつたけれど。

――大正八年一月――

出世

讓吉は、上野の山下で電車を捨てた。

二月の終で、不忍の池の面を、撫でゝ來る風は、まだ冷めたかつたが、薄曇い早春の日の光を浴びて居る、楓や櫻の大樹の梢はもうほんのりと赤みがゝつて居るやうに思はれた。

隨分圖書館へも來なかつたなと、讓吉は思つた。圖書館で、ゆつくりと半日を暮し得るほどの暇もなかつた過去一二年の生活が、今更のやうに振りかへられた。それと同時に、さうした繁劇な生活から、やつと逃れる事が出來て、暢氣に圖書館へでも來られるやうになつた現在の境遇を、喜ばずには居られなかつた。

もう一二年も來なかつたかも知れない。いや職業を得てからは、一度も來なかつたかも知れないなと、彼は思つた。兎の耳のやうに、ひつそいだやうに突立つて居る白い建物、安定を保つて居るやうで、その癖今にも落ちかゝりさうに思はれるあの白煉瓦の建物にも、長い間足踏みもし

ないなと思つた。

圖書館の事を考へ出すと、彼はその中で過したいろ〳〵な時代の自分の姿が、ひつきりなしに頭の中に浮んで來た。彼が、初めて東京へ出て來てから、六七年間の、暗いみじめな學生々活の、何の時代の事を考へても、あの圖書館の中で暮した半日なり一日なりの有樣が、ハツキリと頭の裡に、浮んで來ないことはない。

彼が田舍の中學を出て、初めて東京へ來た時、最初に入つた公共の建物は、やつぱりあの圖書館であつた。本好きの彼に取つては、場所にも人にも、何の馴染もない東京の中では、圖書館が一番勝手が判るやうであつた。

田舍の中學生に有勝な、東京崇拜に原因して居るいろ〳〵な幻影が、東京に於ける實際の建物、文物、風景、人物に接して、悉く崩れて行つてしまつた中でも、圖書館に對する滿足だけは、何時迄も殘つて居た。田舍の設備の不十分な藏書の少い圖書館丈しか知らなかつた讓吉の眼には、あの圖書館がどんなに宏大に完成されて見えたらう。その頃の彼には、東京に於けるいろ〳〵な設備の中では、圖書館の有難さ丈が一番身に染みて感ぜられた。

その時以來、どんなにあの圖書館の世話になつたことだらう。最初入學した專門學校を退學さ

れて、行き處もなくブラ〳〵と半年ばかりの月日を、殺さなければならなかつた時には、どんなにあの建物の有難さが判つたことらう。

高等學校へ入つてからも、幾度通つたかも分らない。また、そればかりではない、つい二年前、大學を出てから、職業にありつく迄の半年間を、彼はやつぱり圖書館で暮して居たのだ。その時代の圖書館通ひは、彼に取つては一番みじめな事であつた。

大學を出ても、まだ他人の家の厄介になつて居て、何等の職業も、見つからないのに、彼の故郷からは、もう夙くから、金を送るように云つて來て居た。大學を出さへすれば、直ぐにも金が取れるやうに彼の父や母は思つて居た。またさう思はずには、居られなかつたのだらう。「讓吉が學校を出るまで」と云ふ言葉を、彼等は窮乏から來る苦しみを逃れる、唯一つのまじなひのやうに思つて居たのだから。讓吉は、自分が就職難に苦しんで居る最中に、早くも金を送れと云つて來る母の無理解さに、いら〳〵しながら、自分が學問をしたそのために、家に負はした經濟的な致命傷のことを思ふと、さうした性急な催促も、尤もと思はずには居られなかつた。

それで仕方なしに、彼は何うにかして、金を儲けることを考へた。さうして、こんな場合に、多少文筆の素養があるものが、考へつくやうに、飜譯をやつて見ようと思つた。彼は、友人の紹

介で、ある書店から出版されて居る「西洋美術叢書」の一卷を飜譯させて貰ふことにした。それは、ガアデナアと云ふ人の書いた「希臘彫刻手記」と云ふ本であつた。金色の唐草模様か何かの表紙の付いた六七百頁の本であつた。又その活字が、邦字の六號活字に匹敵するほどの小さい羅馬字で、その上ベッタリと一面に組んであるのであつた。一頁を譯すのにも、一時間近くもかかつた。その六七百頁を、悉く譯し了つて、所定の稿料を貰へる日は、茫漠として何日の事だか判らなかつた。それでも彼は、勇敢にその仕事を續けて行つた。その仕事をする外には、金を取れる當は、少しもなかつたから。彼は、毎日のやうに、厄介になつてる家からは比較的に近い、日比谷の圖書館へ行つて、飜譯を續けてやつた。

その飜譯が、やつと六七十枚位、出來上つた頃だらう。ある日の事、彼は例の「希臘彫刻手記」と原稿紙と辨當とを、一緒に包んだ風呂敷を携げて、日比谷の圖書館へ行つたが、圖書館へ行つて、仕事に取りかゝる前の一休みにと、その日の新聞を讀んで居たときに、ふと自分が携げて來た筈の風呂敷包が、無いのに氣が付いた。彼は、駭いて身のまはりを探し廻つた。が、彼の座席にも、新聞閲覧室の何處にも見當らなかつた。よく氣を落着けて、考へて見ると、電車から降りるときに、もうあの包みを持つて居なかつたのに氣が付いた。電車に乘る時に買つた新聞を讀む

時に、風呂敷包みが邪魔になつたので、自分の背と車蓋の羽目板の間に置いたことに氣が付いた。内幸町で周章てて降りた時に、スッカリ忘れてしまつたのだと思つた。

彼は、その場合にそれほど大切な品物を、ぼんやり忘れてしまふ自分の腑甲斐なさが、しみじみとなさけなかつた。こんなに、ぼんやりとして居て大切な品物を、容易に忘れてしまふやうでは、俺は劇しい世の中に立つては、とても存在して行かれない人間ではあるまいかとさへ思はれた。

彼は茫然とした淋しい情ない心持で、先づ三田の車庫へ行つて見た。が、其處に居た監督は、「巣鴨行の電車なれば、春日町の車庫か、巣鴨の車庫かへ、車掌が屆けて居るでせう。そんな風呂敷包なら誰も持つて行かないでせう」と云つた。

彼は、監督の言葉で、やつと安心して、直ぐ引返して春日町へ行つた。三田から春日町迄の、あの長い丁場を、彼はどんなにいら〳〵した心持で乘つた事だらう。が、春日町へ着いて見ると「希臘彫刻手記」は、其處へも來て居なかつた。

「あゝきつと、本郷廻りの電車でせう。それだと、巣鴨の車庫へ屆けたのでせう。」と、其處の監督が、彼の希望を繋いで見れた。が、巣鴨まで行つて見ると、其處にもやつぱり「希臘彫刻手

記」は來て居なかつた。

「見付けた車掌が持つて來たんでせうが、出發を急いだので、玆へは屆けずにまた持つて行つたんでせう。それだと、もう一度三田の車庫へ行つて見たら何うです」と、其處の監督が、また彼の消えかゝつた希望を繋いで呉れた。彼は、又巣鴨から三田までの長い線路を——東京の殆ど端から端を、頼りない不快で乘つた。が、三田の車庫にもやつぱり彼の風呂敷は見出されなかつた。

「電氣局へ明日あたり行つて御覽なさい。電車内へ遺失したものは、一度は必ず彼處へ集りますから」と、前のと違つた車掌が、又彼に一縷の望みを傳へて呉れた。

誰かに持つて行かれたのだなと云ふ疑が、だん〳〵明かな形を取り出した。さう思ふと、自分の横に坐つて居た印半纏の男が、殊つて行つたのかも知れないと思つた。が、あの男が家へ歸つて「希臘彫刻手記」と原稿紙と辨當とを見出して、一體それを何にするであらうかと思つた。俺に、こんなに迷惑をかけながら、向ふでは少しも利益をしない、罪惡の中でもかうした罪惡が、結果的には一番性質の悪いやつかも知れないと、讓吉は思つた。

本屋から貸して呉れた原本を無くしたこと、それは少しの義理を缺けば、濟むことだが、自分

の金儲けの希望を、それほど些細に手輕に、ふいにしてしまつたことが、彼には堪らなく不快であつた。が、まだ丸切り失望するには當らない。明日電氣局へ行けば、都合よく屆け出されてあるかも知れないと思つた。

が、翌日電氣局へ行つて見たが、やつぱり無かつた、念のために、警視廳の拾得係へ行つて見たが、やつぱり無かつた。もう盗られたのに違ひなかつた。困つて居る俺に取つては、あんなに大切のものを、ホンの出來心で盗る奴があると思ふと、讓吉は何となく腹立たしかつた。

が、丸善にでもあれば、さう失望するにも當らない。五圓か六圓の金を、何うにか都合して、買へばいゝのだと思つた。彼は、さう思ひ付くと、その足で丸善へ行つて見た。が、やつぱり徒勞であつた。

「その本なら、去年あたり二三部來ましたが、とつくに賣切れてしまひました。御註文なら、取寄せます」と、云つた。が、その頃は戰爭の影響で、英國から本を取寄せるには、少くとも三四ケ月長ければ半年もの、時間がかゝつた。さうした餘裕が、この場合にある譯はなかつた。

彼は丸善を出てから、また新しい希望を見出した。

「あゝ若しかしたら、古本屋にあるかも知れない」

彼は、直ぐ神田へ行つた。そして、多くの古本屋を殆ど軒並に探して見た。が、あの金色の唐草模様は何處にも見出されなかつた。本郷も同じ事だつた。彼が、足と眼とをさん〳〵に疲らせて、その日の捜索をあきらめて、三田行の電車に乘つた時、また彼の頭には、新しい希望が湧いた。

「あゝ圖書館にあるかも知れない」

こんなに考へ付き易い事を、今迄考へ付かなかつた自分の迂遠さが、少し馬鹿らしくなつた。彼は電車が内幸町へ來ると、急いで飛び降りて、日比谷の圖書館へ行つて見た。が、其處のカタログには、幾度繰り直しても、見出されなかつた。

「あゝ上野、彼處が唯一のしかも最後の希望だ」彼はもう日が暮れかゝつて居たにも拘らず、後へ引つ返した。あの鐵の三層の階段を、どんなに急いで駈け昇つたか。そして、どんなにときめく心と險しい眼附とを以て Fine Arts.—Sculpture の項を、探つたことだらう。そこで、遂よく本當に運よく Gardener—The Manuscript of Greek Sculpture と云ふ字を見出した時に、躍吉の心はどんなに嬉しかつたゞらう。

「あゝやつと、彼はれたた」と、思つた。

彼は、その翌日から毎日のやうに、上野の圖書館へ通つた。が、その仕事がどんなに退屈で、不便であつたゞらう。自分が本を持つて居た時には、朝起きた時のしばらくとか、床に就く前の二三時間などに執る筆が、どんなに仕事を進捗せしめた事だらうが、仕事の場所が制限され、從つて時間が制限されることに依つて仕事は少しも捗らなかつた。と、同時に仕事そのものが、愈々苦しくなつて行つた。

が、彼は根よく二三ヶ月間、毎日、その仕事をつゞけて行つた。彼が、唯一つの金儲けの方法として、その仕事を續けて行つた。その後、その書肆が、破産した爲に、本當は一文にもならなかつた仕事を、一生懸命に續けて行つたのだつた。

彼は、大佛の前を動物園の方へと、道を取りながら、そんな事を取りとめもなく考へて居た。その頃のみじめな自分の事を考へると、現在の自分の境遇が、別人のやうに幸福に思はれた。月月貰つて居た五圓の小遣から、毎日の電車賃と、閲覧券の費用とを引いた殘りで、時々喰つて居た圖書館の中の賣店の六錢のカツレツや三錢のさつま汁の事まで、頭の中に浮んだ。あの慎ましかつた自分の心持を思ふと、その頃の自分が、いとしく思はずには居られなかつた。

畫でも蝙蝠が出さうな暗い食堂や、取りつく島もないやうに冷淡に、眞面目に見える閲覧室の

構造や、司書係達のゼピヤ色の事務服などが頭に浮んだ。その人達の顔も、大抵は宙で想ひ浮べることがあつた。

「あゝさう〳〵あの下足番も居るなあ」と思つた。あの下足の爺、あいつの事は、時々思ひ出して居つたと思つた。それは、讓吉が高等學校に居た頃から、あの暗い地下室に頑張つて居る爺だつた。

上野の圖書館へ行つたものが、誰も知つて居るやうに、正面の入口に面して、右へ階段を下りると、其處に乾燥床(ドライエリヤ)があつて、其處から地下室の下足に、入るやうになつて居る。その入口には晝でもガスが灯(たも)つて居る。その瓦斯の灯の下を潜るやうにして入ると、そこに薄暗いしかし宏濶な下足があつた。讓吉はそこに働いて居る二人の下足番を知つて居た。殊に讓吉の頭にハッキリと殘つて居るのは大男の方であつた。六尺に近い大男で、眉毛の太い一癖あるやうな面構へであつたが、もう六十に手が屆いて居たらう。もう一人の方は、頭のテカ〳〵禿げた小男であつた。

二人は恐ろしく無口であつた。下足を預ける閲覽者に對しても、殆ど口を利かなかつた。職務の上でも殆ど口を利かなかつた。劇場や、寄席、公會場の下足番などが客の脱ぎ放した下駄を、

取り上げて預かるやうになつて居るのと違つて、茲では閲覽者自身に下駄を取り上げさせた。又さうしなければならぬやうな設備になつて居た。若し初めての入館者などが下駄を脱いだまゝぼんやり立つて居る場合などに、此の大男の爺は、顎でその脱いだ下駄を指し示した。二人は如何なる場合にも、大抵は口を利かなかつた。二人の間でも、殆ど言葉を交はさなかつた。深い海の底に居る魚が、だん〳〵その視力を無くすやうに、かうした暗い地下室に、他人の下駄をいぢると云ふ賤役に長い間從つて居るために、何時の間にか嫌人的(ミサンスロピック)になり、口を利くのが厭になつて居るやうであつた。

二人はまた極端に、利己的(イゴイスチック)であるやうに、讓吉には思はれた。二人は、入場者を一人隔(お)きに引き受けて居るやうであつた。從つて、大男の順番に當つて居る時に、入場者が小男の方に下駄を差し出すと、彼はそしらぬ顔をして、大男の方を顎で指し示した。小男の順番に當つて居る時、大男の方へ下駄を差し出した場合も、やつぱりさうであつた。彼等は、下足の仕事を正確に二等分して、各自の配分の外は、少しでも他人の仕事をすることを拒んだ。入場の場合は、それでもあまり大した不都合も起らなかつたが、退場者の場合に、大男の受持の札の者が、五六人もドヤドヤと續けて出て、大男が目の廻るやうに、立廻つて居る時などでも、小男は濟まし返つて居て、

小さい火鉢にしがみつくやうにして、悠然と腰を下して居た。が、大男の方も、小男の手傳ひせぬことを、當然として恨みがましい顏もしなかつた。

讓吉は、その頃よく彼等の生活を考へて見た。同じ下足番であつても、劇場の下足番や寄席の下足番とは違つて、華やかな處が少しもなかつた。その上に彼等の社會上の位地を具體化したやうに、何時も暗い地下室で仕事をして居る。下足番と云ふ職業が持つて居る本來の屈辱の上に、また暗い地下室で、一日中蠢めいて居る。勤務時間が、何う云う風であつたかは知らないが、讓吉が夜遲く歸る時でも、やつぱり同じく彼等が殘つて居たやうに思ふ。來る年も、來る年も、來る月も來る月も、毎日々々他人の下駄をいぢると云ふ、單調な生活を繰り返して行つたならば、何んな人間でもあの二人の爺のやうに、意地惡に無口に、利己的になるのは當然なことだと思つた。何時まで、あんな仕事をして居るのだらう。恐らく死ぬまで續くに違ひない。恐らく彼等が死んでも、入場者の二三人が、

「この頃あの下足番の顏が見えないな」と、輕く訝かしげに思ふに止まるだらう。先の短い年であり乍ら、殘り少い月日を、一日々々あゝした土の牢で暮さねばならぬ彼等に、讓吉は心から同情した。

圖書館の下足の爺何時迄か

下駄をいぢりて世を終るらん

これは、讓吉がいつだつたか、ノートの端にかき付けた歌だつた。もとより拙かつた。が、自分の心持、下足番の爺に對するあの同情的な心持丈は、出て居るやうに思つてゐた。

あの爺も不相變居るに違ひないと思つた。まだ俺の顏も、見忘れては居まいと思つた。高等學校時代に絕えず通つて居た上に、讓吉は彼等と一度いさかひをした事があつた。それは、何でも高等學校の二年の時だつたらう。

彼は、其の日何でも非常に汚い尻切れ草履をはいて居た。その頃、彼は下駄などは殆ど買つたことがなく、大抵は同室者の下駄をはき廻つて居たのだつたが、その日は日曜か何かで、皆が外出したので、はくべき下駄がなかつたのであらう。彼が、平素の通り、その汚い草履を手に取つて、大男の方へ差し出すと、彼はそれを受け取つて、直ぐ自分の足のもとに置いたまゝ、しばらく待つても下足札を吳れようとしなかつた。

「何うしたんだ？　札を吳れないか」と、讓吉は少しムッとしたので、荒つぽく云つた。

「いや判つて居ます」と、大男はいかにも、呑み込んだやうに、首を下げて見せた。
「君の方で判つて居ようが居まいが、札を吳れるのが規則だらう」
「いや間違へやしません。あなたの顏は知つて居ます」
「知つて居ようが、居まいが問題ぢやない、札を吳れたまへ。規則だらう」
「いくら規則でも、あんまりひどい草履ですからね」と、彼は煙管を、火鉢の緣にやけに叩いた。
「人を馬鹿にするな。何だと思ふんだ。幾ら汚くても履物は履物だぜ」讓吉は本當に憤慨して云つた。
「あなたの帽子が、何處の學校の帽子か位は知つて居る。が、何も札を上げなくたつて、間違はないと云ふんだから、いゝでせう」と、爺はまだ頑强に抗辯した。讓吉は、自分の方に、十二分の理由があるのを信じたが、大男の足の直ぐ傍に、置かれて居る自分の草履を見ると、何うもその理由を正當に主張する勇氣までが、碎けがちであつた。下足に供へてある上草履のどれよりも、貧弱だつた。先方から借りる上草履よりも、わるい草履を預けながら、下足札を要求する權利は、本當から云へば存在しないのかも知れなかつた。
その時の喧嘩の結末が、何う着いたか、讓吉はもう忘れて居る。自分の方が勝つて下足札を貰

つたやうにも思ふし、自分の方が負けて到頭下足札を貰へなかつたやうにも思へる。
が、兎に角あの事以來、あの大男の爺は自分の顏を、ハツキリと覺えて居るに違ひないと彼は思つた。無論、讓吉はさうした喧嘩をした爲に、あの男に對する同情を、少しも無くしはしなかつた。あゝした暗い生き甲斐のない生活を、あはれむ心は、少しも變つて居なかつた。
彼が、どんなに窮迫して居る時でも、圖書館へ行つて、彼等が昔ながらに、あの暗い地下室で、蠢めいて居るのを見ると、俺の生活がこの先どんなに逼迫してもあすこ迄行くのにはまだ間があると云ふやうな、妙な慰めを感ずると同時に、生涯日の目も見ずに、あの地下室で一生を送らねばならぬ彼等を、悼ましく思はずには居られなかつた。
あの二人は、やつぱり居るに違ひない。小さい火鉢にぶつゝりとも云はずに、くすんだ顏をして向ひ合つて居るに違ひない。あの生活から脫却する機會は死ぬまで彼等には來ないのだと讓吉は思つた。あの圖書館へ來る幾百幾千と云ふ青年が、多少の落伍者はあるとして、それ〴〵目的を達して、世の中へ打つて出るにも拘らず、あの爺は永久に下足番をして居る。あの暗い地下室から、永久に這ひ出されずに居る。さう思ふと、讓吉は自分の心がだん〴〵暗くなつて行つた。二

年前迄は、ニコ〳〵の絣を着て、穴のあいたセルの袴を着けて、ニツケルの辨當箱を包んで、毎日のやうに通つて居た自分が、今では高貴纖の揃か、何かを着て、この頃新調したラクダの外套を着て、金緣の眼鏡をかけて、一個の紳士と云つたやうなものになつて、下足を預ける。自分の顏を知つて居るかも知れないあの大男は、一體どんな氣持で自分の下駄を預るだらう。あの尻切れ草履を預けて、下足札を貰へなかつた自分と、今の自分とは夢のやうにかけはなれて居る。あの草履の代りに、柾目の正しく通つた下駄を預けることが出來るが、預る人はやつぱり同じ大男の筈だ。さう思ふと、讓吉はあの男に、心からすまないやうに思はれた。何うか、自分を忘れてしまつて居て呉れ、自分がすまなく思つて居るやうな氣持が、先方の胸に起らないで呉れと讓吉は願つた。

そんな事を思ひながら、何時の間にか、美術學校に添うて、圖書館の白い建物の前に來て居た。左手に婦人閲覽室の出來て居るのが、目新しい丈で、門の石柱も玄關の樣子も、閲覽券賣場の樣子も少しも變つては居なかつた。彼は閲覽券賣場の窓口に近づいて、十錢札を出したから、

「特別一枚！」と、云つた。すると、思ひがけなく、

「やあ長い間、來ませんでしたね」と、中から挨拶した。讓吉は駭いて、相手を凝視した。それ

はまぎれもなくあの爺だつた。あの下足の爺だつた。

「あゝ君か！」と、讓吉も少しあわてゝ頓狂な聲を出した。向ふはその太い眉をちよつと微笑するやうな形に動かしたが、何も云はずに青い切符と、五錢白銅とを出した。

讓吉は、何とも云へない嬉しい心持がしながら、下足の方へと下つた。死ぬまで、下足をいぢつて居なければなるまいと思つたあの男が、立派に出世をして居る。それは、判任官が高等官になり勅任官になるよりも、もつと仕甲斐のある出世かも知れなかつた。獸か何かのやうに、年百年中薄闇にうごめいて居るのとは違つて、滿園の上に坐り込んで、小綺麗な切符を扱つて居ればいゝ。月給の昇額はホンの僅かでも、あの男に取つては、どれほど嬉しいか判らない、あんなに無愛想であつた男が、向ふから聲をかけたことを考へても、あの境遇に十分滿足して居るに違ひないと思つた。人生のどんな隅にも、何んなつまらなさうな境遇にも、やつぱり望みはあるのだ。さう思ふと讓吉は世の中と云ふものが、今迄考へて居たほど暗い陰慘な處ではないやうに思はれた。彼は平素よりも、晴々とした心持になつて居る自分を見出した。

が、それにしても、もう一人の禿頭の小男は、どうしたらうと思つて注意して見ると、その男

もやつぱり下足には居なかつた。無論、圖書館の中でなくてもいゝが、あの男も世の中のどこかで、あの男相當の出世をして居て呉れゝばいゝと、讓吉は思つた

――大正八年十一月――

肉親

私は、肉親と云ふものに多くの親愛を、感じ得ない人間だつた。義務や責任丈を感じて、――その義務や責任が、あまり重すぎるせゐか、私は親愛を感ずる餘裕がないと云ふやうに、自分で云ひ譯をしたのだつた。

今、生きてゐる父母に對してさへ、その生活を保證したければならないと云ふ重くるしい義務を感ずる外は、私は無關心である。

今、私が去年亡くなつた兄のことを書くのも、弟としての特別な愛情が、あるのではない。今私の心に、外に何にも書くことがないので、亡くなつた兄の事でもかいて見ようかと思ふ丈である。

私達の兄弟は、不思議に親密でなかつた。それかと云つて、仲が惡いのでもなかつた。兄弟が、親しくすると云ふことが、妙にテレくさいと云つたやうな、氣づまりだと云つたやうな氣持から、

いつの間にか、疎々しくなつて行つたのだつた。私は、兄弟と長い間同じ家に居て、ロク〳〵向ひ合つて、話し合つたことがなかつた。お互に用があるとか、訊きたいことがあると、大抵は母を通じて辨じたのだ。

「お母さん！　寛の試驗は、どうだつたの？」

兄は、私が目の前にゐても、私には訊かないで、母に訊いた。私も、兄に直接口を利くのは嫌だつた。長兄とは、それでも趣味が、何處か似てゐたので、時々一緒に釣に行つたりすることがあつたが、仲兄とは何處へも一緒に行つたことがなかつた。一緒に行つたことがたいばかりでなく、同じ中學に兄が通つてゐると云ふことが、私は何だか嫌だつた。私は學校で赤ちやけた小倉の服を着てゐる、兄の姿を見ても、何だか氣の引けるやうな恥しいやうな氣持がした。人から、兄のことを云はれても私は嫌だつた。

何故、そんなに兄が嫌だつたのか、私にも十分分らない。が、恐らく一番近い原因は、兄があまり自分に似すぎてゐるためであつたゞらうと思ふ。

兄は、容貌も私に似てゐた。歩き態や眼の近いところなども同じだつた。兄は、つまり容貌化されてゐる私だつた。その兄の無恰好な歩き態や容貌が、私に絶えず「お前もあんな風なのだ！

お前もあんな風なのだ！」と、反省させてゐるのだつた。醜女が、鏡の前に絶えず、引き据ゑられてゐるのは、苦痛に違ひない。私も、それと同じやうに、私に似た兄が、絶えず眼の前で、うろうろしてゐることは、不快であつたのに違ひないのだ。

「君は、兄さんとよく似てゐるぜ！」

友達から、さう云ふ挨拶をされることは、私が中學時代に感じた苦痛の一つだつた。

性格的にも、兄が私と同じ缺陷を持つてゐることが、私には嫌だつたのだ。つまり、兄は私の外貌なり性格なりの缺陷の見本だつた。

私は、私自身の缺陷が嫌だつた。が、私自身の缺陷に對する嫌悪は、私自身の他の美點に就いての、自惚や自信で緩和されるが、兄の缺陷に對する嫌悪は、さう云ふ意味では、緩和されなかつた。

兄は、それでも私より秀れてゐる點もあつた。それは、兄が私よりも小心であつたことだ。律義であつたことだ。さう云ふ性質を、私の國の方言では、氣が固中だと云つた。固中と云ふ字は、どんな漢字を當てればいゝのか、私には分らない。私の母は、よく、

「良平は氣が固中だから、よく腹を立てる」と云つて、私の亡き兄をかばつた。

お正月が來ると、私の家では樂しみに、勝負事をした。母も、私の伯母達などゝ集まつて、花札を弄んだ。それは、八八ではなく、たゞ當り前に札を合せて、數で勝負を爭ふのだつた。たゞ、萩の十の猪の繪の附いてゐる札丈が、ワンと呼ばれて、トランプの戲奴(ジョウカア)のやうに、どんな札をでも無制限に、喰ひ付いて引つ掠(さら)つて行けるのだつた。

私達兄弟も、よくそれを見習つて、零碎な金を賭して、いろ〳〵な勝負事をした。摺鉢こけらしと云つて、摺鉢の緣から、穴の開いた一文錢をこけらし込む。一文錢が、摺鉢の眞中に幾つも溜る。自分のこけらした一文錢が、中に溜つてゐる一文錢に重ると、重つただけの一文錢を勝ち得る遊びもあつた。穴一と云つて、一文錢を幾つか宛出し合つて、それを壁に投じる。跳ね返つて來た一文錢を、自分の手中の一文錢で打ち當てゝ取る遊戲があつた。そんな金をかけた遊びには、私も兄との平生の疎々(うとく)しさを忘れて、つい一生懸命に勝負を爭ふのだつた。そんな時、私は兄と必ず喧嘩をした。その原因は、私が狡いことをするので、氣の固中な兄が、腹を立てる場合が多かつた。

兄と喧嘩をするのは、こんな場合だけではなかつた。ともすると、私の考と兄の考とは衝突した。ある時、私の家で遠方の人に金を返さなければならないことがあつた。それは、私の長兄の

遊び友達で、その金も長兄が遊びのために借りた金だつた。私は、それを爲替で送つたらいゝと云つた。兄は、相手が信用の出來ない人だから、爲替では不安心だと云つた。相手が信用の出來ない人だから、受取つても受取らないと云ふかも知れないと云つた。私は兄の人を信用しない小心さを嗤つた。兄は怒つて私に飛びかゝつて來た。それと同じやうな事があつた。私の長兄の妻の伯父が、監獄へ看守として採用されることになつて、私の長兄に保證人になつて呉れと云つて、頼んで來た。兄は、それにも極力反對した。保證人なんかしてゐると、本人が使ひ込みをしたときは、辨償しなければならない。そんな事になると、大變だと兄は云つた。長兄の妻の伯父と云ふ人も、あんまり信用の出來る人ではなかつた。でも、看守と云ふ微職に居る者が、どうして監獄の金などを使ひ込む機會があらう。それに、親類同志保證人にでも、お互に成り合はなければ、何處に成つて呉れ手があらう。私は、そのときもう寢床に入つて、兄が父や母に說いてゐるのを聽いてゐたが、兄の固中な考へ方を、どうしても默つて聽いてゐる譯に行かなかつたので、私はわざ〳〵起き上つて行つて、兄に反對した。氣短な兄は、直きに私に飛びかゝつて來た。二人は格鬪した。が、その頃兄はもうよほど、身體を惡くしてゐたので、私に立ち向つて來ると同時に、息をせい〳〵切らしてゐた。私達は摑み合つたが、兄の腕に少しの力もないので、少し悲し

い心持がした。

このやうに、私達兄弟は、少しも打ち解けないで暮した。お互に身の上の相談をするなど云ふことは、思ひも及ばないことだつた。兄の愛も親しみも感ずることが出來なかつた。深い心の奥は知らず、表面丈は、偶然同じ家に生れ合せてゐるので、止むを得ず同居してゐると云ふ丈だつた。それでもたゞ、一度丈、私は兄らしい配慮を受けたことがあつた。それは、私がまだ高等小學校の二年か三年であつた。私はある晩、遅くまで町で遊んで、――その頃、毎晩のやうに私は夜遊びをした――十時頃、歸つて來る道で、うどんやへ立ち寄つた。すると、兄がやつぱりその家で、うどんを喰つてゐた。私は、兄が居るのなら、入るのでたかつたと思つたが、もう遅かつた。こんなとき、私達兄弟は決して、口を利かなかつた。兄は、私の顏をヂロリと見た丈だつた。私も知らない振をして、兄となるべく遠い場所へ腰をかけて、うどんを喰つた。私は、兄が早く歸つて呉れればいゝと思つてゐた。が、喰ひ終つて勘定をすませて、歸りかけた兄は、何と思つたのか、ツカ〳〵と私の傍へ來た。

「おい！　モヱイ持つてゐるか」

それは、錢（マニイ）と云ふ言葉を、私達は訛つてさう云つてゐたのであつた。

「うむ。持つとる」

私は、言下にさう答へた。兄は、私の代金を拂つて呉れるつもりだつたのだ。兄の愛、それは愛でなく單なる配慮であるかも知れないが、とにかくそんなものを感じたのは、これが最初でそして、これが終りだつた。それ丈に、今でも、そのときの光景が、奇異な感情と一緒に、私の心に時々浮んで來る。

が、私が長ずるに從つて、だん〳〵兄にあきたらなく思ひ出して來たのは、兄の怯懦な煮え切らない生活態度だつた。私の目には、眞面目に人生を渡らうとする勇氣も覺悟もないやうに見えた。兄は、中學の二年のときに、一度落第した。三年のときには、二度つゞけて落第して、學校を醫（ど）した。が、兄のは云して頭が悪いためではなかつた。小學校時代には、相當の秀才だつた。たゞ中學に、入つてからはだらしなく怠けたゝめだつた。兄は、落第をしても、家にノラクラしてゐた。私の母は、善良な、子供を甘やかす母だつたが、殊に兄には寛大だつた。兄の方が、長兄よりも家では信用があつた。母は、氣短な兄の氣を損ずるのを恐れて、兄に躾（しつけ）らしい躾は少しもしなかつた。また、私の父は、藩の文學の家に生れたのだから、當然教育家でなければならないのだが、子供の教養などに就いては、何の意見もない、從つて何の干渉もしない平凡な父だつ

た。私の家は、極度に貧しかつたが、兄にとつて、決して住みにくい所ではなかつた。兄は、三十六で死ぬまで、家でノラクラしてゐた。

尤も、その間に、兄はいろ〳〵な職業に就かうとした。市立の病院へ、藥局生の見習として勤めた事もある。私の父が、その時その病院の會計係をしてゐたので、その傳手で入つたのだつた。私は、兄が其處で藥劑の知識を得て、藥劑師にでもなつて呉れゝば、どんだにいゝかと思つてゐた。が、少し調劑にもなれて、見習から給料を貰へる雇にならうとすると、父が會計に居て、子が藥局にゐるのでは、その間に何等かの不正が行はれはしないかと云ふやうな、田舍の市役所の吏員でもが考へさうな理由から、兄の採用は頓挫してしまつたのである。兄は間もなく病院を廢した。が、兄は藥劑や處方の知識を得たので、その知識を盛んに家庭で振り廻した。兄が、氣短な聲で怒鳴り立てると、母や長兄の妻などは、一も二もなく信じてしまふのだつた。

「家には博士が居るから」

母は、そんなことを云つて長兄の子供の病氣などには、よく兄の意見が行はれるのであつた。

兄は、その後土地の郵便局の吏員採用の試驗を受けて、運よく通つた。兄は、その時に出た四則の問題を、解き得たことが、得意らしく、後々までもよくその自慢をした。「甲乙二つの汽船あ

り……」と云つたやうな問題だつた。兄は、自分の新に得た位置が可なり得意だつたと見え、よく自慢をした。

「中學校を卒業したつて、駄目ぢや。山路や花房やこし、郵便局へ來てゐるけれども、俺の半分ほどの働きもありやせん」

山路、花房と云ふのは、兄の同窓であつたのだが、兄が二度も三度も、落第してゐる中に、中學校を卒業して、同じ郵便局へ勤めてゐるのだつた。私は、その頃中學の五年にゐたので、兄が中學を貶すのが不快だつた。

「中學校は、郵便局の事務員になるために、卒業するのぢやありやせん」

私は、よつぽどさう云ひたかつたのを、默つてゐた。兄は、入ると直ぐ履歴書を出したが、それには中學四年修業と書いてあつた。私は、兄がつまらない嘘を吐くなと思つてゐた。

が、兄は可なり順調に進んだ。氣の小さい兄が、大勢の間に交じつて辛抱してゐるのを母はよく賞めてゐた。兄が、郵便局へ勤めるやうになつてから、半年ばかり經つた時だつた。ある晩、私が外から歸つて來ると母は待ちかねたやうに云つた。

「お前どうかならんか知らん」

「何が」

私は、さう答へて灯の暗い座敷の中を見た。其處には、兄を中心に父や母や長兄が、集まつて相談してゐた。兄が、私の方を向いた顔は、可なり當惑に充ちてゐた。

話を聽いてみると、兄の勧め振がいゝので、今度履から書記に任用して呉れることになつたのだが、それには中學の三年を修業してゐると云ふ中學校の證明書が必要だと云ふのである。兄の履歴書を見てゐる係長は、兄が四年を修業してゐるものと信じて、兄に證明書を持つて來るやうに命じたのだつた。

「寳！　何うにかならんか知らん。お前が證明書を貰つて來て、それを兄さんが使ふことは出來んか知らん。」

母はそんな分らないことを云つた。兄が證明書を貰へないと云ふことは、書記に任用される——それが昇進の第一階段であるが——望みが失くなるばかりでなく、兄が履歴書に嘘を書いたと云ふことから、現在の位置を失ふ危險さへ伴つてゐたのである。一家は、思案につきて、到頭兄が履歴書の虚僞を白狀して、罪を謝するのが、一番いゝと云ふことに落着した。私は、兄がわづかに得た昇進の緒をさへ、その中學生時代のふしだらから失はなければならないのを、氣の毒に思

ふと同時に、はがゆく思つた。

それでも、兄は履歴書の嘘のために、免職にはならなかつた。二三年も郵便局で辛抱してゐた。その頃、兄はある家から、養子に望まれた。むろん、餘りいゝ家からではなかつたが、一家がわづかに、口を糊して行く位のものは、ある家らしかつた。その頃、私は中學を出て上の學校へ行くに學資がないために、養子に行つてでも、學問をして見たいと思つて居たので、兄が自分で獨立して一家を持ち得る、唯一の方法である養子の縁談を、直ぐ斷つたのが、私にはあきたらなかつた。

それから間もなく、私は東京へ來たので、兄の生活については知らなかつた。私の國に、一等郵便局が無くなるので、郵便局をよさねばならなくなつた。その時に、大阪へ行けば使つて呉れると云ふのを、兄は行かなかつた。私は、兄が大阪へ行つて、何故自分の運命を拓かないかと云ふことに就いて、可成り不滿だつた。兄には、自分の生れた家を、離れる氣はなかつたのだ。貧しい家も、兄に取つては快い巣であつたのだらう。母が、また兄をあくまでもかばつてゐた。

「良平は、内氣で病身ぢやから、旅へなどはいけんのぢや」

母はよくそんなことを云つてゐた。私の長兄がまた、重大なことに就いては、決して何も云は

ない男だつた。長兄は若い時に、少し遊蕩したが、その後師範を出てコツ〳〵と教員をしてゐた。兄が、二十年近くノラクラしてゐても、何一つ小言を云はなかつた。

兄は、その間怠けてばかり居るのではなかつた。私の、もう、ぼんやりした記憶に依ると、一度郵便局へ復職したやうである。そして、一時は長兄よりも多い月給を取つてゐたことさへあつた。私が歸省したときなどにも、母は、

「大きい兄さんより、小さい兄さんの方が、月給が多いんぢや」

と、兄を持ち上げるやうにした。それも長兄が十三圓で、兄が十四圓と云ふ一圓の相違であつた。母は、なぜだか長兄よりも仲兄びいきだつた。コツ〳〵と働いてゐる長兄は、長男だから仕方がないと云ふやうに、あまり劬らないやうに見えた。

月給を取つてゐる頃の兄は、長兄の長男を可なり可愛がつた。ほとんど、溺愛してゐた。私が、長兄の長男を、毆つたことから、兄と喧嘩をしたことさへあつた。

その中に、また兄は仕事を失つた。死ぬ前の五六年は、家にのらくらしてゐた。胃病が、それも不攝生から來たものだが――だん〳〵重くなつて、病人のやうに色が青く、絶えずぶら〳〵してゐた。夏休みなどに、歸省して見ると、兄は狹い家のあちらこちらで、晝寢ばかりしてゐた。

その頃の兄は、一文の小遣もなかつたらしい。よく、臺所で薪を割つたり、魚を料理したりする兄を見ながら、母は――

「良平にも、五十錢でも小遣ひをやらうと思つてゐるんぢやけども、何分暮しの方が、不自由ぢやけん……」

と云つてゐた。郵便局へ勤めてゐた頃に、兄は二三枚の着物をこしらへたが、今では收入の見込が少しもない兄は、その衣類をなるべく保存するために家ではボロ〳〵の乞食のやうな着物を着てゐた。

長兄の長男は、兄からいろ〳〵な物を買つて貰つてゐた頃は、「おつさん！　おつさん！」と云つて、よく兄につきまとつてゐたが、その頃はあまり近よりもしなかつた。小遣のない兄は、甥を愛するにも愛しようがなかつたのである。

私の家は、その頃窮乏の底に陷ちてゐた。教員としての長兄の月給では、どうにも暮して行けないのだつた。その上長兄の子供は、二年隔き位に、一人宛殖えて行つた。私の家は、士族であつたから、住む家丈はあつたのだが、それが私の學資のためと、家の生計の不足とで借金の抵當になつてゐた。私は、もうその頃、大學にゐたが、また他人から學資を貰つてゐたので、もう

經濟的には家を頼すことはなかつたが、私のために負うてゐる借金のことを考へると、また私が將來間接に保證しなければならぬ、一家の生活のことを考へると、私はいつまでも暗澹たる氣持にならずにはゐられなかつた。

大學を卒業しても、文學士としての收入で、一家の借金を返したり、十人に近い家族の生活を間接ながら保證することが、可能かどうかさへ疑はれた。そんな事をしてゐると、自身の生活とか幸福とかは、いつが來たら、得られるのか見當が立たなかつた。私は、どんな時でも、家のことを考へると、底なしの淵に、臨んでゐるやうな氣持がした。その底なしの淵は、私の將來の旁力や希望を悉く吸ひ込んでしまふやうに思はれた。私は、肉親と云ふものを呪はずにはゐられなかつた。その中でも、私は家でブラ〳〵してゐる兄を呪はずには居られなかつた。長兄は、兎に角もコツ〳〵と一家を支へるために働いてゐるのだつた。が、兄はもう四五年も、家で醉生夢死してゐるのであつた。しがない小學教員の家庭に、兄が昊然として、いつまでも厄介者になつてゐるのが、私にははがゆくて堪らないのだつた。兄さへ、少しでも働いて呉れたら、一家の暮しもいくらかでもよくなり、從つて私に將來殘された負擔が少しでも輕くなると思つてゐた。

私は、兄を責めたいと思つた。が、實際よく考へて見ると、兄は中學を廢してから、いくらか

でも月給を取つて、直接間接に家を助けてゐるが、私は中學を出て、もう八九年にもなるが、學資のために家に借金を負はせた外は、一文だつて儲けて居ないのだつた。

歸省したとき、母は兄をかばふやうに云つた。

「良平も、この頃は非役で困るのぢやけど。半病人のやうに、ぶら〳〵してゐるし、郵便局やつて何處やつて、中學校をちやんと出てゐる若い人が澤山行くので…」

さう云はれて見ると、三十を越してゐる病身の兄に、それほど勤口が容易に見付かる譯はないのであつた。その上、もう三十を越してゐる兄には、何一つ職業を覺える餘地も力もないのであつた。私は、兄が、その頃よく新聞に廣告を出してゐる惡筆矯正を標榜する習字の會の會員になつてゐるのを見て、むしろ悲しい氣がした。

その中に、私は大學を出た。が、就職口は、容易に見付からなかつた。私が、就職口がなくて困りぬいてゐるのに、母は早くも送金を促して來た。私は、腹が立つた。が、困りぬいてゐる一家のことを考へると、母のさうしたあわたゞしさを咎めることは出來なかつた。二三ヶ月してある新聞社に入ると、私はその月給の中から三分一以上を國へ送らねばならなかつた。また、それが一年送つても、二年送つても、五年送つても十年送つても、決濟する當はないのだつた。私

は、わづかな月給と大きな負擔とを考へると、肉親の負擔の重くるしさを感ぜずにはゐられなかつた。私は、社會上のいろ〳〵な慣習に反抗することが出來た。が、肉親に對する負擔丈は、どうしても拂ひ除けることの出來ない羈絆だつた。母は、少しでも送金が遲れると、屹度催促の手紙を書いた。私は、その手紙を見ると、一も二もなく參つてしまつて、その日一日は憂鬱になつた。私は、人に對して割合好意を見せることの出來る人間だが、その好意を示すことが強制されたり、義務になつたりすると、掌を飜すやうに、その事が嫌になるのであつた。私は、肉親に取つて大なる義務を感ずれば感ずるほど、私の心は肉親に對して、冷たくなつて行くのだつた。

私が、少しでも送金するにつれ、私は兄の怠惰を前よりも、もつと非難し、また非難する資格があるやうな氣がした。私は、母に送る手紙で二三度、兄の怠惰を責めたやうな氣がする。

兄の死んだ大正八年には私は、もういくらか世の中に名を成してゐた。學生時代には、思ひがけもない出世だつた。私は、家の借金を返す當が出來て來た。私は、家の借金を返すために、將來の送金の參考に、一家の經濟狀態を訊き合はした。その返事は、母の名前ではあつたが、兄の筆蹟であつた。その中の收入の部に、

一金五圓也　　良平市役所へ勤務

と書いてあつた。私は兄が、私の非難に聽いて、市役所へ勤めてゐるのだと思ふと、兄のために欣ぶと同時に、私は悲しかつた。屹度、清潔係とか、そんなものをやつて、收入の一部を家へ出してゐるのではないかと思つた。

兄が、キトクだと云ふ電報が來たのは、その年の六月であつた。私は、その時兄が、死んではならないとは決して思はなかつた。私は、これから決して一家を成す當のない病身の兄を考へ、いつまでも貧しい長兄の家にぶら〳〵してゐることを考へると、私は死ぬのなら今だと思つた。殊に、兄を愛してゐる、また兄弟の中では、一番母親と親しい兄は母が存命してゐる中に、死んだ方が、どれほど幸福であるか分らないと思つた。私は、見舞の手紙も見舞の電報も打たなかつた。實際私は病狀をきゝ合はせたり、恢復を祈つたりする氣は、少しもなかつたのである。たゞ私は、電報爲替で金を送つた。私のその時の生活から云つて、それは相當の金であつた。私は、そして兄の死去の知らせが來るのを待つてゐた。その知らせは、豫想にはづれて、容易に來なかつた。私は、恢復したのではないかと思つたが、さう思つたからと云つて、別に嬉しい氣はしなかつた。一週間ばかり經つて、兄が死んだと云ふ電報が來た。流石に歸れとは、書いてなかつた。私は、その時家に來合せた若い友達と、ノートラと云ふトランプの遊びをしてゐたが、電報を一瞥する

と、また何氣ないやうに、その遊びに耽つてゐた。昔の武將が、肉親の戰死を聞いても驚かず、「芒にまじる蘆の一群」と云ふ句に、「古沼の淺き方より瀾となりて」と云ふ上の句を附けてから、やつとその死を發表したと云ふ話よりも、もつと冷靜であつた。が、流石に心の中では、兄の平凡な無爲な一生を考へてゐた。私は、あはい淋し味を感じた。が、それは兄の死から、當然弟の身にふかくひゞいて來る死に對する哀愁で、兄の亡くなつたことに對する悲嘆ではなかつた。私は、悔みの電報も手紙も出さなかつた。たゞ、葬式の費用を電報爲替で、送つただけだつた。

長兄からの、手紙が屆いた。「天もこの善人の死を悲しみしにや、その日は頗る晴天にて……」と、葬式の模樣をかいてあつた。私は、長兄のやうに兄を善人として、ゆるすことは出來なかつた。私だつたら、惡事をしてでもいゝから、長兄の家などに厄介にならない方が、どれほどいゝか分らないと思つた。たゞ、私は長兄が、二十年近く厄介になつてゐる弟に對して、最後までもよい感情を持つてゐたことに打たれた。

むろん、私は國へは歸らなかつた。が、丁度その晩は、原稿の締切日で、私は催促を受けた。私は、かく題材を少しも持つてゐないのだつた。

私は、謝絶の言葉に窮した。

「實は、國の兄が死んだので……」

さう云ふと、善良な記者は、一も二もなく、私の云ふことを信じ驚いた。

「それは、どうもお氣の毒さまですな。それぢや、今月はむづかしいでせうな」

私は助かつた。兄が、私に與へて與れた功德は、これが少い中の一つであつたかも知れない。が、その代りその書店から、私はお香を貰つて、その處置に窮したのであつた。

私は、その年の秋、國へ歸つた。母などはよく兄の死前死後のことを語り度がつた。私は、努めて聽くことを避けた。

「誰よりも、良平はお前の名前が出るのを喜んで居たのぢやぜ。死ぬ前も、お前の「我鬼」と云ふ本が、まだ出んか〳〵云うて、待つてゐたのぢやぜ」

それを聽いて、私はまた憂鬱になつた。兄などと云ふものは、私に取つて面を背けたい現實の一つに違ひなかつた。

――大正十一年二月――

解　説

『啓吉物語』といふのは、だれが、かういふ題名をつけたか知らないが、菊池寛が、おそらく、はじめて書いた、自叙傳ふうの、いくつかの、小説を總稱する題名のやうなものである。さうして、これらの小説は、みな、菊池が、いはゆる文壇に、あらはれない前の、あらはれた前後の、いろいろな出來事や氣もちを、自分を中心にして、世にありふれたことを、ほとんど『カザリ』氣なく、『カザリ』のない文章で、かいたものである。

「自分を中心にして、世にありふれたことを、ほとんど『カザリ』氣なく、『カザリ』のない文章で、かいた小説」などといふものは、菊池のまへに、田山花袋、岩野泡鳴、武者小路實篤、その他もつくつたけれど、これらの人たちの小説には、その題材が、いくらか小説らしいところがあつた。ところが、この本にをさめられてゐる小説には、もとより、いくらか小説らしいところもあるけれど、どの小説の主人公も、そのものの考へかたが、いはゆる小説らしいところも、ふつ

うの人間とちがつたところも、すこしもなく、まつたく平凡で、常識的である。いひかへると、平凡なことを、平凡なかんがへかたを、平凡に、カンタンに、書いただけのものである。これは、しかし、だれにも、できさうなことにおもはれ、書けさうにかんがへられるが、じつは、できない。つまり、菊池寛でなければ、できない作品であり、つくれない作品である。

かういふ事だけでも、菊池のいはゆる『啓吉物語』(あるひは『啓吉』もの)は、菊池の數おほい作品のなかでもつともすぐれたものであるばかりでなく、大正の文學史のうちですぐれた小説のひとつである。それに、『わたくし』の、このみでいへば、考へでのべれば、菊池が日本の文學史(大正の文學史)にのこしたものは、ただ、この『啓吉物語』だけである。

さて、『啓吉物語』といふ題で出されたこの本のなかにをさめられてゐる六篇の小説だけ(このほかにも、いはゆる『啓吉』ものは數篇ある)みてもわかるとほり、『無名作家の日記』の「俺」と『肉親』の「私」はべつとして、「啓吉」が主人公の名になつてゐるのは、『父の模型』だけで、みらるゝやうに、『大島が出來る話』と『出世』とは「譲吉」であり、『葬式に行かぬ譯』は「雄吉」である。しかし、「啓吉」にせよ、「譲吉」にせよ、「雄吉」となつてゐても、これらの主人公は、それぞれ、その頃の(菊池の三十歳あとさきの時分の)菊池その人であることにかはりはな

い。

私は、これらの小説が發表されたとき、ほとんどみな、發表された雜誌でよんで、私などの見方や考へ方とほとんど反對であるために、いや、そればかりでなく、そのとき、そのとき、かなり感心した。ところが、こんど、これらの作品を、ある小説は二三ども讀んだが、なんどめかで、讀みかへしてみて、よみかへしてみると、「ああ、これか、」といふやうな氣がする作品がいくつかあつた。

菊池は、かつて、(いまから二十年ぐらゐ前であつたか、)『作家凡庸主義』といふ題の評論を、かいたことがある。

この評論は、そのころ、(今も、)菊池らしくて、おもしろい、とおもふが、また、おもしろくない、ともかんがへる。

いま、この「解説」の文章をかきながら、私は、ふとこの菊池の『作家凡庸論』をおもひだした。さうして、これらの小説は、『作家凡庸論』をかいた人の作であり、その『作家凡庸論』は、これらの小説についての、作者の、「解説」のやうな文章ではなかつたか、といふやうなことを、私は、ふと、かんがへた。

この私のかんがへかたが、まちがつてゐても、まちがつてゐなくても、私は、やはり、菊池は、もちろん、よい意味で、おもしろい人であり、(ふつうの人にわからぬ氣のつかぬ、おもしろい人であり、)これらの作品は(『啓吉物語といふ題でふくまれてゐる、あらゆる作品は、)すぐれた小說であり、おもしろい、と、おもつてをり、信じてゐる。

これらの小說は、あきるやうでありながら、あきないところがあり、退屈なやうでありながら、けつして退屈ではないからである。

ふたたび、わたくしごとをいふと、私には、やはり、これらの『むかし』の菊池の小說は、いはうやうなく、なつかしく、よんで、よみかへして、やはり、たのしい。

宇野浩二

昭和二十四年二月十五日初版印刷
昭和二十四年二月二十日初版發行
昭和二十五年十二月十日再版發行

日本文學選
啓吉物語

著者　菊池寛
發行者　神吉晴夫
印刷者　渡邊清
印刷所　第一中外印刷株式會社
東京都千代田區飯田町二ノ二〇

定價　七十圓

發行所　株式會社　光文社
東京都文京區音羽町三ノ一九
電話九段(33)一三一—一三九
振替東京一一五三四七番

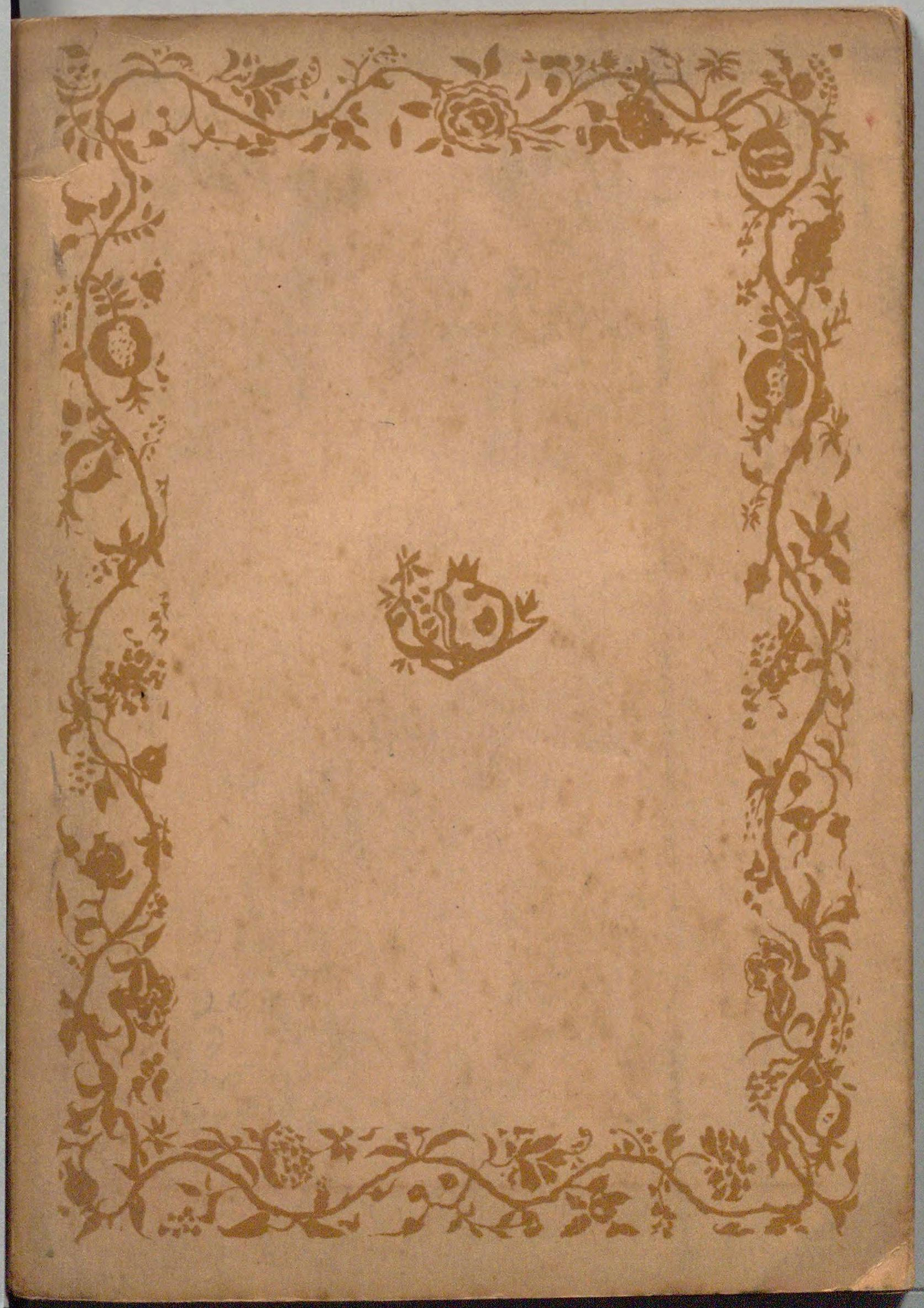
光文社版

日本文學選

坊ちやん　夏目漱石　円
草枕　夏目漱石
夢十夜　夏目漱石
硝子戸の中　夏目漱石
吾輩は猫である（上・下）　夏目漱石　各
それから　夏目漱石
三四郎　夏目漱石
門　夏目漱石
こころ　夏目漱石
道草　夏目漱石
彼岸過迄　夏目漱石
菜穂子　堀辰雄

伊豆の踊子　川端康成　円
暦　壺井栄
不惜身命　山本有三
母　代舟橋聖一
天の夕顔　中河與一
機械　横光利一
富嶽百景　太宰治
蒲團　田山花袋
厚物咲・碑　中山義秀
枯野の夢　宇野浩二
死者生者　正宗白鳥
土（上・下）　長塚節　各
たけくらべ　樋口一葉
一握の砂　石川啄木
呼子と口笛　石川啄木

馬車物語　石坂洋次郎　円
人生実験　平林たい子
浮雲　二葉亭四迷
平凡　二葉亭四迷
愛慾　武者小路実篤
別離　若山牧水
酒ほがひ　吉井勇
みだれ髪　與謝野晶子
桐の花　北原白秋
黒髪　近松秋江
運命　國木田独歩
独歩集　國木田独歩
武藏野　國木田独歩
独歩集第二　國木田独歩
濤声　國木田独歩



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black